

(表紙)

重豪公

自明和四年閏九月  
至同 六年 六月

追舊記雜錄 卷百廿四

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(定勝)

吉野橋御堀築地、入來院石見殿前御堀、南泉院下御堀連  
本文被申越候趣致承知候、御堀浚并北郷主膳方申修用之儀於其元段、開合被  
く埋候付如元浚度、元祿十六未年御願有之、如元浚外様  
申付、御留守居申出候趣委曲被申越相連候、被申越候通、右兩様前之通而  
被仰渡、御取附無之御延引相成外趣を以、寶永三戌年其  
被差置、改而御留等被仰出方ニ書及簡敷儀と雖又申談速 貴聞、  
元より御當地に問合有之、

主膳方主手修用之儀、其元より何分被申越迄者差留置候得共、右次第ニ候故緒  
淨國院様御代被達 貴聞、漸く浚外様 御意外旨書留有  
方申渡候、被差越候御堀浚一巻入二段并給圖旨尾方申付、御留守居旨尾書留  
之、其節御届又老脇方問合等有之たる儀書留不相見得、  
此段及御返答候、以上

且又享保九年右御堀浚之儀、御普請奉行見計を以、不目

立様土砂等時々取除可致旨申渡之書留御勝手方に相記有

之、其節被達 貴聞外儀、又老及御届等、右通爲相究儀

及不相知、北郷主膳方岸崩外節表、御堀浚同前ニ及不及  
御届旨、元文二巳年御同人様 仰出之趣有之、其節も前  
件之通御届等ニ相成、御治定有之たる儀書留不見當、當  
分老右御堀浚方并主膳方岸之儀及不及御届筋首尾有之來

候、然處元祿十六年被仰渡外御奉書之趣を以老、右御堀  
之儀、已後埋外節老、時々無御届漸々相浚外様ニ及不相

見得候付、拙者共出立前藤馬殿・仲殿ニ老御存之通糺方  
(麥刈美途) (島津久健)

有之外得共不相知外付、何れ之筋於御當地相糺外上、何  
分ニ表可相決儀と申談、其元ニ及相糺置外書留等、又老

御勝手方書拔等左京持越、段々於爰許相糺外處、元祿十  
六年之御願筋、又老其節被 仰渡外趣老、其元書留同前

相知有之外得共、其外之年鑑書留不見當外付、御留守居  
(前田重政)  
佐久間新左衛門に委曲問合等申付外處、松平加賀守様御

城下堀埋外節、續兩三日表相懸程合外得老不及御届、尤  
日數相懸外節老、五三日表浚方有之相止、日數不相懸様

追く浚方有之、前々及不及御届外、乍然大破之砌老御届  
表有之由外、松平越前守様御方ニ表大概御同前之由、且

(毛利重政)  
松平大膳大夫様御方ニ老古來より不依多少一向御堀浚御

居無之由(出書數)、松平土佐守様御方之儀者、纔計(魚田繼馬)之由表時

御届有之、松平筑前守様御方者、以連(魚田繼馬)如元浚被仰付

度御願筋(魚田繼馬)之由、今以無御届浚方有之由(魚田繼馬)段々不相並、

松平右近將監様御方は新左衛門罷越、御用人宮川古仲太

に取合、此御方元祿年中より之御仕向致物語、脇々承合

外趣を表申達致内談外處、當時迄不目立様浚方有之候得

者、少事之儀者有來通(魚田繼馬)之由、及大破外節計及御届外方

表可有之哉、松平阿波守様御城下川筋浚方前々及御届

外儀不相知外付、右近將監様は被及御内談外上、浚方及

御届外儀有之外付、いつれ(魚田繼馬)表被及御内談外ハ、御丈夫

之方御差圖表可有之事外、然共纔計之儀者有來通浚方等

被仰付、何ぞ御差支之廉者有之間鋪外、自然御沙汰表有

之外ハ、日數不相懸、纔計之儀者前々より不及御届被浚

來外段被仰出、可相濟と之趣内分(魚田繼馬)承外段、新左衛門

申出外、右通之儀(魚田繼馬)得者、寶永年間より漸々無御届浚

方被仰付來、主膳方岸之儀表御堀浚同前と被仰出置首尾

相濟來、程久敷罷成外付(魚田繼馬)者至此以後漸々浚方被仰付外

様、改る御届等被仰出外儀如何可有御座哉、右通脇々被

成方、又者古仲太申聞候趣を以者、及大破外節者及御届

候儀者御吟味表可有御座儀外得共、被仕來外御堀浚、主

膳方岸修甫之儀者前々之通(魚田繼馬)之被差置可相濟哉と、於

爰元者申談、御留守居(魚田繼馬)表其通吟味申出外、乍然此節改

る漸々浚有之外様御願被相立筋御吟味表外ハ、御願被

仰出外(魚田繼馬)表於爰元御差支之儀者無之旨をも申出外付、猶

又於其許被申談被達 貴聞儀者被申上、何分御治定之趣

を以被致首尾(魚田繼馬)之可有之外、左京持越置外貳袋、御留守

居首尾書一通相添差越申外間、其元入附相成外繪圖等首

尾方可被申付外、以上、

但主膳方岸之儀(魚田繼馬)付る者、九月廿八日便(魚田繼馬)表被申越趣

致承知外、前條之通(魚田繼馬)外故何分(魚田繼馬)表可被申談外、

〔明和四年〕 閏九月十七日 〔朱〕 樺山左京(久世)

〔十月十四日〕 〔朱〕 島津左中(久世)

〔朱〕 桂 織部殿(久世)

〔朱〕 菱刈藤馬殿(久世)

川田伊織殿(久世)

鳴津 仲殿(久世)

高橋此面殿(種壽)

御國許 御城下御堀浚之儀、元祿年中被仰出、其節以御

奉書浚方被仰渡、其以後埋外節者御届之不及御沙汰、不  
 目立様浚方被仰付來り、然共元祿年中被仰渡り御奉書之  
 趣と者致相違り付、以來御治定被成置度り間、御並様御  
 仕向承合、御手寄之御老中様は御内々承合申上り様被仰  
 渡り付、御並様方御留守居段々承合り處、相並不申り、  
 松平加賀守様御城下御堀埋り外節者、纔兩三日表相懸り  
 程合り得者、不及御届浚方被仰付り、尤數日相懸り得者、  
 五三日表浚方被仰付又相止、追々浚方有之、日數不相懸  
 様御取計有之り故、前々より不及御届り、乍然大破之砌  
 者御届被成り由に御座り、松平越前守様御方より表大概  
 加賀守様御方振合之由に御座り、松平大膳大夫様御方こ  
 ろ者、古來より御堀浚方不依多少一向御届無之浚方被仰  
 付來り、松平土佐守様ころ者纔計之儀ころ表時々御届之  
 上浚方被仰付り、松平筑前守様御届城堀廻り年々埋り付、  
 浚方繪圖面被記、以連々如元浚被仰付度旨、御在國之砌  
 ころ御連署被差出、今以其節之御差圖ころ、其以後不及  
 御届、埋り節々浚方被仰付り由、其外承合り御方々様表  
 御座り得共、御當地に者委不相知由御座り、依之松平右  
 近將監様に致參上、御用人宮川古仲太に取會、元祿年中  
 此方之御仕向致物語、且脇々承合り趣を以致内談り處、

當時迄不目立様浚方被仰付候得者、少事之儀有來り通こ  
 ろ、及大破り節計御届被成り方ころ者可有御座哉、松平阿波  
 守様ころ御城下川筋浚方前々より被及御届り儀不相知、  
 依之兼る右近將監様御手寄之事り間、被及御内談り處、  
 前々御届之有無不相知りハ、此節御用番様に御届有之  
 浚方被仰付り様御差圖有之り歟と覺居り段、古仲太申聞  
 り付、阿波守様御留守居に相尋り處、御城下川筋之内近  
 年埋り付、前々御届之有無不相知り故、古仲太覺之通右  
 近將監様に被及御内談り處、御用番様に御届被成り様御  
 差圖有之、御城下川筋之内年々埋り付浚方被仰付り間、  
 被聞召置り様御名前御書付被差出り處、追々御聞置被成  
 り旨、其節之御用番様より御挨拶爲有之由承申り間、右  
 之趣を者猶又古仲太に相達り得者、御國元御堀浚之儀々  
 被及御内談り得者、御届之方々決り御差圖可被成り間、  
 纔計之儀者有來通不目立様浚方被仰付可相濟り、右近將  
 監様に御内々ころ者御尋申上りハ、何れ御丈夫之方々  
 御差圖可被成り、唯今迄之通御取扱御座りる者、何ぞ御  
 差支之廉者有御座間敷り、自然御沙汰有之りハ、日數不  
 相懸、纔計之儀者前々より不及御届被浚來り段被仰達可  
 相濟事々御座り、乍然表向相達り儀ころ者無之り間、左

様相心得り様、古仲太より承申外、右之趣御座り得者、

當時迄之通日數不相懸程之儀外ハ、不及御届、埋り節者

不自立様浚方被仰付候方ニ委可有御座哉と申談、此段申

上外、以上、

〔宋〕「明和四年」 閏九月十一日 佐久間新左衛門村忠

左京様

423 重豪公御譜中

扣正文在右筆所

相良源次郎内、米良七郎左衛門家來ニ有、源次郎支配米

良主膳領分ニ致居住り者、男女百七拾人、私領日向國諸

縣郡之内須木ニ致逃散り者共、先達有被仰渡り通、囚人

之取扱ニ有一昨廿三日於領内境、惣人數無吳儀源次郎家

來ニ此方家來共方引渡相濟外、此段御届申上候、以上、

〔宋〕「明和四年」 閏九月廿五日 松平薩摩守

424 重豪公御譜中

同四年十月二十六日、於三府城本丸書院一聽三獄訟裁斷之披

露稱之礼、  
一明披露

425 全上

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之表贈給之、入念外段

令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔宋〕「明和四年」 十月廿八日 中將重豪御判

謹上 中山王

426 全上

芳墨令披見外、去申年大清國ニ被差渡り進貢使山川雲親

上北京之勤相仕舞、去歲十二月歸帆之由紙面之趣相達外、

依之此節以山川、別錄之表被相饋之、入念外段過量之至

外、恐惶不宣、

〔宋〕「明和四年」 十月廿八日 中將重豪御判

謹上 中山王

427 全上

正文在琉球國司

芳札令披見外、弥平安之由珍重之事外、我等無吳事外間

可易心外、將又縮布五端贈給之、懇篤之至存外、恐惶不

宣、

〔采〕  
「明和四年」  
十月廿八日 薩摩守 重豪御判

中山王 回酬

428  
全上

芳札令披見外、從大清賜物之金入龍紋緞子一卷・色緞子一卷被相贈之、入念外段欣然之至存外、恐惶不宣、

〔采〕  
「明和四年」  
十月廿八日 薩摩守 重豪御判

中山王 回章

429  
重豪公御譜中

正文在文庫

御札致拜見外、

公方様

大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將亦參勤時分之儀以使者被相伺之外、右之趣令承知外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和四年」  
十一月五日 田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

430  
全上

御札令披見外、

公方様

大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀以使者被相伺外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

〔采〕  
「明和四年」  
十一月五日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

431  
全上

御札令披見外、

公方様

大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀以使者被相伺之外、及

上聞外處、來年四月中可致參府旨被 仰出外條、可被存其趣外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和四年」  
十一月五日 阿部伊豫守 正右判

松平周防守 康福判

松平右京大夫  
輝高判

輝高判

松平右近將監  
武元判

武元判

松平薩摩守殿

〔<sup>(朱)</sup>明和四年〕十一月十三日  
板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

434 重豪公御譜中

正文在島津但馬

加冠

鳴津長袈裟

又六郎

宜爲

明和四亥 十一月廿八日

〔島津重豪〕  
(花押 No.2)

435 正文在島津但馬

加冠

赤山正二郎

九郎

宜爲

明和四亥 十一月廿八日

重豪公墨印  
○

433 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、随ゝ小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外之處

一段之御仕合外、恐々謹言、

436 重豪公御譜中

正文在文庫

432 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間

可御心易外、随ゝ小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔<sup>(朱)</sup>明和四年〕

十一月十三日

松平右京大夫  
輝高判

松平薩摩守殿

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御儀  
外間可御心易外、隨而琉球紬十端并鯉節一箱被獻之外、  
各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 十二月二日 松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

437 全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀  
外間可御心易外、隨而琉球紬十端并鯉節一箱被獻之外、  
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 十二月二日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

438 重豪公御譜中

同年十二月四日、於二府下島津鐵熊宅一假設三評席一監下臨其  
糾三判獄訟一者上、關三事法官群吏咸列三于座下、

439 全上

正文在文庫  
〔一應治所〕  
徳川民部卿殿婚姻相濟外付る、爲御祝儀鯛一折被獻之外、  
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 十二月五日 松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

440 全上

徳川民部卿殿婚姻相濟外付る、爲御祝儀鯛一折被獻之外、  
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕 十二月五日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

441 重豪公御譜中

寫正文在江戸家老座

寫

大目付江

大廣間御禮申上候面々持參御太刀置所疊目

年始

中將御下段下より四疊目ニ置  
三疊目ニ而御礼

少將御下段下より三疊目ニ置  
二疊目ニ而御礼

侍從御下段下より二疊目ニ置  
一疊目ニ而御礼

四品御下段御敷居之内一疊目ニ置  
板縁ニ而御礼

八朔

中將・少將・侍從之無差別、御下段より二疊目ニ

置之、一疊目ニ御禮

四品御下段御敷居之内ニ置之  
板縁ニ而御礼

右之通大廣間ニ御禮申上候面々爲心得、寄々可被相達  
置外、

(采)  
「明和四年」十二月

442 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺

御靈屋 御参詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(采)  
「明和四年」十二月十三日

松平周防守  
康福判

松平薩摩守殿

443 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

ち蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(采)  
「明和四年」十二月十三日 松平周防守  
康福判

松平薩摩守殿

444 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

ち蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕

合外、恐々謹言、

(采)  
「明和四年」十二月十三日 板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

445 全御譜中



是歲十二月十三日、（馬津忠良） 日新公二百年忌辰、修之法會於  
（加世田） 日新寺、者三日（皇十二日、至十四日）、即進納香燭白銀十枚、家老高橋  
此面種壽勤二代參焉、

446 重豪公御譜中

正文在仁禮小吉

加冠

仁禮彦袈裟

宜爲

仲太郎

明和四亥 十二月十五日



重豪公 墨印

447 全上

正文在文庫

一筆令啓達、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、間可御心易、

將又御鷹之鶴拜領、以宿次差越之、恐、謹言、

（朱）

「明和四年」

十二月十九日

阿部伊豫守 正右判

松平周防守

康福判

448 寫正文在文庫

松平薩摩守殿

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

此狀箱并鶴壹、從江戸至薩摩國鹿兒島松平薩摩守所、相  
届、返札可來、間、於江戸月番之老中、急度可持參者也、

（朱） 「明和四年」 亥十二月十九日 周防印

（松平康福）

右宿中

449 重豪公御譜中

同年十二月十九日首途（來年參勤之期、二月六日發駕）、嚮、是每、東行、擇、吉

日、豫行、之式、西歸之時亦擬、之、即是嘉例也、載見、于

左條、以往、效、焉、

450 全上

扣正文在家老座

十二月十九日御首途之次第

一御對面所より 御出、御城下吉野橋筋御通路御行列、

御請笠・御豎笠・御鐵砲貳挺・御弓臺二肩・御旗竿・

御鍙一領・四本御道具、の諏方は

御參詣、

但 御刻限四時

一當日御看經山伏金藏院諏方は御先ニ參扣居、御參詣

之節、海陸御安全之御祈願申上、左の安養院より御

供仕、祇園前より 御召船被召乘り、

一御供之御家老羽織袴乘馬の御供、御用人已下之御役

々 御駕籠廻に御供相勤、其外御供被 仰付置り、御

馬廻新番・御歩行・筆者・小役人不殘羽織袴の御供

可相勤り、

但 御用人以上者手鍬長柄、其外御使番以上之御役々

手鍬可爲持り、右外御馬廻新番不及手鍬り、

一諏方社に御膝着青銅百疋、

一諏方・祇園兩社に御神樂料青銅六拾疋ツ、

一於諏方神前

御拜相濟、御幣安養院より差上、御盛塩并御三獻上、

御配膳、

一御參勤御供之御側御小姓兩人、内壹人者御名字下之人

可相勤り、

但 支度羽織袴、御中途より

御先參可相勤り、安養院に

御入、祇園に 御參詣之節、右兩人可相勤り、

一安養院に 御入、住持より一束一本進上、御目見可

被 仰付り、披露奏者番、進物番之儀者、御供之御馬

廻新番之内可相勤り、

但 奏者番支度麻上下、進物番支度羽織袴、

一右引次、於 御前安養院に青銅百疋拜領可被 仰付り、

御取次奏者番、

一大乘院坊中より相詰り五ヶ寺 御目見可被仰付り、披

露右同人、

一御吸物上、

一御挾肴上、

一御盃上、

一御銚子上、

右被召上、御盃安養院に被下、御看迄被下、右御盃

御前に差上納、

一御茶上、

一御相伴御供之御家老、吸物盃掛りの出、銚子二篇、茶出、

一安養院より御吸物等差上り付、青銅貳拾疋拜領可被仰

付り、御取次奏者番、

一右終の直祇園に二御参詣、御通路筋最前之通、頭屋前より 御出、伊集院覺左衛門屋鋪前通、

一御盛塩御幣可差上り、右相濟 御乘船、御供老御側廻り之内より御召船被 召乘り、

一御供御家老・御用人、小早一艘ツ、相渡、船こゝる御供、一築地御普請方脇波戸に 御着船、江戸橋金藏前通角御藏下辻番脇筋より 御歸館、

一惣御供老祇園前より上築地通、琉球假屋前新橋より御普請方前小路に扣居 御歸館之御供可相勤り、最前諏方に 御参詣之節同勢老町田源左衛門屋鋪角を清水馬場筋繰入可置り、

一御歸館以後、於 御本丸御熨斗・御茶・御吸物・御銚子・御差味・御銚子・御平皿・御銚子・御菓子・御茶上、御相伴御供之御家老、

一御供之御用人・御近習役・御納戸奉行に御通可被下り、一右同御小納戸役より以下御側廻之面々御次こゝる、御酒可被下り、

一御出 御歸館共ニ平日表より 御出之節之通、御役々御對面所に罷出、

一御歸館之節、御近習番所に罷通り面々罷出、御祝儀可

申上り、  
(朱) 亥十二月十六日  
御本文之通可承御役々江致通達、御供被仰付置候面々江致申渡候、

右之通御手當可申渡り、  
取次 關山新左衛門

451 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意り、紙面之趣各一覽之事り、恐々謹言、

(朱)  
「明和四年」 十二月廿二日 松平周防守 康福判

452 全上

御札令披見り、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將

又十月廿二日從

公方様、妻女御鷹之鷹拜領之、難有由得其意、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

(采)

「明和四年」十二月廿二日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

453

(采) 在雜抄中

一國々百姓強訴・徒黨又ハ逃散之儀老堅停止ニ上、猶又寛延三年右躰之儀於有之老急度遂吟味、頭所并差續事を工、夫々急度曲事可被申付旨相達、西國筋百姓共之儀老我意強、今以御代官并御預所役人・領主・地頭方之申付を拒、間々逃散致他領に願出、儀共有之由、不届至極ニ、然處領主・地頭ニ寄、心得違仕置等ニ表不申付、歸村可致由難澁之儀粗有之由相聞得、不埒成事、以來老右躰之儀於有之老其所方早速致歸村、様取計、暫表其所に差置、儀有之間敷、尤其元、歸村之上、先達、相達、通遂吟味、急度曲事可申付、

右之通西國筋領分知行有之面、可被相觸、

明和四年亥閏九月

右之通從 公儀被仰渡、間、以來右躰之儀御領内、入來

儀何様ニ相斷、入付間敷、萬一境目忍通入來、暫表其場、不差置、早々可爲致歸村、若歸郷之儀申聞、不致得心、無難之取扱難成、國人之取扱ニ致引渡、様被仰渡、條、右之趣を以委曲申聞、是非可差返、乍其上不致得心、其段早々可申出、此旨與中・支配中・諸外城、不洩様ニ可申渡、

明和四年亥十二月廿四日

御家老座

454

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右京大夫可述、也、

(采) 「明和四年」十二月廿七日



薩摩 中將殿

455

全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻、遂披露

之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕「明和四年」  
十二月廿七日

板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

456  
全上

大納言様は御破魔弓一飾、以使者被獻之外、首尾好遂披露外、恐々謹言、

〔宋〕「明和四年」  
十二月廿八日

板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

457  
〔宋〕「近秘野卿」

明和五年戊子正月元日不受賀正既首途也、臨御座間、見公族及三官、謁外庭稻荷、十三日謁護摩所・福迫・稻荷、二十日謁大雄・松峯・玉龍、驛致賜鷹所捉鶴、十八日

公拜其賜、二月六日發府城、御家老川田伊織國福・島津仲久健、御側御用人山岡齋宮久（今之）・伊地知新太夫季周・

關山新左衛門・二階堂菫、御納戸奉行上村笑之丞・藤野休

左衛門良記、御使番三原善兵衛・喜入休右衛門等從此行、

自大里海行取坂越公儀任吉丸、其化從土垂新田丸・首羽丸・春日丸・宮内丸小早等十四艘及水伝馬或鱒舟二艘使舟十艘、都計三

十九艘、御船奉行傳、三月二日抵大坂邸、六日抵伏見邸、二十日左衛門所掌也

九日至芝邸、四月朔日 大家使人來于守宮、賀朝覲也、

二日遍訪閣老各第、還謁不動於護摩所、七日命關山金暉、

使兒玉主左衛門利容購千字文・唐詩選・唐詩礎・明詩礎・

通商考・字林集、相良彌千母長興・本田七右衛門親存購

草菴・蒙求・和歌類題・古今集・濱真砂・天狗藝術論・

田舎莊子、皆備 親覽也、八日近衛公遣諸大夫來賀新正、

十三日 大家使閤老就第勞之、十五日行朝覲禮、十六日

謁大圓寺、二十三日謁五社於高輪、二十四日謁増上寺、

皆告至也、二十九日訪一橋第、六月朔日退、自朝訪酒井

雅樂頭第、時近侍臣高崎納右衛門・有川勇四郎・伊東得

之進・山田彦八明遠・林玄達・相良彌千母・柏百幾亦陪席

應召也、七月十九日 大家遣使齋雲雀來賜 公於邸、乃

鷹所捉也、二十五日免御家老高橋此面種壽職、逆旨故也、

十二月十六日 大家使御使番興津左京齋鶴來賜 公於邸、

時公少疾、託相良近江守迎拜之、亦鷹所捉也、是年冬命

新作福昌寺至明年、秋告成

458  
重豪公御譜中

大隅國種子島現和村漁戶彌五郎者、克養其母、有女亦

順奉焉、其名達<sub>レ</sub>官、今茲明和五年戊子春正月四日與<sub>二</sub>父子各米三石<sub>一</sub>褒<sub>二</sub>賞<sub>一</sub>之、

全上

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻<sub>レ</sub>之、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔采〕 明和五年〕 正月七日

松平薩摩守殿

松平右近將監  
武元判

460

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻<sub>レ</sub>之、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔采〕 明和五年〕 正月七日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

461

重蒙公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻<sub>レ</sub>之、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔采〕 明和五年〕 正月十一日

阿部伊豫守  
正右判

松平周防守  
康福判

松平右京大夫  
輝高判

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

462

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻<sub>レ</sub>之、遂披露<sub>レ</sub>處一段之御仕合<sub>レ</sub>、恐<sub>レ</sub>謹言、

〔采〕 明和五年〕 正月十一日  
板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

463

重蒙公御譜中

去歲十二月十九日

大樹家治公以<sub>二</sub>宿次奉書賜<sub>二</sub>御鷹之鶴一隻<sub>一</sub>、老中松平周防守康福召<sub>二</sub>家臣中村與太夫種曉<sub>一</sub>而屬<sub>二</sub>鶴及奉書等<sub>一</sub>、即使<sub>二</sub>新番本田甚右衛門親香・汾陽茂右衛門盛庸<sub>一</sub>、副歩行士三贈中之薩府上、親香・盛庸即夜發<sub>二</sub>之第一<sub>一</sub>、經<sub>二</sub>歷東海山陽西海

重豪公御譜中  
正文在文庫

之三道、今茲明和五年正月十八日到着薩府、乃出迎於對面所、受其賜、由是即日使馬廻本田助之丞親就・新番平田孫次郎位勝附足輕齋六人拜復之書及所郷屬之宿次證文赴江府、同日又爲謝恩使入來院大和定救發廳府、親就等先定救二月十三日到江府、往阿部伊豫守正右之宅、呈書復其宿次之證文、定救亦忽々歷西海山陽東海之三驛、同月十九日到着芝第、同二十一日往正右之宅演旨呈連署等、越三月朔日應召登營、於白書院獻先規之品物以禮使也、見家治公而退、重出席上已獻物一拜、台顔、訖而登西營、於檜之間調板倉佐渡守勝清捧獻物而退出、同五日復造於朝、乃松平右京太夫輝高出於檜之間附與奉書、時將軍家賜卷物二於定救、同日又於板倉勝清之宅屬其奉書、凡勤事者如先格、既而還芝第復命、此行也親自有命、定救少間留滯江府、故同年九月十五日發芝第、同十一月十四日歸着薩府矣、

なをく何もくよろしく申上りへくり、めてたく  
かしく、

正月四日付て御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌克成らせられ、御めてたくおほしめし被成りよし、しかれば舊臘四日徳川民部卿様御婚姻相濟り御事御承知被成、御めてたき御事に思しめし被成りよし、右御祝儀御申上被成、御ふみのやうよろしく申上りへくり、

大納言様へもよろしく申上りへくり、めてたくかしく、

〔采  
一明和五年〕

お

まつ嶋  
高をか  
うら尾  
いは瀬  
たき川  
むめた  
清はし

松たいら  
さつまの守様  
御返事  
人々御中

全上

なをく何もくよろしく申上りへくり、めてたく

かしく、

正月四日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌よく成らせられ、御めてたくおほしめし被成りよし、しかれハ舊臘四日徳川民部卿様御婚姻相濟りたん御承知被成、御めてたき御事と思しめし被成りよし、右御しうき御臺様へさし上被成り御ふみのやう、よろしく申上りへくり、めてたくかしく、

〔朱〕  
「明和五年」

まつ嶋

高をか

うら尾

いは瀬

たき川

むめた

清はし

松たいら

さつまの守様

御返事

人々御中

全上

返く何もくよろしく申上りへくり、めてたくか

しく、

正月四日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌克成らせられ、御めてたくおほしめし被成りよし、さては舊臘四日徳川民部卿様御婚姻相濟りに付、御祝儀として公方様 大納言様 御臺様より 上使上田能登守をもつて

〔繪巻紙室、竹姫〕

淨岸院様へしんしられ物御座り御事御承知被成、御手まへ様こおもてももてかたし思しめし被成りよし、右の御禮御申上被成、よろしく申上りへくり、

御臺様へもよろしく申あげりへくり、めてたくかしく、

〔朱〕  
「明和五年」

まつ嶋

高をか

うらを

いは瀬

たき川

むめた

清はし

松たいら

さつまの守様

御返事

人々御中

全上



重豪公御譜中

正文在文庫

なをく何もよろしく申あげりへくり、めてたくかしく、

正月六日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様ますく御機嫌よく成らせられ、御めて度思しめし被成りよし、しかれば徳川民部卿様御婚禮相すミ、舊臘六日こ

御二方様御膝直し御登 城の御事御承知被成、御めてたく思召被成りよし、右御祝義御申上被成り通、よろしく申上りへくり、

大納言様へもよろしく申上りへくり、めてたくかしく、

〔采〕  
「明和五年」

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

松しま

高をか

うら尾

いは瀬

たき川

むめた

清はし

全上

御満足におほしめしり、なをく何もくよろしく申上りへくり、めてかしく、

正月六日付にて御ふみ下されり、先く

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌克被成らせられ、御

めてたく思しめし被成り由、扱はとく川民部卿様御婚姻濟せられ、舊臘六日 御二方様御膝直し御登 城あそハしり御事御伺ひ被成、御めて度思しめし被成り由、右の御祝儀 御臺様へ御申上被成り御ふみの趣よろしくひろ

ういたしりへくり、めてたくかしく、

〔采〕  
「明和五年」

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

松しま

高をか

うら尾

いわせ

たき川

むめた

清はし

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又去冬、從

公方様寒中爲 御尋、妻女御着拜領之、難有由得其意外、

紙面之趣各一覽之事外、恐々謹言、

〔采〕 〔明和五年〕 正月廿七日

松平薩摩守殿

松平右近將監  
武元判

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又從

公方様妻女に寒中爲 御尋御着拜領、難有由得其意外、

紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔采〕 〔明和五年〕 正月廿七日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

正文在文庫

年甫之賀章、且如目錄送給令祝着外、弥平安超歲珠重、

此邊全然外、尚期後音外也、

〔采〕 〔明和五年〕 正月廿九日

薩摩中將とのへ

〔近衛内郎〕  
〔花押〕

なをく御おもて方御申上被成り得共、なをまた御

申上被成りよし、何もくよろしく申上外へくり、

めてたくかしく、

正月十一日付にて御ふみ下され外、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌よく成らせられ

萬壽姫君様御機嫌よく入らせられ、御めてたくおほしめ

し被成りよし、さてハ歳暮の御祝儀として

公方様 御臺様より石渡四郎三郎にて、舊臘十一日御を

くさまへ拜領物被成り御事御承知被成、御手まへ様にお

いても有かたくおほしめし被成りよし、右の御禮御申上

被成、よろしく申上外へくり、

大納言様 御臺様

萬壽姫君様へもよろしく申あげ外へくり、めてたくかし  
く、

〔朱〕  
「明和五年」

まつ嶋

高をか

松たいら

御返事

うらを

薩摩守様

人々御中

いは瀬

たき川

むめた

清はし

473

全上

なをく御表より御申上被成り得とも、なを又御禮

御申上被成りよし、何もよろしく申上りへくり、め

てたくかしく、

正月十一日附にて御文下されり、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌よくならせられ

萬壽姫君様御機嫌よく入らせられ、御目出度思召被成り

よし、扱ハ舊臘十一日歳暮の御祝儀として

公方様より時服ならひニ御さかな御拜領被成、有かたく

覺しめし被成りよし、右の御禮御申上被成、よろしく申  
上りへくり、

大納言様 御臺様

萬壽姫君様へもよろしく申上りへくり、めてたくかしく、

〔朱〕  
「明和五年」

まつしま

高をか

まつ平

さつまの守様

御返事

うら尾

人々御中

いわ瀬

たき川

むめた

清はし

474

全上

なをく何もよろしく申上りへくり、めてたくかし

く、

正月十一日附にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様益御機嫌よくならせられ、恐

悦ニ思召被成りよし、扱は歳暮の御祝儀として、舊臘十

一日

公方様カ 上使清橋、御臺様カ 御使とみこて

淨寺院様へしんしられ物御座ハ御事御承知被成、御手前様こおき難有覺しめし被成リよし、右の御禮御申上被成リ通、よろしく申上ハへくハ、

御臺様へもよろしく申上ハへくハ、めてたくかしく、

(采)  
「明和五年」

まつ嶋カ

高をか

うら尾

いわ瀬

たき川

むめた

清はし

まつ平

さつまの守様

御返事  
人々御中

475

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、如承改年之慶賀珍重ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意ハ、隨テ御樽肴被獻ハ之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(采)  
「明和五年」 二月三日 阿部伊豫守 正右判

松平薩摩守殿

476

全上

御札令披見ハ、如承改年之慶賀珍重ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意ハ、隨テ御樽肴被獻ハ之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

(采)  
「明和五年」 二月三日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

477

重豪公御譜中

明和五年二月六日、爲參觀發レ國、家老川田伊織國福・島津仲久健、側用人山岡齊宮久澄、側用人近習役勤伊地知新太夫季周・關山新左衛門金郷・二階堂部行且等供奉、經レ小倉路、同月二十日到レ豐前大里、直乘レ船同二十七日着レ船于播州坂越、翌二十八日陟レ播磨路三月二日到レ

全上  
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然  
者今度徳川民部卿殿婚姻相濟外段被承之、目出度被存由  
得其意外、紙面趣及言上外、恐々謹言、

△松平薩摩守殿▽

〔采〕  
「明和五年」二月十三日 阿部伊豫守 正右判

重豪公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
亦今度徳川民部卿殿婚姻相濟外段被承之、目出度被存由  
得其意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

着大坂一、同五日發大坂二駕舟、從流上繫一枚方、翌六  
日着三岸伏見、九日發伏見一向伊勢路東海道、十六日  
至遠州懸川、時間大井川瀧水也、故翌日之日坂一滯  
宿焉、二十四日水減得涉而到駿州丸子一泊、自是驛路  
無停滯、同月二十九日到着芝邸、

重豪公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
又舊臘爲歲暮之御祝儀、時服并御看拜領之、難有由得其  
意外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和五年」二月十五日 阿部伊豫守 正右判  
松平薩摩守殿

全上  
御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
又爲歲暮之御祝儀、從  
公方様時服并御看拜領之、難有由得其意外、紙面之趣及  
言上外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和五年」二月十五日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

482 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又舊臘爲歳暮之御祝儀、從

公方様 御臺様妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙

面之趣各一覽之事外、恐く謹言、

〔采〕 二月十五日

阿部伊豫守

正右判

松平薩摩守殿

483 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀、從

公方様 御臺様妻女に拜領物有之、難有由得其意外、紙

面之趣令承知外、恐く謹言、

〔采〕 二月十五日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

尚く弥平安珍重、此地無吳外也、

大樹放鷹之鶴以奉書賜之、畏悦之旨被示告、欣幸目出思

給外也、

〔采〕 二月廿二日

〔花押 Na〕

薩摩中將とのへ

485 全上

御鷹之鶴拜領付る、爲御禮被差越外使者入來院大和、明

朔日五時 御城に可差出外、且又自分之御禮及可申上外

之間、可存其趣外、以上、

〔采〕 二月廿九日

〔阿部正右〕 伊豫

松平薩摩守殿

留守居

重豪公御譜中

正文在文庫

〔定敷〕 入來院大和

右明日四時

御城江可差出外、以上、

〔宋〕明和五年〕三月四日

松〔松平輝高〕右京

松平薩摩守殿

留守居

487 全上

入來院大和

右明日九時、我等宅江可差出外、以上、

〔宋〕明和五年〕三月四日

板〔板倉勝清〕佐渡

松平薩摩守殿

留守居

488 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意外、依之爲

御禮以入來院大和、御樽肴被獻外、遂披露候之處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔宋〕明和五年〕三月五日

阿部伊豫守

正右判

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

489 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又以宿次奉書御鷹之鶴拜領、難有由得其意外、依之爲御

禮以入來院大和、御樽肴被獻之外、遂披露外處入念外段

御喜色之御事外、恐々謹言、

〔宋〕明和五年〕三月五日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

490 全上

歳暮之

御内書可相渡外問、明日五半時

御城江家來可被差出外、以上、

〔宋〕  
「明和五年」三月六日  
松平周防守

松平薩摩守殿

491 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」三月七日

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝高判

492 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」三月十一日

松平右京大夫  
輝高判

松平薩摩守殿

493 重豪公御譜中

正文在文庫

營中進使者序寄一翰外、青陽賀儀珍重、弥可爲平安、此  
邊無吳外、仍如目錄令贈與之外也、

〔宋〕  
「明和五年」三月十四日  
(花押 No.1)

薩摩中將とのへ

494 全上

嗣息元服之事相聞、被伸賀辭芳牒、且如目錄投與令満足  
外、弥平安珍重思給外、尚期後喜外也、

〔宋〕  
「明和五年」三月十五日  
(花押 No.1)

薩摩中將とのへ

495 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將



御札令披見外、

重豪公御譜中  
正文在文庫

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者  
去月四日其方妻女大奥に登 城外様被 仰出外段被承、  
難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令  
承知候、恐々謹言、

〔采〕「明和五年」  
三月十八日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

〔采〕「明和五年」  
三月十八日

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝高判

又其方妻女今般登 城、  
公方様 大納言様 御臺様 萬壽姫君様 御目見、其上  
拜領物有之、難有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、  
紙面趣各一覽之事外、恐々謹言、

重豪公御譜中

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然  
者去月四日大奥に其方妻女登 城外處、御懇之  
上意、其上從  
公方様 大納言様 御臺様 萬壽姫君様拜領物有之、難  
有由得其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣令承  
知外、恐々謹言、

〔采〕「明和五年」  
三月廿三日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

〔采〕「明和五年」  
三月廿二日

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝高判

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
又妻女今般登 城可有之由相達外段被承之、難有旨得其  
意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各一覽之事外、  
恐々謹言、

正文在文庫

去年御暇之節被差出り當分相續願書致返進り、以上、

〔宋〕「明和五年」

四月朔日

阿部伊豫守

松平薩摩守様

500

重豪公御譜中

(島津忠昌)

是年四月四日

興岳公二百五十年周忌也、故開法會於隆

盛院一日、即進納香奠銀五枚、番頭島津采女久芳爲

代參、

501

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

なをいかにかほともよろしく御きたたのみそんしま

いらせり、めてたくかく、

一筆申上まいらせり、

大納言様ますく御安全に御座なされ、きのふ飯田町邊

へはしめて成せられ、御機けんよく

還御のむね承知仕り、恐悦にそんし奉り、此よし御序

の折から

御前よろしきやうに御取なしたのみ入そんしまいらせ

り、めてたくかく、

〔宋〕「明和五年」

大納言様  
御方針

いは橋さま

はつ崎さま

各申給へ

502

全御譜中

同年四月十三日 上使松平右京大夫輝高來勞參府焉、

同十五日登營以參觀之禮見於

大將軍家治公、乃蒙旨而退出、献上物等如先格、

503

重豪公御譜中

正文在文庫

明日五半時、登

城參勤之御禮可被申上り、以上、

〔宋〕「明和五年」

四月十四日

阿部伊豫守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

504

家來二人

全上

御目見被 仰付下間、召連可被罷出下、

〔宋〕  
「明和五年」

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

勝清

505

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之下、遂披露下處一段

之御仕合下、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」

四月廿一日

康福判

〔宋〕在口裏

松平周防守

康福

506

全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之下、遂披露下處一段

之御仕合下、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」

四月廿一日

勝清判

〔宋〕在口裏

板倉佐渡守

508

萬壽姫君様御結納爲御祝儀、以使者如目錄被獻之候、遂

披露下處一段之御仕合下、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」

四月廿五日

勝清判

〔宋〕在口裏

松平右近將監

武元

507

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

勝清

萬壽姫君様御結納爲御祝儀、以使者如目錄被獻之下、遂

披露下處一段之御仕合下、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」

四月廿五日

武元判

509

重豪公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

勝清

〔宋〕在口裏

板倉佐渡守

大納言様に菖蒲御兜一飾、以使者被獻之、首尾好遂披露り、恐く謹言、

〔朱〕  
「明和五年」  
四月廿八日  
勝清判

〔朱〕在口裏  
板倉佐渡守  
松平薩摩守殿  
勝清

510  
全上

口上の覺

御それさま此程は參勤の御禮御申上被成、御臺様に御目錄の通しん上被成、則ひろういたしまいらせり、めてたく御満足に思しめしり、心得りてよふ申せとの御事におはしましり、めてたくかしく、

〔朱〕  
「明和五年」

松しま  
高をか  
うら尾  
岩瀬  
たき川  
松たいら  
薩摩守さま  
口上

511  
〔朱〕  
「在雜抄中」

御筆之寫

むめた  
清はし

一江戸詰之者共衣服之儀、定置り通相心得、不晴立場所者綿服相用り様可致り、國許男女衣服之義も定置事り得共、公界も無之事り間、一門大身分ハ日の袖・もめん相用、一所持已下者もめん・紬類之外一切令停止り、染色之儀も無地又者小もん付相用、模様など染出り儀可爲無用り、極老或者幼稚・病身之者、寒氣難凌等り間、持合り者下方絹類着用致り事ハ可爲其通り、側廻仕りへ者着古と等呉り儀も有之り間、公界に難用程こ古ひり衣類者國元こゝる着用致り儀、可爲勝手次第り、一江戸詰之者共、無益の參會等不致様ことの儀、兼あ申渡事り得共、向後酒肴等取はやしり儀一切令停止り、就中側用人・近習役共此旨存、若違背之者及承りハ、遂吟味り上、直可申聞り、萬一私こ扣置り儀於有之者可爲越度り、國元こめも右之通相心得り様こ可申渡り、一奥向之儀者表方役人共委不存等り間、納殿役人手寄共

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之、遂披露之、  
之處一段之御仕合、恐、謹言、

513 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之、遂披露之、

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平右近將監  
可述也、

〔朱〕  
一明和五年〕  
五月二日



薩摩  
中將殿

512 重豪公御譜中

正文在文庫

申談、少事連も<sup>〔張力〕</sup>賁無之様可取計、  
右者所帶方手迫に相成り付、今度儉約筋之義段、申  
渡事、及吟味事無遲滞可申出、減方等申  
渡り付る者、難儀に存り者も可有之り得共、長キ事  
こゝも無之、年限内之事にへ者、何分其詮相見へ  
り様随分出精可致旨、急度可申渡り、  
明和五年四月

515 扣正文在江戸家老座

八朔御禮之節、御太刀二疊目相備、一疊目二の御禮申上  
り様、舊冬被仰渡承知仕り、私家代に被任中將以後者、  
〔朱〕御付礼  
年頭八朔共御下段より四疊目御太刀備置、三疊目二の御  
年始八朔上段御着座、八朔御中段御着座に付、八朔御礼御太刀疊目中將  
禮仕來り、其外諸節三疊目二の御禮仕來り、然處到私  
之内者大広間御下段より三疊目二、其疊目御礼可被申上候、五節御禮  
代、此節より八朔御禮席被引下り儀、先格に承迎、残念  
申目及八朔之疊目同様たるべく候、  
之仕合存申り、後代に承相懸儀得者、可罷成儀外者數  
代勤來り御取分を以、何卒代々家格之通被仰付被下度御  
内々二の相願申候、以上、  
〔朱〕  
一明和五年〕  
五月三日  
松平薩摩守  
板倉佐渡守  
勝清判

514 重豪公御譜中

大家例式八朔之禮向所、令其席違平先格、是以先容松  
平右近將監武元而有請者、今茲五月四日武元附小簡于  
其所請之書達之、載見于左方、

明和四亥十二月十二日池田筑後守様御達之寫

(大目付、政倫)

大目付に

大廣間御禮申上候面々持參御太刀置所疊目

年始

中將

御下段下より四疊目ニ置

少將

御下段下より三疊目ニ置

侍從

御下段下より二疊目ニ置

四品

御下段御敷居之内一疊目ニ置  
板縁ニ而御禮

八朔

中將・少將・侍從之無差別、御下段より二疊目ニ置之、

一疊目ニ御禮、

四品

御下段御敷居之内ニ置之  
板縁ニ而御禮

右之通大廣間ニ御禮申上候面々、爲心得寄々可被相達

置、

五月

松平薩摩守内

中村與太夫

(朱) 右御願書壹通并仰渡寫壹通、五月三日御用番松平右近將監様正

御留守居中村與太夫を以被差出置、翌四日右近將監様御

用人佐々木丑藏を以、御付紙之通御渡被成、事

重豪公御譜中

正文在文庫

御馬一疋被獻之候、遂披露、一段之御仕合、恐々謹

言、

(朱) 「明和五年」

五月廿七日

武元判

(朱) 在口裏

松平薩摩守殿

松平右近將監

全上

御馬一疋被獻之、遂披露、一段之御仕合、恐々謹

言、

(朱) 「明和五年」

五月廿七日

勝清判

(朱) 在口裏

松平薩摩守殿

板倉佐渡守

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉

球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐  
々謹言、

〔采〕  
「明和五年」六月十一日 正右判

〔采〕在口裏  
松平薩摩守殿 阿部伊豫守 正右

520 全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉  
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、  
恐々謹言、

〔采〕  
「明和五年」六月十一日 勝清判

〔采〕在口裏  
松平薩摩守殿 板倉佐渡守 勝清

521 重豪公御譜中

同年六月十三日、遷〔童年考〕正覺院殿号貞庵妙雅大師、即真母也、欄是安掛牌子惠燈院之靈牌

于福昌寺靈屋、同日以三川上久馬久致為三代參、又附下  
所三歲給惠燈院一廩米五石上、以供正覺院殿齋食焉、

522 重豪公御譜中

正文在文庫

端午之

御内書可相渡外間、明日五半時

御城の家來可被差出外、以上、

〔采〕  
「明和五年」六月廿四日 松平右近將監

松平薩摩守殿

523 〔采〕在雜抄中

御筆仰出

一表方役人替又者役入等之節、吟味申付事外間、疎之儀  
ニ有者無之筈外へとも、人々得手不得手及有之もの外  
間、其向々相應之者を致吟味外事肝要外、筆者・小  
役人等申付外節も、奉行・頭人其心得を以可致吟味外、  
右之通 御筆を以被 仰出外間、御役人限承知仕外  
様可申渡外、

明和五年六月

〔樺山久智〕  
左京

524 重豪公御譜中

寫正文在江戸家老座

大目付に

諸寺社神事佛事開帳等其外平生共、葵御紋付り品者向後

御女中様方（采）も表容易御寄附無之、御三家始其外大名（采）も表

菩提所等者格別、其外（采）に者寄附無之者付、是迄御寄附之

分者寺社奉行に相伺、差圖次第可致り、其外寄附之分者

什物致置、平生者勿論神事佛事開帳等之節表相用り儀可

爲無用り、尤葵御紋相用り面々、靈牌有之寺院に相納り

膳具其外打鋪り御紋付之品、其人之法用に相用り儀者不

苦り、

右之趣寺社之輩に寺社奉行より申渡り間、御料私領寺

社之分に御代官・領主・地頭より可被申渡り、

（采）「明和五年」七月

右之通可被相觸候、

525

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露り之處一

段之御仕合り、恐く謹言、

（采）「明和五年」七月六日

輝高判

526

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露り之處一

段之御仕合り、恐く謹言、

（采）「明和五年」七月六日

勝清判

（采）「在口裏」

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝高

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清

527

重豪公御譜中

同年七月十九日以（采）上使渡邊圖書貞綱一賜御鷹所レ捕

之雲雀二乃拜（采）其恩旨一如先格、

○同月二十一日修（采）松齡公百五十年忌法事於伊集院郷

妙圓寺三日（采）遣三番頭畠山敷馬國通於寺一獻三納

香奠銀十枚二代拜（采）焉、

528

重豪公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被



獻之候、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」  
八月四日

康福判

松平薩摩守殿

松平周防守

康福

529  
全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和五年」  
八月四日

勝清判

板倉佐渡守

勝清

530  
重豪公御譜中

正文在文庫

今度相國 宣下之事畏悦之至<sup>レ</sup>、仍賀札且如目錄被投與、  
丁寧之至今満足<sup>レ</sup>也、

〔宋〕  
「明和五年」  
八月十日

〔近衛内前〕  
〔花押〕  
〔No.1〕

薩摩中將とのへ

531  
〔宋〕  
「在雜抄中」

今度稠敷御儉約ニ付、先達<sup>ル</sup>被 仰出<sup>レ</sup>御書付之内、萬  
端御事を被差欠と申儀にて人々取違、何之格式も無構御  
出方こさへ成<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>者宜事而已自然心得違<sup>レ</sup>る者、おのつ  
から心底も邪ニ相成、若<sup>シ</sup>酖利欲、風俗をも取亂<sup>レ</sup>様成立  
<sup>レ</sup>の者甚 思召ニ不相叶<sup>レ</sup>、此節之儀第一驕費等無之様  
ニと被思召儀にて<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>者、每物随分作略可有之事<sup>レ</sup>得共、  
格式可有之儀者、可成程不取雜様致吟味、又者末々可及  
困窮儀共ニ第一心付、其上にて何篇致減少、兎角風俗宜  
筋之御儉約ニ被仰付<sup>レ</sup>、

右之通被 仰出<sup>レ</sup>條、右之心得を以取違無之様、猶細  
蜜ニ遂吟味<sup>レ</sup>様御役人限可申渡<sup>レ</sup>、

明和五年子八月

〔榊山久智〕  
左京  
〔藤川美幹〕  
藤馬

532

重豪公御譜中  
寫正文在文庫

〔白木御文書五番箱入付〕  
〔白紙二四十三〕  
明和五年九月廿九日左京殿より村橋左膳御  
取次ニ御渡被成 市来瀬兵衛納置外事トアリ

寫

江戸居付士二男以下者御番入被仰付間敷由、先年被 仰  
出置、到只今其通<sup>レ</sup>得共、初<sup>メ</sup> 御目見之儀者可被仰付

旨被 仰出外條、向後 御目見相濟外者考、此以前之通

與帳可被載置外、

右之通與頭江申渡、可承面、江表可申聞置候、

〔采〕 一明和五年〕 九月

左京

全上

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委由阿部伊豫守可述外也、

九月七日



薩摩 中將殿

534

全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 一明和五年〕 九月七日

板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

535 重豪公御譜中

同年九月島津淡路守久柄發居城佐土原、同月九日始來于鷹府、同十五日登城、今茲重豪在江府、故使家老等接待焉、進與贈惠有差、又應其請教之見宗家傳來文書之内鎌倉以降將軍家下文及教書・感贈等也、久柄留滯凡三旬、其交詣府下之寺院拜宗室之祖廟、訪尋親戚故舊、而十月八日辭鷹府、如薩州伊作浴温泉、遂參詣日新寺、而巡歷薩南濟大隅國、經肝屬郡入日州、而歸佐土原矣、

536

重豪公御譜中

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念外段令祝着外、恐惶不宣、

十月四日 中將重豪御判

謹上 中山王

537

全上

芳簡令披見外、御鷹之鶴致拜領外爲祝儀、被差渡宮城親方、殊太刀・馬代白銀百兩并目錄之通被相贈之、入念外

段令祝着外、恐惶不宣、

〔(采) 明和五年〕 十月四日 中將重豪御判

謹上 中山王

538 全上

芳墨令披見外、王子附醫師剃髮相越外儀令免許外爲謝禮、此節被差渡宮城親方、殊別錄之表被相贈之、入念外段過暈之至外、恐惶不宣、

〔(采) 明和五年〕 十月四日 中將重豪御判

謹上 中山王

539 全上

芳札令披見外、弥平安之由珎重之事外、我等無吳事外間可心易外、將又紕縮緬五卷贈給之、懇篤之至存外、恐惶不宣、

〔(采) 明和五年〕 十月四日 薩摩守 重豪御判

中山王

回章

540 重豪公御譜中

隅州高山郷宮下村農民作次郎者克奉其父母、隣邑舉稱焉、今茲十月十五日賞之與三米三石、

541 重豪公御譜中

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡外間、明日五半時

御城の家來可被差出外、以上、

〔(采) 明和五年〕 十月廿二日 阿部伊豫守

松平薩摩守殿

542 重豪公御譜中

寫正文在江戸家老座

大目付に

大納言様に御破魔弓・苜蒲御兜向後獻上三不及外、尤御破魔弓ハ當暮より獻上三不及外、右之通獻上之面々可被相達候、

〔(采) 明和五年〕 十一月

松平右近將監殿御渡り御書付寫壹通相達外、順達留より  
(朱)大御目付様御廻状并御書付写意通咄今大井伊勢守様より被差越候付、本持者  
大井伊勢守方江可被相返之り、以上、

十一月十二日 大目付  
十一月十二日  
松平薩摩守殿

外御連名略  
右留守居

重豪公御譜中  
寫正文在文庫

此書白木御文并五番箱四十四ニアリ  
包紙「明和五年十一月十六日ト失書アリ」

一青銅三拾疋

惠燈院

住持

右年頭初ゝ

御佛詣之節拜領

一同貳拾疋

右同人

右御歸國脇初ゝ

御佛詣之節拜領

右之通惠燈院江

御佛詣之節被下り御規模ニあり處、

正覺院様御位牌福昌寺御位牌所に被成 御遷座り付、  
(島津重年書)

右被下方御規模帳被相除り條、此旨承置り様御記錄奉  
行江可申渡外、

十一月  
「明和五年」

(小松帶巻)  
帶刀  
(洞野通古丸)  
外記

重豪公御譜中  
同年十二月十六日

大樹家治公使ニ興津左京忠央 貺ニ貴鷹所レ搏之鶴一隻也、  
(袋巻)

頃日重豪有ニ寒疾之憂ニ、故以ニ名代相良越前守福將ニ奉ニ

恩旨ニ、遂往ニ老中之宅ニ拜ニ謝焉、

全上

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露り處一段之御

仕合外、恐々謹言、

「明和五年」十二月十八日 勝清判

(朱)「在口裏」

板倉佐渡守  
勝清  
松平薩摩守殿

全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔本〕  
「明和五年」十二月十八日 康福判

松平薩摩守殿  
〔本〕在口裏  
松平周防守  
康福

重豪公御譜中

大隅國肝屬郡始良鄉鵜戸權現者、遂古神陵而葬<sup>ナト</sup>彦波瀲武

鷗草葺不合尊<sup>ニ</sup>云薩摩大隅内有神代三陵、其一藤州高城郡水引郷可愛山陵而所葬天津彦彦瓊杵尊也、其一開州肝屬郡内之浦

郷高屋山陵而所葬彦火火出見尊也、其一、即謂吾平山陵<sup>吾平今、神迹絶</sup>即吾平山陵也、事見于神代卷及日本紀

奇也、先是宮殿廢弛久矣、今茲明和五年爲<sup>レ</sup>再<sup>ニ</sup>造神殿、

越秋八月起工至<sup>ニ</sup>冬十月造畢焉、十二月十八日之夜神靈

勸請焉、明日修<sup>ニ</sup>安鎮之法、即以<sup>ニ</sup>番頭小松仙十郎清行<sup>一</sup>

爲<sup>ニ</sup>代參、

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平周防守可

述外也、

〔本〕  
「明和五年」十二月廿七日

薩摩  
中將殿



全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔本〕  
「明和五年」十二月廿七日 板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

〔本〕  
「近秘野州」

明和六年己丑正月元旦謁御庭三社、訪守宮、二日束帶造

朝賀正、三日臨御座間、御家老手獻太刀、公親觴之、

臨大書院大野多宮久、手獻太刀、又新納次郎四郎久、手

獻太刀、皆親觴之、其他諸地頭皆如例、四月二十七日賜

告如例、二十八日造朝拜恩、賜馬如例、頃日 公有小疾、

請候八月以發行 大閤許之、八月十三日守宮餞 公、十

九日夫人亦餞、二十五日發芝邸、九月十三日國老菱刈藤

馬實詮卒于江戸、下旬彗星見東至十月中旬、十月十七日至府城自出水、遣謝使、十九日重寶案一橋守女慈照夫人訃至自江戸、公居喪旬、二十

十二日令弓炮勿貪勝、二十五日召備前・玄蕃・李及御三役於牡丹間、口親諭令、又召與頭・番頭於御座間、亦親

諭令、此日御使番三原善兵衛爲御納戸奉行、御小納戸鎌田愛太夫爲御納戸奉行、伊東間爲物頭、御日附伊集院彌

平左衛門俊德爲御使番、御記錄稽山田司爲御小納戸、又使三雲之兵衛奉御本尊授御看經山伏、晦日謁福昌・惠燈・

淨光三寺吊 慈照夫人、此日使赤松甚右衛門令於近侍、凡 公告至不論江鹿宜服不洗物 命也、本月下旬彗星復

見西至十一月初旬、十一月三日訪山下築地、西田未接見也、六日如柁城泊于櫻島横山、別館、七日至柁城調 皇妣主於長年寺、實

二十五回忌也、此日歸船丸、萬歲、御近習役關山新左衛門、御小納戸山田司・二階堂新十郎等從、前此 大家命閤老檄

公、十二日謁南泉廟、十四日觀諸役署、十五日種子島雲治爲物頭、二十一日召諸有司、令觀散樂焉、十二月朔日

喜入主馬久福・小松帶刀清香石、千爲御家老、新納波門爲若御年寄、山岡齋宮職三、百石・島津矢柄久職三、百石爲大御目附、十

六日謁玉龍・松峯二廟、十七日賜御側御小姓相良彌千母四書五經各一部、二十七日首途謁諏訪・祇園如例、二十

八日謁上稻荷・福迫諏訪・護摩所・稻荷・靈府表御看經所、召大御目附以上令觀前栽、二十九日謁大雄宮及南泉廟、

552 重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「明和六年」 正月七日 武元判

〔朱〕「在口裏」

松平薩摩守殿 松平右近將監 武元

553 全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「明和六年」 正月七日 勝清判

〔朱〕「在口裏」

松平薩摩守殿 板倉佐渡守 勝清

554

重豪公御譜中  
正文在文庫

(宋)四十五  
此御吉書包紙。丑二月十五日左京殿より郡山  
主右衛門江御渡、白木御文書五番箱ニ納置云  
、書記アリ

吉書

- 一 神社佛閣修造興行事、
- 一 可專勤農事、
- 一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

明和六年正月十一日 重豪御判

555

重豪公御譜中

明和六年己丑春正月二十日、修(鳥津忠國)大岳公三百年忌法事於深

固院一日、使下番頭願娃波江久喬進納香燭銀五枚代

拜上焉、

(宋)  
「在雜抄中」

一 上方筋百姓共致強訴等相集ハ趣相聞ハ間、可成丈ケ

取鎮、其上ニ難取鎮様子ニハ、召捕可申ハ、領

分限ニ難行届儀ハ可有之ハ間、御料私領共ニ申合、

御料他領之者ニ最寄次第人數差出召捕、其上ニ御

代官又老領主・地頭ハ引渡ハ様可致ハ、乍然飛道具

556の2

等用ハ儀ハ可爲無用ハ、

明和六年丑正月

一 上方筋百姓共致強訴等相集ハ趣相聞ハ間、可成丈ケ取  
鎮、其上ニ難取鎮様子ニハ、召捕可申ハ、領分  
限ニ難行届儀ハ可有之ハ間、御料私領共申合、御  
料他領之者ニ最寄次第人數差出召捕、其上ニ御代  
官又老領主・地頭ハ引渡ハ様可致ハ、乍然飛道具等用  
儀ハ可爲無用ハ、先達ハ於江戶御觸有之ハ故、今以  
致騷働ハ場所ハ有之ハ趣ハ候間、難取鎮様子ニ表ハハ  
、飛道具等用ハも不苦ハ、

右之趣可相達旨申來ハ間、早ク國許ハ可申越ハ、

明和六年丑二月

556の3

一 遠國百姓共願於舍所ニ寄合手段ヲ企、廻狀杯出、

外村之者共ハ趣意ハ不辨トして不得止事罷出、大勢集、

村役人之居宅又老遺恨ニ存ハ者共之家作并諸道具を打

損、吟味相成ハ上ニ數ケ條之願ヲ申立ハ外類ハ有之ハ外

得共、公義ヲ輕、領主ニ有、隱便ニ取鎮ハ儀ヲ專

要ニいたしハ故、百姓共かさニ相成、及狼藉不法之

儀共有之、百姓ヲ憐ミ、儀者勿論之事ニ得共、右

躰徒黨ヲ結ヒ強訴ヲ企、及狼藉之者共ヲ手弱取扱ハ

者、外場ニ見習ハ様可成行哉、以來御料所之百姓

共騒立ハ、最寄之領主ハ人數を出シ、私領ニ

騒立ハ、其領主又最寄之領主ハ人數ヲ出手強

打散、手ニ當リ者共者擲捕、願之趣理非之不及沙汰

取揚不申、他領之引合有之ハ差出、一領限ハ、其

領主ニ遂吟味、仕置之儀可被相伺ハ、萬石以下之知

行所騒立ハ節及同様ニ可被相心得ハ、以上、

明和六年丑二月

重豪公御譜中

正文在文庫

歳暮之

御内書可相渡ハ間、明日五半時

御城江家來可被差出ハ、以上、

(宋)「明和六年」

三月六日

松平周防守

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在江戸家老座

私儀先例之通國許江之御暇被下置ハ者、歸國之節少人數

(宋)御附紙

ニ程ケ谷驛より相州鎌倉立寄、先祖廟所致佛詣、則日

可為願之通候

藤澤驛止宿仕度御座候、此旨相伺申候、以上、

(宋)「明和六年」

四月十一日

松平薩摩守

元祖豊後守忠久右大將頼朝公長庶子ニ、治承三己亥年  
誕生、嘉祿三丁亥年於鎌倉病死、

(宋)「右御願書書通右ニ相添、頭書即日御用番松平周防守様江御留守

居有川勇馬を以被差出置ハ處、翌十二日御同人様より御付札

ニ御願之通被仰渡、同人致承知ハ事

重豪公御譜中

同年四月二十七日

大樹家治公遣ニ老中阿部伊豫守正右于芝邸ニ賜重豪歸國

之暇、故拜ニ賜縮緬三十卷・白銀百枚、同日

儲君家基公亦遣ニ老中板倉佐渡守勝清于芝邸、賜紗綾二

十卷、是例也、即日余如ニ老中各位之第一拜ニ謝之、翌二

十八日登レ城見ニ



(01) 560

〔采〕  
一雜抄中

家治公黒書院ニ奉レ拜ニ辭賜レ暇之辱、此時親蒙ニ懇厚之  
台命、且因ニ先蹤ニ賜ニ駿馬一匹ニ再奉レ拜ニ辭之、直詣ニ  
西丸ニ因ニ御奏者松平能登守乘蒞ニ亦拜ニ謝前件之事也、且  
芝邸留守家老桂織部久中亦隨ニ從重蒙ニ登レ城、獻ニ太刀  
一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷ニ拜ニ  
台顔ニ、太田備後守資愛爲ニ奏者ニ、亦詣ニ  
西丸ニ謁御奏者松平乘蒞ニ、以ニ太刀一腰・馬代白銀一枚ニ  
獻ニ于

儲君家基公ニ奉レ謝拜ニ

台顔ニ之辱上乃出、

年季者抱并拜借銀案文  
書物

何外城何村何門名子  
何左衛門子弟娘名頭

札年何歳

何左衛門

右者何野何左衛門持  
何方御藏入 百姓ニ御座外處、何年奉公仕度由申

來外、於御免老雇銀相對ヲ以相渡抱置申度御座外、尤

抱之内、諸外城并本在所ニ遣置外儀、又老抱之名代ニ

罷成外儀、曾ニ仕問敷外、若背御法外儀被聞召付外ハ

(02)

、何様ニ表御沙汰次第可被仰付外、且又抱主相直儀  
御座外ハ、其段申出、御差圖次第可仕外、勿論年季管  
合、又老入用無之節老早速本門ニ相返、其首尾可申出  
外、爲後證如此御座外、以上、

但外ニ年季者幾人相抱置申外、

年號月日

何番與家督

何野何某印

御郡方

月限雇案文

書物

何外城何村何門名子  
子弟娘名頭

札年何歳

何某

右者何野何左衛門持  
何方御藏入 百姓ニ御座外處、此節私江戶詰ニ付、

拾五ヶ月雇奉公仕度由申來外、於御免老雇銀相對を以

相渡、召抱可申外、若詰重仕外ハ、重雇銀是又相對

ヲ以相渡可申外、抱之内入用無之、抱主人相直儀有之

外ハ、其段申出、御差圖次第可仕外、若月限管合外ハ

、早速申出、本門ニ相返可申外、萬一背御法外儀被聞

召外ハ、何様ニ表御沙汰次第可被仰付外、爲後證如

此御座外、以上、

年號月日

何野何某印

御郡方

(03)

先年抱案文

書物

何外城何門右同斷

何左衛門

札歲何歲

右者何左衛門持  
何方御藏入百姓ニ御座外處、何之何月何日何年

季御證文ヲ以、何之何左衛門方ニ抱置外處、彼方入用

無御座外付、往年筭合外迄私方ニ奉公仕度由申來外、

於御免者雇銀相對を以相抱可申外、尤抱之内、諸外城

并本在所ニ遣置外儀、又者抱之名代罷成外儀、曾外仕

間敷外、若背御法外儀被聞召付外ハ、何様ニ奉御沙

汰可被仰付外、是又抱主人相直儀有之外ハ、其段申出、

御差圖次第可仕、勿論年季筭合又者入用無之節者早速

相返、其首尾則可申出外、爲後證如此御座外、

但幾人相抱置外、

年號月日

何番與家督

何野何左衛門印

御郡方

(04)

右ニ付返證文案文

覺

札年何歲

片書前條同斷  
何某

右者何之何左衛門持  
何方御藏入百姓ニ御座外處、何年季何之何月御

免之上、私方ニ召抱置外得共入用無之、往年筭合外迄

何之何某方ニ召抱申度旨承申外間、御法様次第可被仰

付外、以上、

何之何月

何野何某印

御郡方

(05)

御船手浦水主召抱外案文

覺

札年何歲

何方名字  
何某子

右者身上差迫、御船御免證文ヲ以拾年季私方へ奉公仕

度由申來り外、御座無口能者ニ御座外ハ、御定之

雇銀相渡召抱可申外、尤相對ニ御定之外増銀を出召抱

申間敷外、尤年季筭合外ハ、早速申出、本浦ニ相返、

其首尾可申出外、且又年季筭合外節、雇銀返濟之儀者

相對ニ相究可申外、勿論私抱之内、諸外城に賃取爲日雇遣置外儀仕間敷外、尤雇銀相渡不申、抱之代罷成、脇方に遣置申間敷外、若背御法外儀被聞召付外ハ、何様ニ表御沙汰可被仰付外、且又入用無御座、抱主人相直儀有之外ハ、其段申出、御差圖次第可仕外、爲後證如此御座外、以上、

年號月日

何野何某印

御船手

於他領御仕登物積難船之節心得之覺

一難船有之段注進申越節者、去年被仰渡置外通、穆佐・倉岡・綾抑壹人、高岡横目壹人差越、右三ヶ所抑差支外節者、山之口抑差越首尾可致外、

一難船之次第并御用物痛之程合、先一通品、御勝手方に出、委細之儀者追可被申出外、尤不急成者態と飛脚取仕立不及、便宜を以可被申出外、

一正米之儀及濡米同様、於入札拂申渡外儀も爲有之由外得共、依石高者及御不勝手儀有之筈之事り間、送狀元を以差引、御米痛之程致見分、御仕登難成米者、於所早速致入札、正米何程有之、直ニ本船ニ御仕登せ可

相調旨、又者本船大破ニ直ニ仕登不罷成、御借船ニ被差登筋ニ得者、船賃何程ニ可相調旨并船中締方等承合、品々可被得差圖外、

一遠方ニ得差圖外儀難調場所ニハ、右同斷致差引、正米之儀者本船上乘乗せ付、直ニ御仕登可被致外、左外ハ正米何程仕登ニ相成、何程之濡米ニ故、入札拂申渡、何程之捨米ニ相成外段、大坂手形所に送狀付遣、御勝手方ニ表可被申出外、

一本船痛所有之外ハ、早速修甫相加、早々出帆可被申渡外、

一遠方ニ船修甫相加外も、直ニ御仕登難成痛ニ付、正米過分有之、入札拂直段者御借船賃見合、御借ニ被差登外方御勝手宜外ハ、船賃隨分吟味ヲ盡、海上締方堅固申付差登、何様取計外旨、追外首尾可被申出外、

一正米糺計ニ御仕登相成程無之、遠方ニ積足等及難調場所ニハ、濡米同前入札申渡、落直之通相拂、追外首尾可被申出外、

一濡米撰立於其所手廣入札申渡、落直之通相拂、代銀者高岡横目罷歸り外節致宰領、最寄之御藏に可被相納外、

尤壹はへにして入札申渡りる者、望之者有少儀表可有  
之り條、其見合ヲ以、幾はへこゝいたし入札可被申渡  
り、

一難船ニ其之所之者共世話ニ相成り付る者、船頭方相應  
致一禮ハ儀表有之、又者御船手方可及謝禮事表有之ハ、  
此儀表有來通相心得、其節造作之次第并役々名書人躰  
之格式、浦人ニ其々苦勞之様子人數承合、書付を以可  
被申出り、

一上乘船頭差迫り拜借之願申出りハ、遂吟味、濡米之内  
方相渡、追の首尾可被申出り事、

一難船ニ付る者船頭船乘方大形之廉表可有之候哉、是又  
承合細々可被申出り事、

一難船ニ付他領ハ差越り付る者、委細之儀者御勝手方ハ  
申出り旨、大目附座ハ首尾申出、罷歸候節表同斷可被  
申出り事、

一船頭水主共惡之任形有之り歟、又者不宜聞得之趣もハ  
ハ、見聞之次第早々大目附座ハ可被申出り事、

右之通被仰付、難船之次第ニ方、又者其所作法ニ方  
相替儀も可有之り間、隨分遂吟味、都る之首尾相濟  
り節、一紙書ヲ以御勝手方ハ可被申出り、尤難船ニ

る浮荷物有之節者、部一渡方等之儀者、元文三年御  
船奉行方申渡置り通相心得可被致り、右之趣高岡横  
目ハ表申渡、代合之節明々申渡可有之り、此旨御差  
圖ニ由り、

明和六年丑四月

562

重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平右京大夫  
可述り也、

〔采〕  
「明和六年」五月二日



薩摩  
中將殿

563

全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之り、遂披露り  
之處一段之御仕合り、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」五月二日

板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置、國元に罷越り、未男子無御座り付、  
在國中若不慮之儀、御座り者、國元に差置り私大叔父、  
實叔父之續御座り嶋津左（久保）、當年三拾八歲罷成り此者に相  
續被仰付、跡職無相違被下置り様奉願り、以上、

〔宋〕  
「明和六丑」

五月六日

松平薩摩守御書判

松平右近將監殿

松平右京大夫殿

松平周防守殿

阿部伊豫守殿

全上

寫正文在右筆所

松平薩摩守

在所に之御暇被下、拜領物被 仰付之、明日五半時登  
城、御暇之御禮可被申上り、且又家來一人 御目見被  
仰付り間、召連可被罷出り、

〔宋〕「日付ナン本ノマ、」

松平薩摩守

御暇二付

大納言様より拜領物被 仰付、

〔宋〕  
「明和六年」

重豪公御譜中

是年福昌寺殿堂修造爲二其完葺一、五月十四日自二城北吉  
野邑一轉二送茅於寺中一由二前躰一也、使二島津玄蕃貴澄爲二  
名代一、家老島津左中久金附二從之一、府下之士亦多率二  
其事一焉、

○重豪既賜二歸國之暇一、雖然因レ有二疾病一不堪二起程一頻  
請レ緩レ期、每事載二于左一、

全上

扣正文在江戸家老座

私儀國元に之御暇被下置り付、御當地發足可仕處、積氣  
其上痔疾之痛差起、向暑氣長途之旅行難仕候付、暫致保  
養、快罷成り者早速發足可仕り、此段御届申上り、以上、

〔宋〕  
「明和六年」

五月廿一日

松平薩摩守

〔宋〕右御居書壹通、即日御用番松平右近將監様江御留守居有川勇馬を以被差出外事

扣正文在江戸家老座

私儀當四月國元之御暇被下置外處、積氣其上痔疾之痛差起、長途之旅行難仕外付、暫致保養、快罷成外者早速發足可仕旨、先月御用番松平右近將監殿に御届申上外、武田長春院藥服用仕、段々養生いたし外得共快復不仕外、今以相勝不申、出立仕躰無御座、殊向暑氣遙之旅行無覺〔宋〕御附和東由、長春院後申外、依之於可相成儀者、當秋中迄滯府願之通可有常居候養生仕度外、尤其内少々快罷成外者、早速發足可仕外、此段奉願外、以上、

〔宋〕一明和六年 六月十八日 松平薩摩守

〔宋〕一右壹通御留守居有川勇馬を以、御用御頼御先手松平忠左衛門様ニ而、即日御用番松平右京大夫様江被差出候處、六月廿三日 右京大夫様より御附札ニ而、御願之通被仰渡候事

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕一明和六年 六月廿一日 輝高判

松平薩摩守殿 松平右京大夫 輝高

570 全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕一明和六年 六月廿一日 勝清判

松平薩摩守殿 板倉佐渡守 勝清

(表紙)

重豪公  
自明和六年七月  
至同 七年六月

追  
舊記雜錄 卷百廿五

571 重豪公御譜中

正文在文庫

爲生身玉之御祝儀、黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

(朱)  
「明和六年」七月六日 松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

572 爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(朱)  
「明和六年」七月六日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

573 重豪公御譜中

正文在福昌寺

福昌寺佛殿上梁銘

(朱)「西」

寶殿修復古輪奐聳玉龍吾三州法窟永以鎮無窮明和六歲  
次己丑夷則<sup>(七月)</sup>吉辰源重豪敬白

(朱)「東」

峨峨大寶殿護法尊王公長經無量劫佛日仰堯風石祖第五  
十四世嗣祖比丘疎山謹誌

574 ○同年初秋七月日州佐土原城主島津淡路守久柄胞弟大和

將新樹之家、請島津稱號及諱名・家紋、重豪許之、  
而又定庶子稱號・諱名等、詳于左、

575 寫正文在文庫

御舎弟大和殿事新地被遣之、新家被相建度<sup>(久徳)</sup>付、被相伺<sup>(久徳)</sup>趣達 貴聞候處、島津之御稱號并久之御字被成御免、家格島津敬次郎同様、座席敬次郎次、紋所十文字崩被相用<sup>(忠就長子、久徳)</sup>様被仰付<sup>(久徳)</sup>、

一大和殿嫡子<sup>(久徳)</sup>老代、島津之御稱號并久之御字・紋所十文字崩被成御免<sup>(久徳)</sup>、二男<sup>(久徳)</sup>老御稱號・久之御字相避、此御方<sup>(久徳)</sup>に不差障名字相名乗、實名之儀<sup>(久徳)</sup>老以之字可相用候、十文字崩紋所<sup>(久徳)</sup>老致遠慮<sup>(久徳)</sup>様被仰付候、

右之通被 仰付<sup>(久徳)</sup>様被 仰出<sup>(久徳)</sup>、以上、  
太守様被 仰出<sup>(久徳)</sup>、以上、

明和六年七月廿八日 島津 仲判<sup>(久徳)</sup>

榊山左京判<sup>(久徳)</sup>  
島津左中判<sup>(久徳)</sup>

島津淡路守殿

寫正文在文庫

以下三通写白木御文書五番箱ニアリ  
朱カキ四十六トアリ

寫

島津敬次郎家之儀二男迄<sup>(久徳)</sup>老代、御稱號并久之御字名乘<sup>(久徳)</sup>、正徳三年十月被仰付置<sup>(久徳)</sup>、其時分<sup>(久徳)</sup>老御當地御一

門家之内ニ右同様之家格有之<sup>(久徳)</sup>、御先代段、御格式<sup>(久徳)</sup>を被改、當分ニ至<sup>(久徳)</sup>老二男迄御稱號被下置<sup>(久徳)</sup>、家筋無御座<sup>(久徳)</sup>、其御元御家中之儀<sup>(久徳)</sup>、此御方御格之趣<sup>(久徳)</sup>を以被仰付<sup>(久徳)</sup>、御承知有之通<sup>(久徳)</sup>、依之敬次郎家只今之通<sup>(久徳)</sup>、此御方當時之御格ニ難準<sup>(久徳)</sup>、今度左之通被仰出<sup>(久徳)</sup>、

一敬次郎家二男向後島津之御稱號并久之御字相避、家號之儀<sup>(久徳)</sup>老此御方<sup>(久徳)</sup>に不差障名字御見合可被仰付<sup>(久徳)</sup>、實名之字<sup>(久徳)</sup>老今度以之字被下<sup>(久徳)</sup>、二男老後年可相用<sup>(久徳)</sup>、一十文字崩紋所之儀、二男より老向後致遠慮<sup>(久徳)</sup>様被仰付<sup>(久徳)</sup>、

右之通被仰付<sup>(久徳)</sup>様被 仰出<sup>(久徳)</sup>、以上、  
太守様被 仰出<sup>(久徳)</sup>、以上、

明和六年七月廿八日 島津 仲判<sup>(久徳)</sup>

榊山左京判<sup>(久徳)</sup>  
島津左中判<sup>(久徳)</sup>

島津淡路守殿

寫正文在文庫

寫



一筆啓上仕候、弥御堅勝被成御座、玆重奉存候、然者御舍弟大和殿事、新地被遣新家被相建、島津之御稱號并久之字被遣之、家格島津敬次郎同様、座席者敬次郎次、紋所十文字崩被用度旨御伺之趣達 貴聞候處、別紙連名書付之通被 仰出<sup>レ</sup>、將又右敬次郎家二男迄者島津之御稱號并久之字御免被仰付置<sup>レ</sup>得共、御當地御一門家を初一統、當時者二男に御稱號被下<sup>レ</sup>家格無御座<sup>レ</sup>付、敬次郎家二男之儀者、向後御稱號相避、此御方に不差障名字可相名乘<sup>レ</sup>、實名之儀者此節以之字被下之、十文字崩紋所致遠慮<sup>レ</sup>様、是又別紙連名書付之通被 仰出<sup>レ</sup>間、右之趣を以可被仰付候、此段爲可申上如斯御座<sup>レ</sup>、御伺書返却仕<sup>レ</sup>、恐惶、

(采)  
一明和六年

七月廿八日

(稱出)  
久智

島津淡路守様

寫正文在文庫

寫

御記錄奉行に

島津淡路守殿より舍弟大和殿事、新地貳百石被遣、新家被相建、島津之御稱號并久之御字被遣之、家格島津

敬次郎同様、座席者敬次郎次、紋所十文字崩被相用度旨被相伺趣有之、別紙之通被 仰出<sup>レ</sup>、

一右敬次郎家二男迄者代々御稱號并久之御字名乘<sup>レ</sup>様、

正徳三年被仰付置<sup>レ</sup>得共、當時之御格式ニ難準<sup>レ</sup>故、

向後二男より者御稱號久之御字相避、此御方に不差障

名字相名乘、實名之字者今度以之字被下之、十文字崩

紋所致遠慮<sup>レ</sup>様被 仰出<sup>レ</sup>、

右仰出之趣、別紙寫二通之通并書狀相添、今月十四

日御使便桂織部殿に差越、於江戸彼方用人召呼被相

渡答<sup>レ</sup>條、後年爲見合可記置旨申渡、別紙三通可相

渡<sup>レ</sup>、

八月

左京

重豪公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>處一段之御仕合<sup>レ</sup>、恐々謹言、

(采)  
一明和六年

八月四日

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

580  
全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰、御馬代黄金十兩被  
獻之、遂披露、處一段之御仕合、恐、謹言、

〔采〕  
八月四日  
板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

581  
重豪公御譜中

扣正文在江戸家老座

私儀國許之御暇被下置發足仕筈、積氣其上痔疾痛  
、故發足難叶、當秋中迄滯府養生之願申上、願之通  
被仰付難有奉存、折角療養仕、少、快方罷成、付、  
近日押、發足仕儀御座、此旨御聞置可被下、以上、

〔采〕  
「明和六年」  
八月廿一日  
松平薩摩守

〔采〕  
「右之通御用番松平周防守棧江御留守居有川勇馬を以被差出、  
事」

582  
全上

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念、段  
令祝着、恐惶不宣、

〔采〕  
「明和六年」  
八月廿二日  
中將重豪御判

謹上  
中山王

583  
全上

芳墨令披見、去戌年大清國被差渡、進貢使知花親雲  
上北京之勤相仕舞、去歲十二月歸帆之由、紙面之趣相達  
、依之此節以知花別錄之表被相饋之、入念、段過量之  
至、恐惶不宣、

〔采〕  
「明和六年」  
八月廿二日  
中將重豪御判

謹上  
中山王

584  
全上

芳札令披見、弥平安之由珍重之事、我等無吳事、問  
可易心、將又縮布五端贈給之、懇篤之至存、恐惶不  
宣、

〔宋〕  
「明和六年」

八月廿二日

薩摩守

重豪御判

中山王

回章

585

全上

芳札令披見外、從大清賜物之金入龍紋緞子一卷・色緞子一卷被相贈之、入念外段欣然之至存外、恐惶不宣、

〔宋〕  
「明和六年」

八月廿二日

薩摩守

重豪御判

中山王

回章

586

重豪公御譜中

重豪今年四月既賜暇、將以發東都、遇宿疾起焉、不得已而留滯于東都者數月也、至于此、病小愈、於是八月二十五日強發東都芝邸還國也、家老川田伊織國福、側用人島津登久連・山岡齊宮久澄、側用人兼近習役伊地知新太夫季周・關山新左衛門金鄉等從焉、路歷東海路之驛、且重豪有追遠之宿志、將此行自程ヶ谷驛一過于相州鎌倉、謁中右大將賴朝公・祖先豐後守忠久公之廟、既請于官見許、因二十八日味爽發程ヶ谷直至

于鎌倉也、此日遇大風雨、於是奉納白銀五枚于賴朝公之廟前、判金一枚于忠久公之廟前、太刀一腰・馬代金一枚于白旗大明神前、白銀二枚于鶴岡八幡宮神前上拜一跪、直詣相承院以紗綾二卷・白銀十枚與寺主僧、寺主亦饋陶器一匣、又今日十二坊舍之中會待于社中之僧九人每二人與金百匹、且出神殿迎者神主大伴主膳少・別當木庭永尚各與白銀一枚、因寓目祠藏之寶器焉、以白銀十枚與主宰僧謝之、又以同十枚與相承院寺主謝之、今日之煩勞焉、既而出鎌倉將止宿于藤澤驛、戸部川水滿而不可涉也、不得已反而宿于雪之下、二十七日至于藤澤、留宿于雪之下也、出于不意、因以事聞于官、如左、而馬入川亦水滿不可涉也、二十八日留滯于藤澤、二十九日發藤澤自是路程無滯、九月十一日著伏見假館、十三日出伏見、駕船從流其夜著大坂假館、十七日發大坂歷播州路二十日著坂越、二十一日駕船、二十二日朝出船坂越、十月朔日著豐前大里、直上陸一日留滯、三日發大里歷九州之驛路、十三日著我域內出水、十七日歸府城、先是遣番頭義岡左平太賢來出水待駕到也、十三日重豪著出水之日、遣久賢爲謝恩使發出

水<sup>二</sup>赴<sup>一</sup>東都<sup>上</sup>也、久賢路歷<sup>三</sup>九州<sup>二</sup>至<sup>一</sup>豐前小倉、駕<sup>レ</sup>船隨<sup>レ</sup>

風著<sup>二</sup>大坂<sup>一</sup>、又經<sup>三</sup>東海之驛程<sup>二</sup>十一月十日夜著<sup>一</sup>東都芝

邸<sup>一</sup>、十八日詣<sup>レ</sup>用番執政板倉佐渡守勝清之第、告<sup>三</sup>奉使之

事<sup>一</sup>、且致<sup>レ</sup>書牘<sup>二</sup>又詣<sup>一</sup>西丸執政阿部豐後守正允之第亦

如<sup>レ</sup>之、此日詣<sup>レ</sup>其餘執政・若年寄之各第亦如<sup>レ</sup>之、十二

月朔日應<sup>レ</sup>徵久賢登<sup>レ</sup>城致<sup>二</sup>重豪所<sup>一</sup>獻之芭蕉布二十端・

三種二荷、奉<sup>レ</sup>拜<sup>二</sup>調

家治公于白書院<sup>一</sup>、松平伊豆守信禮爲<sup>二</sup>奏者<sup>一</sup>、尋亦獻<sup>三</sup>太

刀一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷爲<sup>三</sup>己之調<sup>一</sup>、土岐美濃

守貞經爲<sup>二</sup>奏者<sup>一</sup>、畢乃退、又登<sup>二</sup>西丸<sup>一</sup>調<sup>二</sup>奏者松平丹波

守光和一獻<sup>三</sup>三種二荷<sup>一</sup>、退亦以<sup>二</sup>太刀・馬代白銀一枚<sup>一</sup>就<sup>二</sup>

光和致<sup>二</sup>私之獻<sup>一</sup>、七日應<sup>レ</sup>徵久賢再登<sup>レ</sup>城、執政松平周

防守康福出于櫓之間、手自授<sup>二</sup>奉書<sup>一</sup>、且賜<sup>二</sup>紗綾二卷<sup>一</sup>於久

賢<sup>一</sup>、土屋能登守篤直爲<sup>二</sup>奏者<sup>一</sup>、久賢拜謝乃退出、八日應<sup>レ</sup>

徵詣<sup>二</sup>板倉勝清之第<sup>一</sup>西丸執政阿部正允  
在京師、勝清代之、勝清亦授<sup>二</sup>奉書<sup>一</sup>、既而

事畢、十三日久賢發<sup>二</sup>東都<sup>一</sup>經<sup>三</sup>東海之驛<sup>二</sup>自<sup>一</sup>大坂<sup>一</sup>駕<sup>レ</sup>船

涉<sup>二</sup>西海<sup>一</sup>、翌年正月二十四日歸<sup>二</sup>本府<sup>一</sup>復<sup>レ</sup>命、

松平薩摩守去廿五日御當地發足<sup>二</sup>の翌日鎌倉<sup>一</sup>の佛參差越

申<sup>レ</sup>外處、大風雨<sup>二</sup>の満水橋落、藤澤之驛<sup>一</sup>に通行難叶、無

是非途中より引返、雪之下<sup>二</sup>に其夜相滯、昨廿七日早朝出

立、藤澤之驛<sup>一</sup>に致到着<sup>レ</sup>、此旨御届申上<sup>レ</sup>様旅中より申

越<sup>レ</sup>、右御届申上<sup>レ</sup>、以上、

(采) 一明和六年<sup>一</sup> 松平薩摩守内

八月廿八日 (貞厚) 有川勇馬

(采) 一右御届書壹通即日御用番松平周防守松平御留守居有川勇馬差

出<sup>レ</sup>外事<sup>一</sup>

今茲春命副史郡山次郎左衛門遜志、史官肆業山田司明遠・

兒玉主左衛門實識、撰古聖賢修己治人之大略、至夏六月

既成、凡三卷、題曰君道、以智仁勇分編、即置之座右以

備觀省、且謂侍臣曰、當傳之子孫以爲龜鑑、而亦藏一部

文庫以傳永久云、

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監可述外也、

〔朱〕  
一明和六年〕

九月七日



薩摩  
中將殿

重豪公思召を以聖賢之行事政道之類、當春郡山次郎左衛門に被仰付、山田司・兒玉主左衛門申談編集仕可差上旨被仰出置、此程致成就差上外處、御不斷御側に被召置被遊 御覽外、外一部老御記録所に被渡置、長ク 御子孫様に及御傳御鑑戒とも被遊度依 思召、右三冊此節被差越外間、右之御旨趣後年こいたり無間違様記置、入念格護可有之外、以上、

〔朱〕  
一明和六年〕

丑八月

二階堂 菰

御記録奉行

重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
一明和六年〕

九月七日

松平薩摩守殿

阿部豊後守

正允判

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而干繪殘魚一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
一明和六年〕

九月廿二日

松平薩摩守殿

松平右京大夫

輝高判

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨而干繪殘魚一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」 九月廿二日

松平薩摩守殿

阿部豊後守  
正允判

594

〔橋宗子女〕

重豪之妃徳川氏時免乳而生子尋亡、既而妃亦體中發三腫滿、雖然醫療盡方覺小愈、於是今茲九月二十三日又遽然積塊乘胸膈之間、藥餌不通病大漸、二十六日遂薨于東都芝邸中、法諱慈照院殿圓應靈珠大姉、二十七日夜斂棺、二十九日夜靈柩出于芝邸東門、直至于芝大圓寺、家老桂織部久中、側用人仁禮仲右衛門仲古、留守居有川勇馬貞厚、納殿役人澁谷次郎太國房・臼井猶右衛門昌佳其餘納殿役以下從柩焉、越十月三日夜埋葬焉、導師者大圓寺海鱗和尚也、桂久中奉木主、側用人宮之原甚五大夫通直・新納次郎四郎久儔、側用人兼近習役二階堂鄰行且、留守居佐久間新左衛門村央、使番大野清太夫清純、納殿役人澁谷國房・臼井昌佳其餘納殿役以下與葬之吏數人森列於葬場也、久中代重豪燒香矣、又自三四日至八日修中陰之佛事於大圓寺、親戚之人各有香奠銀若干矣、於是八日

大樹家治公亦遣宮人來大圓寺賜御香奠銀十枚也、既

而十月十三日訃音達于慶府、明年正月晦日致其遺髮於國、曉發大圓寺、納殿役富滿伊太夫道持其餘輿橫目以下之吏悉相屬護送之、路歷東海道伊勢路、自大坂駕

船到于豊前小倉、又陸行三月十日夜至于福昌寺、既立廟于此、因即夜藏遺髮於廟中矣、而此行發東都也仍例不以實稱、託之轉送什物之名、至于我域內出水以實發之云、

595

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間可御心易外、隨御看一種被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

九月廿七日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

596

妻女死去之段及

上聞外處、可爲愁傷と被思召外、此由可相達旨依御意如此外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」  
九月廿八日

板倉佐渡守  
勝清判

松平周防守  
康福判

松平右京大夫  
輝高判

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

597  
重豪公御譜中

扣正文在文庫

寫

弓鐵炮稽古ニ賭勝負を企外儀共有之由被 聞召上、甚以  
如何之儀ニ外、右通ニ有老稽古之本意を背、自然と風俗  
衰不宜方ニ成行不可然事外條、向後賭勝負無用可仕外、  
勿論稽古方之儀老專相心掛致出精、實儀を不取失様被  
思召上候、

右之通御家老・若御年寄・大御目附被 召出、御賢  
慮を以 御直ニ難有爲被 仰出御事外間、謹々奉承知、  
屹と相守、弓鐵炮賭勝負一切不仕、於稽古方無油斷可  
致出精外、其外右式之儀無之様かたく可相嗜候、

〔采〕  
「明和六年」  
十月

〔島津久也〕  
左中

〔榊山久慈〕  
左京

〔川田國徳〕  
伊織

598  
重豪公御譜中

正文在島津播磨

加冠

宜爲

明和六年

十一月十五日 御判

重豪公

筑後

鳴津鐵熊

599

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間  
可御心易外、随而琉球熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披  
露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」

十一月十五日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間  
可御心易外、隨而琉球熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外處  
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 十一月十五日

阿部豊後守 正允判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間  
可御心易外、隨而御肴一種被獻之外、紙面之趣令承知外、  
恐々謹言、

〔采〕 十一月十八日

田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又參勤時分之儀以使者被相伺之外、及 上聞外處、來年  
四月中可致參府旨被 仰出外條、可被存其趣候、恐々謹  
言、

〔采〕 十一月廿五日

板倉佐渡守 勝清判

松平周防守 康福判

松平右京大夫 輝高判

松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將  
又參勤時分之儀以使者被相伺外、紙面之趣令承知外、恐  
々謹言、

〔采〕 十一月廿五日

板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿



全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又參勤時分之儀以使者被相伺之外、紙面之趣令承知外、

恐々謹言、

〔<sup>(朱)</sup>明和六年〕 十一月廿七日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、妻女死去付外

御意之趣奉書相達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越

使者外、紙面之通各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔<sup>(朱)</sup>明和六年〕 十一月廿七日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、妻女死去付外、從

公方様御意之趣奉書相達、難有由得其意外、依之爲御禮

被差越使者外、紙面之趣

大納言様口及言上外、恐々謹言、

〔<sup>(朱)</sup>明和六年〕 十一月廿七日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

全上

正文在種子島伊勢

加冠

種子嶋鶴袈裟

彈正

宜爲

明和六丑

十一月廿八日 御判

<sup>(重妻公)</sup>

全上

正文在伊勢兵部

加冠

伊勢彌九郎

亙

宜爲

明和六丑

十一月廿八日

〔<sup>(島津重豪)</sup>花押 No.2〕

全上

正文在文庫

御札令披見外、妻女死去付外

御意之趣奉書相達、難有由得其意外、依之爲御禮被差越

使者外、紙面之通令承知外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」十一月廿九日  
田沼主殿頭  
意次判

松平薩摩守殿

610  
白木御文書五番箱<sup>四十</sup>中<sup>八</sup>

覺寫

一延德三年二月廿二日

將軍義植公 公文 一通

一文龜二年十一月廿日 同年十二月廿一日

將軍義澄公 公文 二通

一天正六年八月十六日 同年十月十七日

將軍義昭公 公文 二通

一寛永六年四月八日 同年四月廿二日

家久公 公文 二通

一慶安三年閏十月五日 同年同月同日

光久公 公文 二通

一貞享三年九月十日

光久公 公文 一通

右十通大龍寺御文書ニあり處、致傳失候付、寫方依願

島津左中久金・亡菱刈藤馬實詮相談達 貴聞、於御

記録所臨寫被仰付被下之條、到後代全可有格護者也、

仍如件、

明和六年丑十一月廿八日  
樺山左京  
久智判

大龍寺

右上包<sup>采</sup>カキ<sup>四十八</sup>

大龍寺格護之文書云、

明和六年<sup>丑</sup>十一月廿八日左京殿<sup>カ</sup>後年爲見合御記録所江被渡  
置由<sup>ニ</sup>而御渡被成、東郷次太夫致承知之納置外事

611  
重豪公御譜中

正文在文庫

國許到着御禮之使者義岡左平太、<sup>采</sup>明朔日五時

御城江可差出外、且又自分之御禮及可申上外之間、可存

其趣外、以上、

〔采〕  
「明和六年」十一月晦日  
板 佐渡

松平薩摩守殿  
留守居

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御馬被下、從

大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付外、爲御禮以義岡左平太目錄之通被獻之外、紙面之趣

令承知外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」 十二月四日

田沼主殿頭  
意次判

松平薩摩守殿

全上

國許到着御禮之使者義岡左平太、明日四時

御城江可差出外、以上、

〔采〕  
「明和六年」 十二月六日

松 周防

松平薩摩守殿  
留守居

全上

正文在文庫

義岡左平太

右明日五半時我等宅江可差出外、以上、

〔采〕  
「明和六年」 十二月七日

板 佐渡

松平薩摩守殿  
留守居

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度御暇、白銀・卷物頂戴之、其上御馬被下、從

大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付外、爲御禮以義岡左平太、琉球芭蕉布二十端并御樽肴

被獻之外、遂披露候之處

御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和六年」 十二月七日

板倉佐渡守  
勝清判

松平周防守  
康福判

松平右京大夫  
輝高判

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

616 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從

大納言様表拜領物有之、重疊難有由得其意外、國許到着

付而、爲御禮

大納言様以義岡左平太、如目錄被獻之外、遂披露外之

處御喜色之御事外、恐々謹言、

〔朱〕「明和六年」十二月七日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

617 重豪公御譜中

谿山郡谷山郷村市人仲兵衛者、出私財以修道路、

又出私藏米錢賑救村中匱乏者、今茲冬十二月與若

千品賞之、

○同月九日

大納言家基公遷於西丸、越遣使於西城獻二種

二荷一賀遷也使者及月日、  
闕今不可考

618 重豪公御譜中

正文在入來院平次

加冠

入來院九十九

宜爲

隼人

明和六丑

十二月十五日 御判

619 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、其方亡妻法事中御香爨拜領之、難有由得

其意外、依之爲御禮被差越使者外、紙面之趣各一覽之事

外、恐々謹言、

〔朱〕「明和六年」十二月十五日 松平周防守 康福判

松平薩摩守殿

620 全上

御札令披見外、其方亡妻法事中從

公方様御香奠拜領之、難有由得其意外、依之爲御禮被差  
越使者外、紙面之趣令承知候、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

十二月十五日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

621  
重蒙公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨  
而蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

十二月十八日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

622  
全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而  
大納言様は蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外處一  
段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

十二月十八日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

623  
全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御  
儀外間可御心易外、隨而琉球袖十端并鯉節一箱被獻之外、  
各申談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

十二月十九日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

624  
全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀  
外間可御心易外、隨而

大納言様は琉球袖十端并鯉節一箱被獻之外、遂披露外處  
一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和六年」

十二月十九日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見レ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤レ、隨  
る蜜柑二箱・御肴一種被獻レ之レ、紙面之趣令承知レ、恐

御札令披見レ、其方亡妻法事中、御香奠拜領之、難有由

得其意レ、依之爲御禮被差越使者レ、紙面之趣令承知レ、

恐々謹言、

〔朱〕 田沼主殿頭  
「明和六年」 十二月廿二日 意次判

松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

田沼主殿頭  
意次判

〔朱〕 「明和六年」 十二月廿一日

重豪公御譜中

是歳重三修

元三久

怨翁公

貴三久

大中公

〔義弘男、久保〕

〔家久齋室、島津忠清女〕

一唯公

心應慶安大姉

光久室、伊勢貞豊女

曹源院殿廟室遷三石塔焉、於是十二月二十四日遭三組  
頭島津直衛久中於福昌寺及惠燈院各代拜矣、

○先レ是享保乙卯之歳、福昌寺有池魚之災、而後寺宇未  
全、假構二殿屋、今茲仍舊造建焉、總監家老島津左中  
久金、副監大目附島津大進久起、寺社奉行町田監物久  
連・島津助之丞久前、側用人二階堂源太夫行端、用人

625 重豪公御譜中  
正文在文庫

626 全上

御札令披見レ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之レ、益御安全御

儀レ間可御心易レ、隨レる琉球紬十端并御肴一種被獻レ之レ、

紙面之趣令承知レ、恐々謹言、

〔朱〕 「明和六年」 十二月廿二日 田沼主殿頭  
意次判

松平薩摩守殿

627 重豪公御譜中

629

川上彌五太夫久福・川田彦七國起、普請奉行伊集院仁左衛門兼明・村田五右衛門經芳、面高善右衛門俊常行役、于東武以、其他管事者數輩、春正月起工、冬十二月告成、同月二十六日行入佛供養之儀、使番頭川上久馬久致贈青帑五百匹於福昌寺、慶賀之一由先規也、既成後造扁額、親書玉龍山三字、以揭于山門、初門外有石橋、所謂龍門橋也、至是亦廢、乃明和九年辰春更引泉爲池架以石橋、長二丈六尺餘、廣一丈六尺餘、其壯麗過舊制、池中種蓮數百根、名云蓮池、中構小堂二字安觀音俗白水觀音、元在龍門橋之傍及辨財天女、又架橋通之焉、

重豪公御譜中  
正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲板倉佐渡守可述外也、

(宋) 一明和六年  
十二月廿七日



薩摩  
中將殿

630

全上

爲歲暮之御祝儀、大納言様に御小袖一重以使者被獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 一明和六年  
十二月廿七日

松平薩摩守殿

松平周防守  
康福判

631

重豪公御譜中

嚮是、寶曆十二年壬午春芝第類燒之時、依將軍家之恩惠、拜貸府金貳萬兩、乃傳

台命曰、以往自明和元年甲申歲迄同五年戊子限以五年、而每歲須返納焉、雖然以甲申疏使參府、仍延以翌乙酉年、故自是年賦納伴金四千兩于官府、至今茲明和六己丑年遂全納得焉、於茲乎官復其請取金之證文上、

632

正文在文庫

御名印御證文一通

御記錄方添役に

但高橋縫殿より差出置外證文一通相添

〔采〕  
〔近秘野艸〕

右者去年 御守殿并御本宅就御類燒、御金貳萬兩被遊  
御拜借、當丑年迄皆目御返上相濟り付、御證文被相返、  
御老中様御裏書御消印迄相渡り間、御番所<sub>レ</sub>被差置り御  
文書箱之内可納置り、

明和六年

丑十二月

(桂 久中)  
織部  
(島津久健)  
仲

此書曰木御文書六番箱中ニアリ

明和七年庚寅正月元旦、不受朝賀既首途也、三日謁先廟  
於玉松兩山、四日福引、六日始催散樂、召諸有司令觀焉、  
十日前此使御小姓預參、御道具事至是命御小納戸領焉、  
二十七日發府城、御家老島津左中久金・樺山左京久倫、  
御側御用人赤松甚右衛門則正、御近習役關山新左衛門金  
暉・二階堂郁行旦・村上桂馬範村、御納戸奉行上村笑之  
承行、鎌田愛太夫政、御小納戸山田司等從、二月十  
一日至大里、十三日駕青龍丸、乃發海行<sub>十二日不乘、</sub>乃發海行<sub>船俄風潮也</sub>、第一早  
崎丸、次小鷹丸、次早海丸、次恒吉丸以上四艘爲先鋒、  
左御挽船右御挽船、中爲御座、即青龍丸、左玉江丸、右

飛龍丸竝爲鯨船、中亦鯨船、以上四艘爲使船、左千年丸、  
右崎行丸竝爲御納戸船、左伏見丸、右永吉丸竝爲御近習  
船、左宮内丸、右汐行丸竝爲御側御用人、左榮壽丸爲御  
使番船、右清武丸爲御書院舟、中飛鳥丸爲御臺所、左新  
田丸、右青白丸竝爲御家老、左行吉丸爲御湯殿船、右根  
占丸爲御馬船、中音羽丸爲御船奉行、別釣流二艘・水傳  
間一艘・白木小早八幡丸一艘悉爲列從、二十七日入坂越  
津、自此陸行、三月二日抵大坂邸、五日駕舟繫京橋詣、  
六日至伏見邸、七日微行觀京、八日召萬福寺<sub>主僧</sub>伯願、九日筧  
邸、晦日至芝邸、自表玄關入御休息所<sub>御差味御統</sub>服御羽織御野箱則進御髮斗  
子先例云、訪御守殿、此月十八日於綾君亦發府城、歸寧京  
師而如江戸命也、二十七日請立爲繼室未報、四月二日徧  
訪閣老松平周防守・板倉佐渡守・田沼主殿頭各第爲客對  
也<sub>服紗物、</sub>十三日 大家使田沼主殿頭來邸<sub>公撥斗</sub>勞之<sub>日半切</sub>、島津  
久柄迎接拜恩 公攝也、十五日行朝觀禮<sub>長上下</sub>還謝列閣<sub>同服</sub>  
俱或、十六日謁大圓寺<sub>號斗目</sub>告至也、十八日 淨岸君臨御休  
息所<sub>公御</sub>催囉子也、二十一日訪三家及列侯邸<sub>不洗物</sub>、二十五  
日謁五社於高輪亦告至也<sub>服髮斗</sub>、竣臨茶亭<sub>易</sub>、此日命樺山七  
郎・島津小平太直于御近習番所、令以時召於前皆國老子  
也、二十七日許林玄達自登三百斛特恩也、前此御内證御



重豪公御譜中  
正文在文庫

支度所改表御休息所、至是令曰御居間、二十九日謁惣廟於増上寺長上下、退臨源舜庵易服麻上下而還、五月三日謁上野宮長上下、退臨圓覺寺易服麻上下而訪佐竹候還、四日大家使老女來于守宮賀端午節目半上下、五日造兩營賀節服袈帷子還謁守宮易半、十日 公夜召赤松甚右衛門則正・二階堂節行且・關山軍兵衛金陣・島津登久連・新納次郎四郎久儔・兒玉早之丞實門・柏百鬼伯貞・丸目元養道貞・相良彌千母長興闢辨香焉、十一日 大家命 公、許再娶甘露寺氏爲夫人、乃松前主馬齋策來邸、公迎諸御座間而拜 命水色帷子允所請也、二十六日命御小納戸、凡正五九月值正覺君・慈照君諱辰、宜遣一員齋活花脫カ一桶及官香攝進之於大圓寺(マ)著爲例矣、六月六日前此甘露寺君賜於綾君改多千姫君、至是令以稱之、十三日訪一橋宮熨十縮御帷此觀始也、十七日夫人至邸公服熨十縮、二十一日結納婚禮于御中奥公服花色芭蕉御上下、珍長御上下、而御近首役以上亦皆、御帷子蓋竣謁守宮易半、時甘露寺君使雜掌準之、但半上下、其他不必然云藤木玄蕃來聘于邸 公亦花色御帷子召見之表御書院、二十五日 公及夫人獻守宮饌爲奏散榮新婚故也、

636

重豪公御譜中  
正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、  
〔本明和七年〕 正月十一日  
板倉佐渡守 勝清判  
松平周防守 康福判  
松平右京大夫 輝高判

635

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、  
〔悉明和七年〕 正月七日  
松平右京大夫 輝高判  
松平薩摩守殿

阿部豐後守 正允判  
〔悉明和七年〕 正月七日  
松平薩摩守殿

松平薩摩守殿

松平右近將監  
武元判

637 全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和七年」  
正月十一日

阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

633 重豪公御譜中

正文在島津山城

加冠

宜爲

明和七寅

正月十八日

重豪公  
御判

島津壯之助

若狹

639 正文在小松帶刀

加冠

小松吉次郎

宜爲

明和七寅

正月十八日

重豪公  
御判

仙十郎

640 重豪公御譜中

明和七年庚寅正月二十七日、重豪發薩府朝于江都、  
家老島津左中久金・樺山左京久智、側用人赤松甚右衛門  
則正、側用人兼近習役關山新左衛門金郷・二階堂蒞行且、  
近習役村上桂馬範村等從駕焉、歷九州之驛路、二月十  
一日到豊前大里、十二日遇風波滯留于此、十三日  
乘舩發大里、二十七日著播州坂越、自是歷陸路三  
月二日到大坂、三日四日留滯、五日發大坂溯河流、  
其夜著伏見之旅館、七日發伏見路歷東海之驛、十  
六日到遠州掛川、自是日大雨、大井川水滿不得涉  
也、至于十九日留滯于此、二十日止宿于金谷驛、  
二十一日涉大井川、二十三日宿于箱根、越酒匂川水  
溢不可涉、至二十六日留宿于箱根、二十七日發箱  
根、既而道路不遲留、晦日著于江都直入芝邸、四  
月十三日 上使執政田沼主殿頭意次奉旨來芝邸、慰  
跋涉之勞、十五日重豪登營、獻太刀一腰・白銀五十

枚・縮緬二十端<sup>二</sup>拜<sup>二</sup>謁

大樹家治公<sup>一</sup>、此因<sup>二</sup>參覲<sup>二</sup>賜<sup>二</sup>拜謁<sup>二</sup>也、又以<sup>二</sup>太刀一腰<sup>一</sup>・

白銀五十枚<sup>二</sup>獻<sup>二</sup>

儲君家基公<sup>一</sup>、且因<sup>レ</sup>例家老島津久金・樺山久智各獻<sup>二</sup>太刀一腰・馬代白銀一枚<sup>一</sup>並賜<sup>二</sup>拜謁<sup>二</sup>也、久金進拜之、奏者土屋能登守篤直領<sup>レ</sup>之、久智大岡兵庫頭忠喜領<sup>レ</sup>之、至<sup>二</sup>于此<sup>一</sup>禮畢重豪乃出、

641 重豪公御譜中

初重豪之曾祖大母淨岸院主請<sup>二</sup>甘露寺前大納言規長之令

愛<sup>二</sup>内<sup>一</sup>於<sup>二</sup>宮侍焉<sup>一</sup>、是故與<sup>レ</sup>余爲<sup>二</sup>側室<sup>一</sup>、既而奉<sup>二</sup>送之薩府<sup>一</sup>

在<sup>二</sup>宮焉<sup>一</sup>當時名稱於殿、格式同皇考與德、公之冥母嶺松院、而班位亦次之、而會<sup>二</sup>去年九月二十六日元

妃德川氏没<sup>一</sup>、因亦以<sup>二</sup>淨岸院主之命<sup>一</sup>立<sup>二</sup>甘露寺氏之女<sup>一</sup>

爲<sup>二</sup>元妃<sup>一</sup>、凡請<sup>レ</sup>官且有司之報復見<sup>二</sup>于左<sup>一</sup>、於是今年二

月十八日發<sup>二</sup>薩府<sup>一</sup>、先過<sup>二</sup>京師<sup>一</sup>、側用人<sup>二</sup>階堂源太夫行

端、納殿役人竹原兵右衛門建平、其餘納殿役以下之吏從<sup>レ</sup>

與護送、路歷<sup>二</sup>九州中國<sup>一</sup>、四月二十四日着<sup>二</sup>大坂<sup>一</sup>、滯留數

日、五月二十一日發<sup>二</sup>大坂<sup>一</sup>、溯<sup>二</sup>河流<sup>一</sup>、二十二日着<sup>二</sup>京師<sup>一</sup>之

私邸<sup>一</sup>、在<sup>二</sup>于此<sup>一</sup>者數日矣、因存問家嚴獻<sup>二</sup>遺親戚<sup>一</sup>在京之日家嚴規長

更賜名改、稱多干姬、六月朔日遂發<sup>二</sup>京師<sup>一</sup>、經<sup>二</sup>東海道美濃路<sup>一</sup>、十七日

着<sup>二</sup>江都芝邸<sup>一</sup>、二十一日有<sup>二</sup>結納之式<sup>一</sup>、此日納爲<sup>二</sup>元妃<sup>一</sup>、

642 全上

扣正文在家老座

於綾樣御事直<sup>二</sup>御前樣<sup>一</sup>御建被遊<sup>レ</sup>樣 御守殿<sup>レ</sup>被申

上置<sup>レ</sup>由、舊臘廿三日御使便委曲被申越趣致承知、達

貴聞候處、於綾樣 御前樣<sup>レ</sup>當分之通<sup>二</sup>直<sup>一</sup>被遊御

建<sup>レ</sup>由表、此上表

太守樣何ぞ 思召不被遊御座段承知仕<sup>レ</sup>付、弥其通御得

心被遊<sup>レ</sup>樣

御守殿<sup>レ</sup>被申上、御落着被遊<sup>レ</sup>表、甘露寺家<sup>レ</sup>表

御守殿<sup>レ</sup>被仰進

公邊向御願等之儀者御都合宜樣可被致首尾旨、去ル十六

日急飛脚を以申越置<sup>レ</sup>、然處舊臘晦日急<sup>二</sup>被差立<sup>レ</sup>三

原善兵衛儀、昨十八日致着被申越趣、猶又被申合<sup>レ</sup>趣表

一々致承知達

貴聞候處 御守殿<sup>レ</sup>表御得心被遊、御幸<sup>二</sup>被<sup>一</sup> 思召上候、

右<sup>二</sup>二付<sup>一</sup>者早々御願被相立<sup>レ</sup>儀共萬端宜樣可致首尾旨被

仰出<sup>レ</sup>間 御守殿<sup>レ</sup>御挨拶等之儀、御都合宜樣可被申上<sup>レ</sup>、左<sup>レ</sup>被申越<sup>レ</sup>通甘露寺家<sup>レ</sup>表 御守殿<sup>レ</sup>御使を以

被仰進、御落着之段御返答御座りハ、御願被 仰出り

儀共御都合宜様首尾可被致り、右甘露寺家御返答之趣

御守殿御使之人方京都御留守居に申聞、御中途に老御

留守居方早々飛脚を以御供之御用人に申越候様御使之人

に可被申合ひ、左に老於 御中途はやく御承知被遊

於綾様御當地御出立之御考に老相成筈り、且又新奥女中

之儀老、被申越通不殘御暇可被下旨承知仕り間、時節等

之儀老見合、不殘御暇被下り様首尾可被致り、右外之儀

共老追々可申越候得共、善兵衛着之上、達

貴聞り趣不申越り老難被致首尾儀老可有之哉と相考り

付、達

貴聞急飛脚を以早々此段申越り、以上、

〔采 一明和七年〕 正月十九日

小松清香帶刀

喜入久福主馬

榊山久智左京

島津久金左中

桂織久中部殿

島津久徳仲殿

寫正文在文庫

與中之者共行跡不相直り付、當在國に老段々申渡趣老有  
之り得老、其詮老可相立之處、却り頃日老度々致喧嘩り  
者有之由相聞得、不可然候、喧嘩口論禁制之儀老

公義御法令に老相見得、且亦短慮之働いたし理不盡に事  
を破り者老、加成敗所帶を可没収旨、毎朔之條目載置候、

左り得老親兄弟共より兼るきひしく可申付之處、若氣之  
いたりこゝる誠無益に致死傷候者及數多甚不便り、早竟若

輩之者故傍輩を打果、切腹さへいたしりへは事相濟と心  
得り處より輕く敷及喧嘩事り、第一老國恩を以遂生育り

へは、専忠勤を心掛、第二老父母之受大恩人となりり得  
老、夫々孝養を以可相報事り、左り得老自分之身こゝる我

儘に働候儀曾る不罷成筋候、ケ様之分を不辨致喧嘩候者  
老委遂吟味、無禮法外を働喧嘩之張本に爲相決者老、誠

不忠不孝之罪人と可申條、其身老凡下に申付、相果り死  
躰可爲取捨り、親兄弟共之儀老吟味之上、大形之依輕重

屹と咎目申付、其外高下之無差別右に準取計、依事老所  
帶を老可没収り、縱末々之者を打果りといふとも、依理

不盡之譯老應右吟味之上、是又屹と咎目可申付り、此通

申渡<sup>レ</sup>上、無禮法外之事共申懸、其偏ニ難差置事<sup>ハ</sup>とも、成りたけ其場を致堪忍、則筋<sup>ニ</sup>可遂言上、左<sup>ハ</sup>、彼者<sup>ハ</sup>者相當之咎目申付、尤神妙ニ取計<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>者屹と褒美可申付候、

右之通領國中屹と申渡、其外締<sup>ニ</sup>差可成細<sup>ク</sup>之儀共者、家老中申談可取計<sup>ハ</sup>、

〔未〕  
「明和七年」 正月

〔未〕  
「雜抄中」

與頭<sup>ニ</sup>

一與中之者共致喧嘩、相手を打果<sup>ハ</sup>節者、近邊之横目<sup>ニ</sup>申越、親類共ニ差差添、意趣之次第承届候上、切腹可爲致<sup>ハ</sup>、若無其儀切腹爲致<sup>ハ</sup>ハ、親類共越度可相成旨前<sup>ニ</sup>方被 仰渡<sup>ハ</sup>得共、頃日大形之趣<sup>ニ</sup>ハ間、此節分<sup>ハ</sup>被 仰出<sup>ハ</sup>上ハ、致喧嘩<sup>ハ</sup>者ハ無之咎<sup>ハ</sup>得共、萬一取違<sup>ハ</sup>者差有<sup>ハ</sup>之、致喧嘩<sup>ハ</sup>ハ、右仰渡之通を堅可相守<sup>ハ</sup>間、可被申渡<sup>ハ</sup>、

一與中之者共學文武藝無油斷相勤、禮儀作法宜、行跡相嗜<sup>ハ</sup>様との儀者、毎度被 仰渡<sup>ハ</sup>得共、書付之弘<sup>メ</sup>者何<sup>レ</sup>差同様之儀と取違<sup>ハ</sup>可有<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>條、今度差段<sup>ニ</sup>被仰渡

ハ趣<sup>ニ</sup>付<sup>ル</sup>者猶以實<sup>ニ</sup>其心懸無<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>不叶事<sup>ハ</sup>間、御條目<sup>ニ</sup>弘<sup>メ</sup>之外<sup>ニ</sup>差直<sup>ニ</sup>被申渡可然<sup>ハ</sup>、尤右躰之儀者丁寧<sup>ニ</sup>申教<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>宜<sup>ハ</sup>間、御役人・小番・大番<sup>ニ</sup>不依、其一郷中ツ、若者共<sup>ハ</sup>可致教訓之人柄見合被申渡置<sup>ハ</sup>方可宜<sup>ハ</sup>、文武之藝致指南<sup>ハ</sup>者共者猶以右之内<sup>ニ</sup>被相可加然<sup>ハ</sup>事、

一若者共向<sup>ク</sup>之交<sup>ハ</sup>其郷中外之者ハ中途<sup>ニ</sup>行合<sup>ハ</sup>節差、或謗雜言等申掛、又者衆道之儀共者二才中之腕立之様<sup>ニ</sup>心得違、法外之儀と者不存<sup>ハ</sup>哉、過半右式之儀<sup>ニ</sup>喧嘩<sup>ニ</sup>差および、無躰<sup>ニ</sup>若輩者を差打果<sup>ハ</sup>儀共有之趣<sup>ニ</sup>相聞得、甚以不可然<sup>ハ</sup>間、右式之儀共堅無之様<sup>ニ</sup>親兄弟共<sup>ハ</sup>存寄等不差置申聞、依事名前可申出<sup>ハ</sup>事、

一與中之内<sup>ニ</sup>者年長<sup>ケ</sup>ハ者、手前之非儀を以神妙<sup>ニ</sup>相見得<sup>ハ</sup>者を謗、却<sup>テ</sup>生立惡敷者<sup>ハ</sup>不宜儀を致催促<sup>ハ</sup>儀差可有<sup>ハ</sup>之、是又諸人之妨<sup>ニ</sup>別<sup>ハ</sup>不宜<sup>ハ</sup>條、稠敷被申付<sup>ハ</sup>様差可有<sup>ハ</sup>之、尤不相用<sup>ハ</sup>ハ、可被申出<sup>ハ</sup>事、

一諸稽古心掛宜、禮儀正敷律儀之者ハ可被申出<sup>ハ</sup>事、右之通被相心得、ケ條之内與中<sup>ハ</sup>可被申渡儀者、書付<sup>ハ</sup>又者直<sup>ニ</sup>差可被申渡<sup>ハ</sup>、何<sup>レ</sup>ニ差風俗相改<sup>ハ</sup>方出

精可有之外、

明和七年寅正月

左京

帶刀

645 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨ち御樽肴被獻之外、各申

談遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 一明和七年〕

二月四日

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

646

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨ち御樽肴被獻之外、遂披

露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 一明和七年〕

二月四日

阿部豊後守

正允判

647 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相

濟と目出度被存由得其意外、隨ち御樽肴被獻之外、紙面

之趣令承知候、恐々謹言、

〔采〕 一明和七年〕

二月九日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

648 重豪公御譜中

正文在文庫

今度

大納言様西丸御移徙爲御祝儀、以使者如目錄被獻之外、

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 一明和七年〕

二月十三日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

649 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊臘九日

大納言様西丸御移徙之段被承之、目出度被存由得其意外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕  
一明和七年〕

二月十三日

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

650 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊臘九日

大納言様西丸御移徙之段被承之、目出度被存由得其意外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔采〕  
一明和七年〕

二月十三日

阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

653 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又爲歳暮之御祝儀、從

公方様時服并御肴拜領、難有由得其意外、紙面趣及言上

651 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、舊臘九日

652 重豪公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦舊臘爲歳暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其

意外、紙面趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕  
一明和七年〕

二月廿三日

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

外、恐く謹言、

(奉)  
「明和七年」二月廿三日

阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

654 重豪公御譜中

始羅郡蒲生郷士嶺崎平左衛門儀市右衛門者、素他國産也、九歳時爲平左衛門僕、事之益謹事、無吉凶一出私財以奉給之、今茲春二月褒賞之、與粟米拾五石焉、

全上

扣正文在家老座

於綾様御事 御前様に御建被遊度

淨岸院様被 思召上り段

太守様御承知之趣、先月十九日江戸に相達り付、

御守殿より京都に之御使澁谷半左衛門に被 仰付、去ル

十三日被差立甘露寺家に申上り趣、別紙之通又者被申含

越、其上

淨岸院様より仰御文を以被仰進り、右に付御届等及間敷旨御差圖有之候、左の甘露寺家御落着りハ、其段則江戸に飛脚を以申越、御縁與御願之儀者京都迄中途日

積考之上、御雙方御願書同日被差出り儀、其外

於綾様御國元御出立之儀者、御縁與之仰渡御承知無之り、御願書被差出り時節御出立有之可然

淨岸院様被 思召上り、右御願付の者右近將監様に被得

御内意り處、御願書御案文迄被成御覽 思召無之、甘

露寺家御承知之御返答りハ、御願書者御用番様に可被

差出り、尤御日限者京都表御同日に被差出方宜由を奉御

丁寧被仰聞り、右次第の甘露寺家御返答相違り者、御

願書被差出り御日限、京都に江戸より可被申遣り條達

貴聞、何分ニ奉 御意之趣可申越り、往反有之迄者可被

扣置旨段々之儀別紙寫之通御内用を以、去ル十三日極々

急飛脚を以被申越り付、達 貴聞候處、何ぞ 思召寄不

被遊御座り、何分ニ奉御都合能首尾仕り様被 仰出候間、

甘露寺家御落着之御返答申來候ハ、御雙方御願書被差

出り御日取被相決、御願書被差出り様可被致首尾り、於

綾様御出立之儀者 御守殿 思召之通

太守様ニ奉 思召不被遊御座り間、御縁與之仰渡不被遊

御承知候の者、右御願書被差出り御日取等相究候節被申

越りハ、無延引御出立被遊り様其元は可申越置旨、此

方より及極々急飛脚の者同日江戸に返答申越り、別紙御

655



内用書付寫并半左衛門に被相渡り書付、京都御留守居に被申渡り書付・御願書御案文等都る七通相添、此段申越り條、御出立之儀者右通御願書被差出り御日取相決、其段申來りハ、無御滯御出立被遊り様委曲被申上置、御手當等之儀表右之趣を以可被致首尾り、以上、

〔朱〕「明和七年」

二月廿四日

〔朱〕上  
〔朱〕榊山左京  
〔朱〕島津左中

喜入主馬殿

〔朱〕下  
〔朱〕小松帶刀殿

川田伊織殿

656

〔朱〕「御船中備前出崎より到來 御返答

本文被申越趣承知仕り、二月十三日江戸より之極々急飛脚何日御船中に相達、何日之同日にあり哉、本文不相見得難計候得共、いつれに表本文御問合前以之筈り、左り得者甘露寺家御落着之御返答何ぞ御滯有之間敷儀に、於江戸御願書被差出り御日取被相究、其段御到來之上、無御延引御當地御出立被遊り様ことの御事付付る者、右御到來之儀大概今月十四五日比に表御到來表可有之哉、

於其儀者先達申越置り、今月廿七日迄者御問表有之付、一日に表はやく御出立被成り儀可然哉と申談、御出立御日執之内今日方御出立被遊り様於綾様に表申上り處、弥其通可被成旨承知仕、御手當等段々差急キ申渡置り、然處小倉中國路人馬寄方之儀、御旅方勤行列直等相兼り横目并人馬案内より先狀を以頼越り儀、爲決御日限に無之候る者御領内者御費迄に得共、他領者別る御厄害之時候、尤御縁與御願之通被仰渡り上御出立に、仰渡御承知無之候得者御出立難被成と申譯御座りハ者、左表可有之候得共、御縁與御願書可差出り御日執被相究、其段御承知迄之御事に得者、自御日執者可被相究事に故、たとへ御到來無之に表、弥今日御出立被遊方に被相究りる者如何可有之に哉、左りハ御領内者勿論、他領人馬寄方等旁宜り付、其通申談於綾様に表申上、弥今日御出立被成り、此段申越り條可被達 貴聞り、江戸に之御内用書付等都る此方に扣置り、以上、

三月十八日

〔本文書ハ六五五号文書ノ行間朱書ナリ〕

657

重豪公御譜中

白木御文書五番箱四十中

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以御國許御奉公入念可相勤候事、

一乍恐奉對

重豪様、毛頭不可存疎意候事、

一從 御國許被 仰下候諸事御條書之趣、堅可相守候、

若企惡意邪儀者於有之者、則可致披露候事、

一對國王無別心可抽忠勤候事、

一國中<sub>レ</sub>之掟并諸事無最順親疎可致沙汰候事、

右條々僞於申上者、

神文畧々

明和七年庚寅二月二十六日

與那原親方

良矩判

薩摩郡東鄉村市人仲右衛門及弟太左衛門、太郎右衛門者、

明和中歲饑、各出私藏米穀以賑救窮民百有餘人者再

焉、由是賞之、如仲右衛門・太左衛門年踰耳順、

故賞之令蠲其子丁役各十年也先仲右衛門・太左衛門皆定曆七年以救窮民既與褒賞故今如此

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

又舊臘爲歲暮之御祝儀、時服并御肴拜領之、難有由得其

意外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔采〕「明和七年」

三月朔日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕「明和七年」

三月六日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

右上包四十九  
琉球與那原親方三司官被仰付外神文壹通トアリ

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤候、紙面之趣令承

知、恐、謹言、

〔采〕  
一明和七年〕 三月九日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

於綾様御事

淨岸院様 思召を以

太守様 御前様ニ御建被遊度旨、甘露寺様ニ

淨岸院様御使澁谷半左衛門ニ被仰付、被差越御文を奏

被進、付、半左衛門儀去ル二日右御使相勤、御口上之

趣申上御文差上候處、委曲被成御承知、別御満悦ニ

被 思召之旨御答被仰進、右ニ付御縁與御願御日取

之儀、當月廿六日以後晦日迄之間、此御方より御願被

差出候御日取、甘露寺様御方ニ被仰遣、御同日可

被差出、四月中老右式御祝儀事ニ相懸、儀共、御

願迎表

禁裏に御差支ニ付、堂上方御一統不相成事之由承知仕、

江戸に及即夜町便を以申越、段京都御留守居申越、達

貴聞候、

一於綾様御道中御通路之儀、都

此御方様御取計ニ、甘露寺様被仰遣、然、御宿札

表

御前様ニ御通之筈、得共、甘露寺様御娘様ニ表向

彼御方御仕向之筋御内談可申上旨、於伏見被 仰出

付、右御内談之儀京都御留守居に申合置、

右之通ニ御願書被差出、御日取等、未江戸より何

分不申來、甘露寺様御娘様ニ御通路、得共、御關

所通之儀、彼御方より御諸司代に御手判御申受之事

、得共、段、難決儀共有之、付、御出立之御程合難

申上、先達、江戸に被申越、趣ニ、頃、日ニ御

願、被差出、右御時節ニ、其御元御出立之積、候得

共、右次第故決、之儀難申越、もはや御左右折角可

被相待事、付、先頃迄爲御納得申越、近、諸事御

治定之趣を以御出立之儀申越、様可致、以上、

〔采〕  
一明和七年〕

三月十三日

樺山左京

島津左中

喜入主馬殿

(采) 小松帶刀殿

川田伊織殿

(采) 御中途岡崎驛より江戸方御使便

本文被申越趣致承知、近々御治定之趣可被申越由ニ付故、今月末御使式日被延置、去ル十六日掛川驛より被差立、飛脚、昨廿九日晝時過致着、別紙御問合ニ御返答申越通、御關所通之儀彼御方御手判御申請可有之哉、若此御方より御申請ニ付、太守様より御諸司代に御書被差越御先例ニ候故、御供女中人數書等先達、江戸に申越、京都御留守居にも申越置、此段及御返答、以上、

三月晦日

(本文書ハ六六二号文書ノ行間久書ナリ)

全御譜中

扣正文在家老座

於綾様御縁與御願書被差出、御日限、江戸方申來答之段

去ル十三日申越通、來ル廿七日被差出可然旨、御守殿より御差圖有之、

御參勤之御禮不被仰上内、御願書御請取可有御座哉之旨、去御方并松平右近將監様、板倉佐渡守様に被得御内意候處、何ぞ御差支無之段被仰聞、弥廿七日御願書被差出、甘露寺様御方、右之趣横山權右衛門に申上、此御方様御同日是非被差出、様被申越候儀共、別紙之通申來、

貴聞、思召不被遊御座、右次第、京都之儀、御相違者有之間敷、然、

於綾様御出立御日限、御内、爲被究置段先達、被申越、御出立被遊、様被申上、御手當之儀共可被致首尾、別紙相添、此段極々急飛脚を以申越、以上、

(采) 一明和七年

三月十六日

(采) 樺山左京 鳴津左中

喜入主馬殿

(采) 小松帶刀殿

川田伊織殿

〔宋〕「御中途掛川驛より極々急飛脚便

御返答

本文被申越趣致承知り、御參勤之御禮不被仰上内にも御願書被差出り方ニ御内意表相濟りニ付る者、弥去ル廿七日被差出、無程御願之通被仰出る可有之哉と恐悅御同意奉存り、於綾様御當地御出立之儀者、御願書被差出時節御出立有之可然旨 淨岸院様被 思召上り由、右御日取之儀今月五日より先キと京都江江戸を爲被申越由り付る者、今月中旬比之御日取も可有之哉、小倉中國路御道中羨遙々之御事ニ得者、一日こゝろ羨早ク御出立被成り方可然哉と申談、去ル十八日御出立被成り、右ニ付る者同日御使便ニ朱書を以委曲御返答申越り得共、猶又別紙之通ニ付、御當地御出立以後、猶御安全御通路之段御領内者毎日御左右申來、肥後之内植木より羨同斷御左右申來り、此段申越り條可被達 貴聞候、被差越り別紙此方へ扣置り、以上、

三月晦日

〔本文書ハ六六四号文書ノ行間朱書ナリ〕

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿六日東叡山

〔家治生息〕至心院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤り、紙面

趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

〔宋〕「明和七年」三月十八日 板倉佐渡守 勝清判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿六日東叡山

至心院様御靈前 御參詣之儀被承之、恐悅之旨尤り、紙

面之趣令承知り、恐々謹言、

〔宋〕「明和七年」三月廿一日 田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在家老座

〔宋〕御返答

於綾様御事 御前様ニ御建被遊度

本文被申越趣致承知、御女中様方申上候、被差越候別紙写候而二階堂源太  
淨岸院様御使遊谷半左衛門勤方相濟、甘露寺様御答一通

夫并差越

り之儀先便申越通外、右御使相勤外節御直答之上、別

紙寫之通御請書半左衛門に被相渡、且又御縁與御願書表

答候、以上

向被差出外儀、其外御道中御通路等之儀者、少事込表都

而 此御方様御取計思召次第御座外様、別紙之通ケ條書

を以被相渡、達

貴聞候處、於綾様京都より御出立、表向者甘露寺家よ

り御取計、御道中之儀表甘露寺様御娘様ニ御通路外様

被成度外、其趣彼御方に御内談可致旨被 仰出外付、於

伏見横山權右衛門に申含、及御内談外處、弥 思召之通

表向者都の彼御方御取計之筋ニ、別紙之通御答書權右衛

門差越達 貴聞、諸事之儀甘露寺様御娘様ニ江戶に御

下向之筈ニ御治定外間、右之趣 於綾様達 御聽外儀、

頭一通り今日便二階堂源太夫に申越外得共、別紙委細之

儀者、猶又其元と源太夫に可被申越外、

御守殿に右右之段半左衛門此節着之上申上積外、別紙四

通相添此段申越外條、御女中様方に可被申上外、以上、

〔宋〕「明和七年」三月廿七日 〔宋〕 榊山左京

〔宋〕「四月廿八日」 〔上〕 鳴津左中

喜入主馬殿

〔宋〕「下」小松帶刀殿

川田伊織殿

扣正文在家老座

甘露寺前大納言娘

再縁 松平薩摩守に

右縁組奉願候、以上、

〔宋〕「明和七年」三月廿七日 松平薩摩守取次

〔宋〕「下」松前主馬

671

重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御再縁御願書別紙寫之通、昨廿七日御用番板倉佐

渡守様は、御用御頼松前主馬様を被差出外處、無御滞被

成御請取外付

御守殿に申上、御一門様方其外兼る爲御知有之御方に御

しらせ等相濟、御中途に右別紙を以申上、於爰元致通

達、京大坂御留守居に右爲承知申越外、此段申越外條

御女中様方に被申上、其元通達等之儀共、何分ニ表被致

首尾ニ有可有之、御願書首尾克被成御請取、恐悦御同意奉存、右ニ付

御守殿并

太守様ニ拙者共御祝詞申上、各御祝詞之儀、何分可被申談、且

於綾様其元御出立御時節等之儀共、先達、御中途ニ申上、其元ニ御中途より御治定之趣を以、時々被申越候様其節々申越置、段々爲被致承知ニ有可有之、別紙貳通相添差越、以上、

伊 御女中様方 於綾様ニ拙者共御祝詞不申上候、

〔朱〕「明和七年」三月廿八日

〔朱〕「上」 嶋津 仲（久雙）

桂 織部（久忠）

喜入主馬殿（久種）

〔下〕小松帶刀殿（精善）

川田伊織殿（貞徳）

〔朱〕「江戸より急飛脚を以被差越、四月十五日朝到來

御返答

本文被申越趣致承知、御女中様方ニ拙者致參上、御直

〔朱〕「一雜抄中」

定

ニ申上、御銘々様御満悦被思召、段承知仕、御一門・大身分・其身獨禮・御女中方并御役人限致通達、右ニ付 御守殿其外様ニ拙者共御祝詞之儀御願之通被 仰出、御到來之節一所ニ先例之通御祝詞申上、答ニ申談、右通御女中様方ニ御直ニ申上、儀者於綾様 御前様ニ御建被遊、思召上、御側御用人を以申上置、御縁與御願被差出、段御到來之節、私共方申上、様可被仰付哉之旨奉伺、弥其通可仕旨 御發駕前承知仕、右之通爲申上事ニ御座、此段者爲御心得、先以御願書首尾能成御請取、恐悦御同意奉存、被差越、別紙貳通此方ニ扣置、以上、

四月廿八日

〔朱〕「本文書八六七一冊文書ノ行間外書ナリ」

一何事ニよらず不宣事に百姓大勢申合せ候を、ととうとなへ、ととうしてして願事企立るを、こうそといひ、或ハ申合せ村方立のきを、てうさんと申、前々御法度ニ條、右類之儀有之ハ居村他村ニ不限、早

くそのすしの役所に可申出、御褒美として

ととうの訴人

銀百枚

こうその訴人

右同斷

てうさんの訴人

右同斷

右之通被下、其品により帶刀・苗字褒御免可有間、たとへ一旦同類に成りとも發言致り者に名前申出におひてハ、其科をゆるされ、御褒美被下ルへし、

一右類訴人致ス者褒無ク村々騒立外節、村内の者を差押、  
ととう(ママ)之企はらせず、壹人褒さしめたる村方はあらハ、村役人ニ褒百姓ニ褒重キニ取しつめり者ハ、御褒美銀被下、帶刀・苗字御免、さしつゝきしつめり者共褒是あらハ、夫々御褒美下しおかるへき者也、

明和七年寅四月

奉行

右之通御料ハ御代官、私領地頭所方村々相觸、高札相建有之村方ハ高札ニ認相建可申外、以上、  
右之通可被相觸外、

四月

674

重豪公御譜中

正文在文庫

去年御暇之節、被差出り當分相續願書、致返進外、以上、

〔采〕  
「明和七年」

四月二日

松平右近將監

松平薩摩守様

675

重豪公御譜中

正文在文庫

明日五半時登

城、參勤之御禮可被申上外、以上、

〔采〕  
「明和七年」

四月十四日

板倉佐渡守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

676

正文在文庫

家來二人

御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

677

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之、遂披露外處一段



之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」 四月廿五日

康福判

松平薩摩守殿

松平周防守  
康福

全上

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外處一段  
之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」 四月廿五日

正允判

松平薩摩守殿

阿部豐後守  
正允

〔宋〕「存口裏」

679 重豪公御譜中

正文在文庫

銀拾五枚

松平薩摩守家來

水間喜八

新曆調相濟骨折外ニ付被下之、

〔宋〕「在口裏」

松平薩摩守江

〔宋〕  
「明和七年」

680 重豪公御譜中

正文在文庫

為端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲松平周防守可  
述外也、

〔宋〕  
「明和七年」 五月二日

家治公  
學印

薩摩  
中將殿

681 全上

為端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外  
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」 五月二日 阿部豐後守  
正允判

松平薩摩守殿

682 重豪公御譜中

扣正文在家老座

太守様御再緣御願書、御用番板倉佐渡守様江御用御頼

松前主馬様方被差出、無御滯御受取被成外段者、三月

廿八日便織部殿・仲殿被申越通外處、今日佐渡守様よ

り主馬様被召呼、別紙御書附寫之通被仰渡、

太守様被成御承知、爲御禮御老中様方・田沼主殿頭様

に御廻勤被遊筈外處、御脚痛氣被成御座外付、御名代

島津式部殿に御老中様・主殿頭様に御禮被仰達、若

御年寄様方に老左中御使者、御側衆に老物頭御使者を

以御禮被仰達外、

一 御内證より表女御使を以

公方様 大納言様 御臺様に御禮被仰上外、

一 民部卿様・日光御門主様・御三家様其外右躰之節、爲

御知等有之御方様に老、御使者等を以御しらせ被仰達

外、

一 京都御諸司代・大坂御城代并彼表御しらせ可有之御方

様に老、京大坂御留守居御使者を以被仰達外付、今日

便御使番より申越外、

一 長崎御奉行當分御在府之御方に御使者を以被仰達、御

在勤之御方に老御付人以御使者被仰達外付、今日便御

使番より其元同役に爲申越外間、可申出外、

一 淨岸院様に 太守様方御側御用人御使者を以、御願之

通被爲濟外段爲御知被仰進外、將又

淨岸院様より甘露寺様に御願之通被爲濟、御互御満悦

被遊外旨、京都御留守居御使者に被仰進

太守様より表御吹聴旁同斷御使者を以被仰進外付、御

使番より申越外、

一 右之通御願被爲濟候付、御禮御献上物御窺書老、先例

書被相添被差出等候、追可申越外、

一 於綾様御事、御縁與御願之通被 仰渡外旨御承知之上、

大坂御立被遊筈之段老先便申越通外處、今日右通佐

渡守様より被 仰渡外付、此段可達 御聽外、左外

大坂御立之儀老甘露寺様に右仰渡之儀、今日京都に被

仰越之由内々承外付、此御左右大坂に不相達内、彼御

方仰渡表可相濟外得共、程合難計外、然老此御方仰渡

被爲濟外老、彼御方仰渡相濟、其段表御承知之上大

坂御立被遊筈に、兼る甘露寺様被仰遣置外付、京都御

留守居方彼御方仰渡相濟外段申上外節、大坂御立可被

遊旨申上外、

一 於綾様御名、御順様と字等別紙之通申渡外條、其元

に表被申渡に可有之外、

一 諸御役人・諸士則日御祝儀申上、相殘外面々老明後十

三日御祝儀申上等外、拙者共より其元御祝儀之儀老、

追可御使申上等外、

一 御守殿 其外様ハ御祝儀者先例を以被申談、通達等被致ス可有之ハ、

御守殿 太守様ハ拙者共より御祝儀申上、溜池・三田ハ表申上ハ、

一 於綾様江戸ハ御着當日者、御着ニ付一通之御祝ニハ、

御結納・御婚姻御式之儀者御輕ク御祝可被遊旨被

仰出、御婚姻御日取來月廿一日吉日ニハ故、右御日限前以御精進日間御着被遊筈ニハ、

右申越候條

御女中様万可被達 御聽ハ、左ハ御弘メ又者隣國爲

御知等之儀、先例を以可被致首尾ハ、御着當日并御婚

姻之御次第書追ハ差越、御祝物御取替之儀表其節可申

越ハ、先以無御滯被仰渡、恐悦御同意奉存ハ、今日之

飛脚大坂迄者極ク急ニハ、彼地より者急ニ申付差越ハ、

此段者爲御納得ハ、別紙仰渡之御書付寫一通・通達寫

三通差越ハ、以上、

〔朱〕「明和七年」五月十一日 〔朱〕 榊山左京

〔上〕 島津左中

喜入主馬殿

〔朱〕「下」小松帶刀殿

川田伊織殿

〔朱〕「御返答

本文被申越趣致承知、御女中様方ハ申上、一昨朔日

惣出仕ニ御祝儀申上、今日隣國爲御知先例之通致首

尾、淡路守殿へも御しらせ申上ハ、長崎御奉行ハ御し

らせ之儀、其元詰御使番方同役ハ申越ハ由申出ハニ付、

弥御付人御使者勤之儀可申越旨御使番ハ申渡ハ、且又

御女中様方より

淨岸院様 其外様ハ表今日便御祝詞被仰進ハ様申上、

御一門・大身分其外方も兼ハ御祝詞被申上來ハ通、今

日便被申上ハ様致通達、拙者共・若御年寄・大御目付

方も先例之通、今日便以書狀御祝詞申上ハ、

一 先年 〔重家室、華山氏〕 慈照院様御縁與被 仰出ハ節者、

宥邦院様より御使者、御女中様方ハ奥大番御相中使

ニ御祝詞被仰進ハ節ニ相見得ハ、

〔宗〕 慈德院様御縁與被 仰出ハ節者御相中使不被差越、

〔重年繼室〕 智光院様 御前様ニ御建被遊ハ節、御相中使不差越筋

ニ相見得、段々御例相並不申ハ、此節御結納・御婚姻

御式之儀者、御輕ク御祝可被遊旨爲被 仰出由ハニ付、

先御相中使不及段申上置り間、いつれこも御相中使を以被仰進方ニ御座りハ、御婚姻被爲整り以後、御相中使被差越り様可被仰付哉と申談、此段申越り條、被相窺何分被申越りハ、御女中様方に申上り様可致り、一於綾様御名、御順様之字并御名遠慮之儀も致通達り、慈照院様御縁與被 仰出り節、御名遠慮之儀、實名之字者相改ニ不及由被 仰出り段相見得り、此節も其通可被仰付り哉、何分ニ表被相窺可被申越り、其内者先其元ニ被申渡り通、爰許ニ表致通達置り、右爲可申越、先月末御使式日を被召延置、今日被差立り、

先以御願之通御縁與被仰渡、恐悅御同意奉存り、被差越り別紙四通此方に扣置、此段及御返答り、以上、

六月三日

(本文書ハ六八二号文書ノ行間朱吉ナリ)

全上

正文在文庫

甘露寺前大納言娘

松平薩摩守に

右願之通縁組被仰付之、

685

重豪公御請中

扣正文在家老座

甘露寺前大納言娘に縁組願之通被 仰付、難有奉存り、依之

公方様 大納言様 御臺様に献上物仕、御禮申上度り、

萬壽姫君様に献上物如何可仕り哉、先例無御座り間、何

分表被成御差圖可被下り、以上、

(采) 一明和七年

五月十三日

松平薩摩守

686

(采) 「雜抄中」

近名又ハ外城方馬を牽、かこしまへ差越り節者、脇差指り格式之者たりといふとも都る無刀にて可差越り、常式脇差不指者ハ勿論之事り旨、先年申渡置趣有之り處ニ、頃日馬牽りもの脇差を指、或ハ通路之考も無之繋置、往還之妨ニ相成、或ハ致大酒、法外之躰ニ致徘徊不可然り、就中末々之者身分不相應之脇差を指り者も有之由相聞得、不届ニ、向後右躰之義無之様ニ屹と可申渡り、

右之通相守外様ニ支配頭・主人方桐敷可申付旨、與中・

支配中・諸外城・私領へ不洩様可被申渡旨可申渡外、

明和七年寅五月廿六日

(小松藩書)  
帶刀  
(川田國徳)  
伊織

687

(朱)  
「雜抄中」

一足輕・御中間・御小者并家中者其外以下之者共、於中

途御直子江行合外節、雨天ニ由木履乍踏致禮罷通外者

表間く有之儀、無禮之至外、向後御直士ニ行合外節、

鍔持せ外人躰ニ者必木履を抜、慙懃ニ致禮可罷通外、

其外ニ由表近付之士ニ者木履を可抜外、近付ニ由無之

外由表士と見請外ハ、相愼可罷通旨、先年被仰渡置外

處、緩せ相成致失禮罷通外者表有之由相聞得、此以後

違背有之者可沙汰外、且又夜行・辻歌之儀表兼由御禁

止被仰渡置外處、是以頃日夜行・辻歌、或ハ身分不相

應之致行跡、其外不成合又ハ不宜聞得表有之、不屈之

至外、此以後右躰之者外ハ、屹と可申付外、

右之通相守外様、支配頭・主人方桐敷可申付旨、與

中・支配中江不洩様可申渡外、

明和七寅五月

帶刀

688

重豪公御譜中

正文在文庫

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

(朱)  
「明和七年」

五月廿七日

輝高判

(朱)「在口裏」

松平薩摩守殿

松平右京大夫  
輝高

689

全上

御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹

言、

(朱)  
「明和七年」

五月廿七日

正允判

(朱)「在口裏」

松平薩摩守殿

阿部豊後守  
正允

690

重豪公御譜中

(島津貴久)

同年六月二十日修三太中公二百年忌法事於南林寺者三日

因茲使三番頭島津内膳久丘進三納香奠白銀十枚一拜上焉、

全上

扣正文在家老座

私儀昨日婚姻相整申外、依之御序之節御禮申上度奉願外、其節

公方様 御臺様ハ献上物別紙先例を以相窺申外、

大納言様 萬壽姫君様ハ献上物之儀、此節若如何可仕外哉、何分及御差圖被成可被下外、以上、

(采)御付紙

婚姻御礼被申上ニ不及候一

六月廿二日

松平薩摩守

重豪公御譜中

扣正文在家老座

(采)御返書一

去ル廿一日御結納・御婚姻御祝被遊筈之段若先便申越通ニ外、弥廿一日巳刻御中奥ハ

太守様 御前様御着座、別紙次第書之通、御祝萬端首尾能被爲濟、猶御機嫌克被遊御座外、

淨岸院様ニ及御入被遊筈外得共、御座御手狹故、於御守殿是又次第書之通、御料理等被進外、

一廿一日御婚姻御整被遊筈之段、去ル十八日御用番松平右近將監様ハ御名書之御届被 仰出置、猶又則日御留

守居を以御届被 仰出外、

一右ニ付 太守様 御前様より

信解院様ハ御吹聴御使者を以被仰進

妙心院様

御前様より納殿役御使者を以御吹聴被仰進相済候、委細之儀若御使者より

太守様より御使者御口上書を以御吹聴被仰進、

御前様より及御使者御口上書を以被仰進外、此節若物毎御經御取扱付、御祝物之御取替不及、

御二方様ハ 御三方様ハ御互御祝詞之儀共、今日便御使番ハ其元同役ハ申越させ外申出ニ可有之外間、可被致差圖外、且又 御女中様ハ御相中使ニ不及、御一

門以下進上物并相中使ニ及不及旨被仰付外條、右躰之節 御二方様ハ御祝儀被申上外面ニ考、狀文を以御祝

詞被申上外様通達被致ニ可有御座外、右通ニ外故、於爰元拙者共其外より進上物無之外、此段爲御存外、

一通御祝物御取替若無之外得共

嶺松院様ニ考格別成御事外付、

太守様より經キ御樽看御内ニより可被進旨承知仕外付、候由、別紙之通納殿役人申出候間、取立立被申渡、先例之通御使者を以被調方被申渡、御側廻御使者を以被進外様可被致首尾外、

淨岸院様より其元御取替を以御内ニより御進上被成度被思召

御前様より其元御取替を以御内ニより御進上被成度被思召

御前様より其元御取替を以御内ニより御進上被成度被思召

嶺松院様より表被進<sub>レ</sub>儀者其通可有御座旨、是又承知仕<sub>レ</sub>間、被達 御聽、御同様被進儀ニ<sub>レ</sub>ハ、其段可被申越<sub>レ</sub>、左<sub>レ</sub>ハ、於爰元取仕立、御使者を以被進<sub>レ</sub>様可致首尾<sub>レ</sub>、

一 御一門様方其外様ニ

御前様去ル十七日被遊御着、廿一日御結納・御婚姻御整被成筈之段、御使者等を以爲御知、御祝物御斷之儀共被仰達<sub>レ</sub>、

一 拙者共其外御役人當日御祝儀申上、諸士者當日又者後(宋)本文御祝儀之翌月並御礼禮出候面、一昨十三日御祝儀申上候、隣國御日御帳ニ相付、御祝儀申上<sub>レ</sub>、於其元御祝儀、隣國爲御知等及可有之哉、先例を以被申談、何分表可被致首尾<sub>レ</sub>、

一 右ニ付 御守殿・溜池・三田ニ及拙者共御祝儀申上<sub>レ</sub>外、(宋)本文 御守殿・溜池・三田へも先例之通御祝儀申上候、兼而御祝儀被申上各より及御祝詞被申上、兼而右躰御祝儀被申上<sub>レ</sub>外、面々候面へも、今日便御祝詞被申上候様致通達候。 其元 御女中様方ニ書狀を以御祝儀申上<sub>レ</sub>、

一 御前様へ拙者共御祝儀申上<sub>レ</sub>、其元より及先例之通御祝儀被申上ニ<sub>レ</sub>可有御座<sub>レ</sub>、

右之通御結納・御婚姻首尾克被爲濟、恐悦奉存<sub>レ</sub>、(宋)右及御返答候、御祝等首尾克被爲濟、恐悦御同意奉存候、被差候様別紙此段申越<sub>レ</sub>條

式通此方へ扣置候、以上  
御女中様方被達 御聽儀者被申上、御祝儀等之儀共先例を以被申談被致首尾ニ<sub>レ</sub>可有御座<sub>レ</sub>、京大坂ニ

表今日便申越<sub>レ</sub>、別紙次第書ニ通差越<sub>レ</sub>、以上、

一 御玄喚前雙方出口、足輕四人羽織袴、

一 警固番貳人、支度麻上下、

一 表御門駒寄之間、立番足輕人數見合、

一 中之口御玄喚番、足輕四人、

一 内御玄喚詰、例之通可相動<sub>レ</sub>、支度麻上下、

一 御屋鋪中御步行四人、足輕六人、御普請方之者八人、

火羽織着外廻、

一 御近習役以上者華色帷子かね麻上下、

一 諸御役人并諸士忌色ニ<sub>レ</sub>無之帷子麻上下又者十徳、

一 大御書院御床御掛物壽老人立松御棚飾、

一 表御書院御床御掛物壽老人活華御棚飾、御取付之間、

鳩之間御掛物活華香爐類見合御棚飾、

(宋)「明和七年」六月廿三日 (宋)「上樺山左京

(宋)「開六月十五日」

桂 織部殿

喜入主馬殿

(宋)「下」小松帶刀殿

川田伊織殿

島津 仲殿

## 御結納御婚姻之次第

一時觸、例之通、

一表御門押番貳人、支度麻上下、

一張番所物頭壹人、支度麻上下、

一右同斷御兵具所肝煎、麻上下、足輕羽織袴、例之通可相勤外、

一小番・大番・打込番、支度麻上下、

一御勝手御書院御床御掛物活華御棚飾、

一御見舞之御方樣可有之儀及外間、御掛合五六人前之手當可致置外、

但 御末仕出、

一御附使者有之外ハ、於鳩之間二汁三菜之料理・菓子・

薄茶、御出入之醫師右同斷、出座見舞御馬廻貳人、

但 十人前之手當物奉行仕出、

一依御使者柄者、御取次之間に致案内置、御用人御返答

可申達外、

一御付使者に御返答、依御向柄御用人・御留守居可申達

外、

一御廣間寄小姓見合可申渡外、

一御中奥御床御掛物壽老人立松御棚飾、丁子風呂、

(佐土原島津久柄老)

一於薰殿に被成參上外樣、前以御年寄右文を以可申上外、

一御中奥に

太守樣 御前樣御着座、

一御熨斗上、白木三方、

一御茶上、

一式御三獻上、

一御雜煮上、

一御差味上、

一塗三方御土器上、

一御挾着上、

一御銚子上、但 御取替可被遊外、

一御吸物上、御掛盃、

一簡之御銚子上、

右 太守樣 御前樣御寄合

但 於薰殿御相伴、

一御意次第第二汁五菜之御料理上、

但 御着御居付上、



太守様 御前様御寄合

但於薰殿御相伴、

一 御銘々御盃上、

一 御銚子上、

一 御肴上、

但書同斷

一 御吸物上、

一 御島臺上、

一 御挾肴上、

一 御銚子上、

一 御湯上、

一 御菓子上、

一 御濃茶上、

一 御後菓子上、

一 御薄茶上、

一時節見合、問之御吸物・御肴、問之御菓子上、

一 御後段 御意次第可差上外、

一 御吸物・御銚子・御肴上、

一 御年寄・若年寄・表使・御中藤・若女中迄吸物・銚子

可被下外、右以下江老取肴・御酒可被下外、

一 納殿役人江御年寄同斷可被下外、

一 於薰殿供之年寄江老御年寄同前吸物・銚子可被下外、

右以下之供女中江老取肴・銚子可被下外、

一 於表御家老江御吸物・御取肴・御酒被下、於御中興

御前様より御盃頂戴、御肴可被下外、

一 御側御用人・表御用人・御近習役・御納戸奉行江於御

近習御吸物・御酒可被下外、

一 於御中興、御側御用人・御近習役・御納戸奉行・納殿

役人江御通可被下外、御側廻并奥勤之面々江於席々取

肴・御酒可被下外、

一 御年寄・若年寄・表使・御中藤・若女中迄御通可被下

外、

一 御樽肴

右 淨岸院様江從

太守様 御前様御年寄を以御内々可被進外、

一 御守殿 其外様江兼而御祝儀申上外面々老、早晚之通

御祝儀可申上外、

一 諸御役人御祝首尾克被爲濟外付、謁御家老御祝儀可申

上外、諸士老當日又老後日御精進日間御帳ニ相付可致

退出外、

右之通御手當可申渡外、御日限之儀若追可申渡外、

〔宋〕  
「明和七年」五月

左京

御結納御婚姻御祝當日、於 御守殿

（雜豐臺、竹座）  
淨岸院様江御祝被進外次第

一淨岸院様江於 御守殿御祝被進外段、前日以御年寄被

仰進、當日猶又可被仰進外、

一御熨斗上、

一御茶上、

一御雜煮上、

一御差味上、

一塗三方御土器上、

一御挾肴上、

一御銚子上、

一御吸物上、御懸盃、

一簡之御銚子上、

一御意次第第二汁五菜之御料理上、

俱 御肴御居付上、

一御盃上、

一御銚子上、

一御肴上、

一御吸物上、

一御島臺上、

一御挾肴上、

一御銚子上、

一御湯上、

一御菓子上、

一御濃茶上、

一御後菓子上、

一御薄茶上、

一時節見合、間之御吸物・御肴、間之御菓子上、

一御後段 御意次第可差上外、

一御吸物・御銚子・御肴上、

右之通御手當可申渡外、

〔宋〕  
「明和七年」六月

左京

全上

正文在文庫

端午之

御内書可相渡外間、明日五半時

御城に家來可被差出外、以上、

(采)  
「明和七年」

六月廿四日

松平周防守

松平薩摩守殿

松平

薩摩守様

御返事

人々御中

清はし  
うら田

697

全上

寫正文在右筆所

なをく何もく承りまいらせり、めてたくかしく、

御ふみ下されり、

公方様 大納言様 御臺様御機嫌能成せられ

萬壽姫君様御機嫌よく入せられ、御めてたく思しめしり

よし、さてハ 御おくさまより年中御献上物之儀、

御守殿より御伺ひあそハしり處、御願のとをり相濟り由

御承知被成、ありかたく思しめしり由、右の御禮として

公方様 御臺様に御さかな一折ツ、御おくさま方御け

ん上被成たく御願ひ被成りとの御事、御文の趣承知いた

しまいらせり、めてたくかしく、

まつしま

高をか

たき川

むめた

(表紙)

重豪公

自明和七年閏六月  
至同 八年十二月

追  
録  
舊  
記  
雜  
録  
卷百廿六

698

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐  
く謹言、

<sup>(朱)</sup>「明和七年」  
閏六月五日

勝清判

松平薩摩守殿

<sup>(朱)</sup>「在口裏」  
板倉佐渡守  
勝清

699

全上

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二器被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐  
く謹言、

<sup>(朱)</sup>「明和七年」  
閏六月五日  
正允判

松平薩摩守殿

<sup>(朱)</sup>「在口裏」  
阿部豊後守  
正允

700

重豪公御譜中

寫正文在右筆所

返々めてたくかしく、

上々様かた御機嫌よくならせられ御めてたさ、さてハ御おくさまより年中御献上物の儀御ねかひの通り相濟、ありかたく思しめし

公方様 御臺様へその御おくさまより献上物被成り様ニ被成度思召りよし、御願のとをり御めてたく御肴一折ツ、御献上被成りやうに伺ひ相すみ御事ニ御さきり、めてたくかしく、

<sup>(朱)</sup>「明和七年」

701  
〔宋〕  
「近秘野艸」

まつ平  
薩摩守様  
人々御中  
うらた  
高をか  
瀧川  
清はし

明和七年庚寅閏六月七日謁 〔重年妾、島津貴備女〕 正覺夫人主於御座間、服芭蕉上下、因令定式、凡每月值 〔吉貴〕 淨國公 〔維豐〕 慈德公 〔宗信〕 圓德公 〔重年嫡室〕 智光夫人 正覺夫人諱辰親謁進香、如 〔重妾室〕 慈照夫人 〔重妾女、香徳〕 照雲君惟值正辰親進、其他期此因進 〔皆色兼煮〕 著爲例矣、十一日臨于赤松則正、島津久連・島津久金客舎、十八日大家使老女來于守宮賀新婚、公迎拜之 〔熨斗縮御帷、子麻御上下〕 日擢赤松甚右衛門則正・二階堂齋行且陞大御目附格、賜職祿各二百斛、皆進其爵世列寄合、奉職如故、特恩也、七月四日 大家使人賜 公雲雀、時 公少疾、招松平隱岐守攝迎拜恩、此月改御茶道頭曰御同朋頭 命也、九月二十六日謁 慈照夫人主於大圓寺、小祥忌也、凡 先君法事 公謁服長御上下爲例矣、而今服御熨斗目御上下以夫人故也、十月二十日命國老樺山左京 〔久惣〕 島津左中領御側事令交聽之、先是江戶西藩國老輪番領御側事、至是草焉、

702  
重豪公御譜中

十二月十六日謁大圓寺 〔服御熨斗、目御半切〕、先是近侍先番服熨斗目、至是故不洗物 命也、十八日 大家遣使賜鷹所擊鶴如例 〔服公〕 上、晦日除夜 〔熨斗目、長御襦〕

扣正文在江戶家老座

高輪私下屋敷ニ在每年夏中稽古鐵炮爲打申度御座外、此 〔宋〕 御付札 可爲勝手次第候

〔宋〕  
「明和七年」 閏六月廿七日 松平薩摩守

〔宋〕  
「右御伺書寄通、当日御用番板倉佐渡守様江御留守居佐久間新左衛門を以被差出置外處、同七月朔日御同人様より御留守居被召呼、御附札之通御用人ニ而中村與太夫江被仰渡外事」

703  
重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」 七月六日 康福判

松平薩摩守殿

松平周防守 康福

〔宋〕在口裏

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」七月六日

正允判

〔宋〕在口裏

松平薩摩守殿

阿部豊後守 正允

〔宋〕  
「雜抄中」

一英彦山七拾五房之修驗中御領國は従前老爲回檀差越事  
外處、來ル午年迄御驗約付、年限中回檀斷之儀彦山三  
房迄申越、諸坊中は可相達旨返答申來、回檀之山伏不  
入來善外旨、去年八月申渡置外得共、彦山中無據願之  
趣有之、五錢三錢之半減勸物致請用善外、右員數難差  
出者ハ其内ニ不苦候、尤檀家之内ニ表繼迎表勸物  
差出外儀難成者も可有之之間、右躰之者は老押而出方  
不申懸様彦山は申越外條、回檀入來外ハ、右通勸物可

差出外、此旨與中・支配中・地頭所・私領・明所之外  
城は不洩様可致通達外、

明和七年寅七月

〔舊人久極〕  
主馬  
〔小松清忠〕  
帶刀

重豪公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之外、遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」八月七日

輝高判

〔宋〕在口裏

松平薩摩守殿

松平右京大夫 輝高

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被  
獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」八月七日

正允判

〔宋〕在口裏

松平薩摩守殿

阿部豊後守 正允

708

重豪公御譜中  
正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之通贈給之、入念り段  
令祝着り、恐惶不宣、

〔(采) 明和七年〕 八月十三日 中將重豪御判

謹上 中山王

709

全上

慈照院卒去付、爲悔伊江按司被差渡、且又爲見廻以右使  
者別錄之通被相饋之、兩通之芳翰入念儀存り、恐惶不宣、

〔(采) 明和七年〕 八月十三日 中將重豪御判

謹上 中山王

710

全上

芳札令披見り、弥平安之由珍重之事り、我等無吳事り間  
可易心り、將又紙縮緬五卷贈給之、懇篤之至存り、恐惶  
不宣、

〔(采) 明和七年〕 八月十三日 薩摩守 重豪御判

中山王 回章

711

全上  
正文在文庫

寫

家譜編集之儀、專記事を詳に致事り得者、人物言行之類  
者自略し來り、口碑迄にて實錄不相傳も有之り故、祖先  
之遺風餘德漸くと者可及湮没と甚以遺恨り、依之去年在  
國之節、郡山次郎左衛門(記録奉行、通志)に別立る撰集申付趣有之り、右  
之体製者記事者大要を採りて小節を略し、代々之爲人又  
者言論行事等之實を拾ひ、華を抜て可相記り、其集輯方  
二付る者或は是を家譜に採り、或は是を舊記故老之説に  
も參へ精く擇ひ、詳に考へ候上可相載り、此旨何れも相  
心得撰集往々無間斷様可致り、尤家譜之儀者只今まで有  
來り通是又可致編集候、

右之通記録方之者共は具可申渡り、

〔(采) 明和七年〕 八月

家老中江

712

全上

正文在文庫

寫

御記録奉行に

御家譜編集之儀付、別紙之通於江戸被 仰出外條、奉承  
知外様可申渡外、

(采) 「明和七年」 十月 主馬

右二通ノ包紙ニ左ノ如シ、白木御文書五番箱ニアリ

朱ニテ五十

御家譜編集之儀付、於江戸被仰出外横切御書付志通

右ニ付主馬殿御添書志通

右明和七年寅十月五日大野多宮御取次を以當座へ被渡置

外事、

713 (重) 大信公二女

敬姫 奥平大膳太夫昌男縁女

(宇都宮領主)

明和七年庚寅八月廿一日告 幕府為生于江戸、母甘露寺前

大納言矩長卿女 安永四年乙未十月廿六日卒、實母市田喜内貞行

女 名於登世、安永五年八月廿二日以茂姫君許嫁故賜千六百石、令称御内証様、  
天明三年五月令葬御前様、寛政元年八月六日令称御部屋様、享和元年辛酉十

月晦日卒于高輪邸、葬大圓寺、法名慈、  
光院殿仏心惠証大姉、安牌于浄光明寺

○八年辛卯十一月十八日謁福ヶ迫、

○九年壬辰二月十三日首途、二十一日發府城、五月十七

日至芝邸、六月 公夫人 甘露 寺氏 爲養女、故敬姫、

○安永五年丙申十一月二十七日許嫁奥平九八郎昌男大膳、  
大夫

天明六年丙午八月奥平昌男卒、未及結納以報官、  
八年戊申四月二十日卒于芝邸、年十九、葬大圓寺、法  
名淨信院殿本因即妙大姉 十月十二日掃埋遺毛于福昌寺、安、  
主於惠燈院耐銀二十枚供吊祭事

714 重豪公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右京大夫  
可述外也、

(采) 「明和七年」 九月七日



薩摩 中將殿

715 全上

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外  
之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(采) 「明和七年」 九月七日 阿部豊後守 正允判

松平薩摩守殿

716 重豪公御譜中



正文在福昌寺

天降百福崇成梵刹惟非英哲之人誰創遠大之基恩廟威德  
輝騰今昔石屋無上妙智照曹溪真如月不因西來老宿爭振  
祖翁法暉照山妙谷禪寺寂明和尚碩德明著金粟親承敦厚  
沈靜操履清淨全機大用博辨宏才入語言之三昧爲遊戲之  
神通踞乎幽邃端勁體格凜然鉗錘妙密晨昏鐘鼓分明一條  
榔栗定龍蛇金毛獅子伏爪牙不逢大匠焉悉玄微宜稱名藍  
寶器延陞狢座允開法會紹繼師祖高蹤吹起玉龍傳燈法運  
復古佛日回光猶依舊範能須興隆仰祝  
皇祚安寧幸祈邦國鞏固故疏

明和七拾庚寅十月十五日

中將重豪

717

重豪公御譜中

扣正文在江戸家老座

公方様より御鷹之鷹松平薩摩守妻に拜領被 仰付、難有  
奉存り、薩摩守痰氣有之り付、名代私を以御禮申上り、  
以上、

〔宋〕「明和七年」

十月十五日

鳴津〔久岐〕式部

〔宋〕一右者今日 仰御文を以御鷹之鷹

御前様に初る御拜領に付、御用番様并 西丸御老中様

に御廻勤之筈に得共、御痰氣被遊御座に付、右通式部  
殿に御名代被成御頼り、左りの式部殿に老前廣御家老  
中より以手紙御頼之儀申込置、當日朝猶又御案内手紙  
こゝ申越、御拜領被遊りの直に右御口上書表方御使者  
を以被進り、左りの右御使者直に式部殿御勤相濟り首  
尾を及申出、達 貴聞外事

718

重豪公御譜中

正文在文庫

重陽之

御内書可相渡り間、明日五半時

御城に家來可被差出り、以上、

〔宋〕「明和七年」

十月廿二日

松平右京大夫

松平薩摩守殿

719

重豪公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之り、遂披露り處一段之御  
仕合り、恐く謹言、

〔采〕明和七年 十二月二日 輝高判

松平右京大夫 輝高

720 全上

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕明和七年 十二月二日 正允判

阿部豊後守 正允

721 重豪公御譜中

寫正文在右筆所

私領内儀者、長崎最寄之内別ゝ吳國口ニ有、別紙之通餘

國より者格別之手當共有之、誠ニ國役同意ニ相成、内々ニ相勸外様ニ仕來ニ御座外、然處ニ長崎ハ自然非常之儀有之、

公義御下知を以人數等差向申外儀有之節、一向長崎表不

如、御取次宮川小仲太にて御請取被置候儀、實十二月十九日夜持參一案内之者共故、差向イ外迄ニ御用ニ相立不申外得者、

不用之儀ニ可相成奉存外、別紙之通手當仕外上者、非常之節場所之様子及相心得罷在、萬一之節者差向ケ申外者共、懸引之都合を及平日工夫及仕置外ハ、御用心向之御手當ニも可相成哉と、乍憚奉存外、依之私儀年々參勤交代之節長崎ハ罷越、場所之様子見置申外ハ、家來共及段々ニ長崎之勝手を相心得可申儀ニ奉存外、何卒年々長崎ハ立寄申外儀被仰付被下外様仕度奉願外、若年々難相成御座外ハ、壹度成共見置外様仕度偏奉頼外、數代餘國ニ無之手當之儀、表立不申國役之趣意ニ相成動來申外儀残念ニ及奉存外、然共其所ニ申上外筋ニ者無御座外、早竟御用心向之御奉公ニ及可相成様奉存外ニ付、何分願之通被 仰付被下外様心願仕外儀ニ御座外、相願外及可然可有御座外哉、御差圖被下外様御内意相伺申外、以上、

〔采〕明和七年 十二月 松平薩摩守

722 全上

寫正文在右筆所

私領内之地者吳國口ニ有之、東南西之三方數十里之間

大洋海を請、且嶋々相抱罷在<sup>レ</sup>之故、毎年程唐船致漂着長崎に差送<sup>レ</sup>外、此以前白帆之船表領内之沖に相見得、御届爲申上事<sup>ニ</sup>外、且又先年領内屋久嶋又老鶴島(能毛郡)に吳國人卸し置<sup>レ</sup>を見當、長崎に差送<sup>レ</sup>儀共有之、平日油

斷不能成<sup>レ</sup>外、吳國口之事<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>者、吳國方を堅固相守<sup>レ</sup>儀前々より專要之御奉公<sup>ニ</sup>存、津々浦々嶋々之内、海上見得渡<sup>レ</sup>程之所に<sup>レ</sup>者不殘番所を立置、每番所城下より三四人ツ、士を遣、勤番交代申付不斷爲相守、尤右番人外<sup>ニ</sup>者士多人數所々には差越置、吳國方係之役段々申付置<sup>レ</sup>、

一城下に唐船方・吳國方一篇ニ承候役所を立置、家老之内壹人、用人貳人差分置、其外長崎間役・唐船引受之役人、且又警固勤之者、醫師・足輕・通事等<sup>ニ</sup>至、大分之人數を係ケ置、領内所々より吳船漂來之注進申來<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>者、右係ケ置<sup>レ</sup>者共之内より見合、漂着場は駈付早速取計、江戸・長崎に之御届等滞無之様兼<sup>レ</sup>申付置<sup>レ</sup>、

一唐人に致通達<sup>レ</sup>通事之者餘多不罷居<sup>レ</sup>外<sup>者</sup>、領内所々には唐船數艘一度ニ漂着之節通弁相滞、急事之支<sup>ニ</sup>成<sup>レ</sup>外故、兼<sup>レ</sup>數十人仕立置、其内兩三人ツ、<sup>者</sup>爲修練長崎

に<sup>者</sup>遣置<sup>レ</sup>外、右通事共城下に計召置<sup>レ</sup>外<sup>者</sup>遠方之浦々嶋々には唐船漂着之節早速之間逢不申<sup>レ</sup>外故、兼<sup>レ</sup>其所には致扶助召置申事<sup>レ</sup>、

一惡意之唐船相見得<sup>レ</sup>節爲追拂、家老其外役々惣人數三百五十人一組ツ、應唐船數幾與<sup>者</sup>繰出シ<sup>レ</sup>様平日手當申付、關船・小早船其外大小船之手當無滞様申付置<sup>レ</sup>、其手配いたし<sup>レ</sup>心得之者共<sup>者</sup>平日右役所に係ケ置<sup>レ</sup>、

一領内甕嶋之儀<sup>者</sup>長崎に往來之唐船・阿蘭陀船針筋之場所<sup>ニ</sup>御座<sup>レ</sup>外故、唐船無間<sup>者</sup>致漂着<sup>レ</sup>外、彼嶋々城下<sup>ニ</sup>遠く相隔<sup>レ</sup>り、長崎に<sup>者</sup>却<sup>レ</sup>る順路之場所<sup>ニ</sup>あり<sup>レ</sup>外故、兼<sup>レ</sup>番頭格之者遣置、城下之士段々付置、外<sup>ニ</sup>者士多人數在嶋申付置<sup>レ</sup>外、嶋々渡海荒波<sup>ニ</sup>あり急事之節、船々差渡<sup>レ</sup>儀容易<sup>ニ</sup>不罷成<sup>レ</sup>外故、長崎に唐船送届用之關船・小早船等取仕立、平日彼嶋に備置<sup>レ</sup>外、唐船漂着之節<sup>者</sup>嶋中<sup>ニ</sup>あり取計、無子細唐船<sup>者</sup>番頭格之者より直<sup>ニ</sup>長崎に送越<sup>レ</sup>様致來<sup>レ</sup>、

一長崎に自然非常之風聞共有之、公義御下知を守、國元より人數差越<sup>レ</sup>節之用心<sup>ニ</sup>、長崎之内に此方屋鋪之外<sup>ニ</sup>三ヶ所程人數差置<sup>レ</sup>外地面兼<sup>レ</sup>

爲致借地置<sub>レ</sub>、

右之外、國元ニ<sub>レ</sub>相糺<sub>レ</sub>ハ、品々此餘之儀表可有御座<sub>レ</sub>得共、遠國之儀故難仕、先荒増爰元帳面之内ニ

有之分書面之趣ニ御座<sub>レ</sub>、以上、

〔采〕  
「明和七年」 十二月

右ノ二通ニ相添紙<sub>ノ</sub>如<sub>レ</sub>

寅十二月十九日松平右近將監様江御内意被 仰達<sub>レ</sub>二通之内  
トアリ

右ノ二通ニ相添紙<sub>ノ</sub>采書

〔采〕  
「別紙貳通寅十二月十九日松平右近將監様へ被得御内意<sub>レ</sub>處、御願書御手輕被相認<sub>レ</sub>様御差圖有之、此御願書之通、翌卯正月十三日御用番右近將監様江御留守居佐久間新左衛門を以被差出、同十五日御留守居被召呼<sub>レ</sub>付、中村與太夫罷出<sub>レ</sub>處、朱書之通御付札を以、御願書御渡被成<sub>レ</sub>」

右二通ニ相添紙<sub>ノ</sub>名ニテ左之通

723  
私領所之儀、長崎引合之事共多、其上若長崎表違變之儀御座<sub>レ</sub>節考、人數差出<sub>レ</sub>筋ニ付、常々手當之人數除置、何時ニ<sub>レ</sub>表不移時刻御差圖次第差出申<sub>レ</sub>儀ニ御座<sub>レ</sub>、然處私始家來共長崎表之様子相心得<sub>レ</sub>者無御座<sub>レ</sub>ニ付、伺卒當年御暇被下國元江罷越<sub>レ</sub>節、長崎表江立寄見分仕度奉

存<sub>レ</sub>、

〔采〕御付札 可爲願之通候  
可相成儀御座<sub>レ</sub>ハ、此段相濟<sub>レ</sub>様偏奉願<sub>レ</sub>、以上、

正月十三日

御名

右御書付之紙<sub>ノ</sub>紙<sub>ノ</sub>如<sub>レ</sub>

〔采〕  
「別紙二通被得御内意<sub>レ</sub>處、御願書御手輕被相認<sub>レ</sub>様御差圖有之、此御願書御用番松平右近將監様江卯正月十三日御留守居佐久間新左衛門を以被差出、同十五日御留守居被召呼<sub>レ</sub>付、中村與太夫罷出<sub>レ</sub>處、朱書之通御付札を以御願書御渡被成<sub>レ</sub>」

右ニ相添紙<sub>ノ</sub>采書

724  
今度長崎江御立寄御見分之儀御願付、別紙二通松平右近將監様江被得御内意<sub>レ</sub>處、思召寄有之、御手輕キ御願書被差出<sub>レ</sub>様御差圖之上、表向別紙之通御用番御同人様江被差出、御願之通被仰渡<sub>レ</sub>、依之御記錄所江可記置之旨被仰出<sub>レ</sub>間、從年紛敷無之様可記置<sub>レ</sub>、

五月

左京

725  
重豪公御譜中

同年冬十二月十九日以ニ 上使建部荒次郎廣般一貳ニ責鷹所<sub>レ</sub>搏之鶴一隻ニ、重豪時有ニ微恙ニ、故島津式部久般代奉ニ 恩旨ニ遂往ニ老中之邸ニ拜謝焉、

726

重豪公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右近將監

可述也、

〔宋〕  
「明和七年」  
十二月廿七日



薩摩

中將殿

727

全上

爲歳暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之、遂披露之  
之處一段之御仕合、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和七年」  
十二月廿七日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

728

重豪公御譜中

正文在文庫

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露之處一段之御  
仕合、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和八年」  
正月七日

武元判

729

全上

爲若菜之御祝儀、鯛一折被獻之、遂披露之處一段之御  
仕合、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和八年」  
正月七日  
正允判

〔宋〕在口裏

松平薩摩守殿

阿部豊後守

正允

730

重豪公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勤農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

明和八年正月十一日 重豪御判

五十一  
此御吉書卯二月十五日主馬殿より本田文蔵江御渡、白木  
御文書五番箱ニ納置云々アリ

〔宋〕在口裏  
松平右近將監  
武元

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「明和八年」 正月十一日 武元判

〔朱〕在口裏 松平右近將監 武元

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕「明和八年」 正月十一日 正允判

〔朱〕在口裏 阿部豊後守 正允

扣正文在文庫

私領所之儀長崎引合之事共多、其上若長崎表違變之儀御座外節者人數差出外筋ニ付、常々手當之人數除置、何時

二面及不移時刻御差圖次第差出申外儀ニ御座外、然處私始家來共、長崎表之様子相心得外者無御座外付、何卒當年御暇被下國元江罷越外節、長崎表江立寄見分仕度奉存

外、可相成儀御座外ハ、此段相濟外様偏奉願外、  
〔朱〕御付札 可爲解之通候

〔朱〕「明和八年」 正月十三日 松平薩摩守

〔朱〕一右者寅十二月十九日松平右近將監様江御伺書貳通被差出、被得御内意外處、御願書御手輕被相認外様御差圖有之、此御願書之通則日御用番右近將監様江御留守居佐久間新左衛門を以被差出、同十五日御留守居被召呼外付、中村與大夫罷出外處、朱書之通御附札を以御願書御渡被成外

今度長崎江御立寄御見分之儀御願付別紙貳通、松平右近將監様江被得御内意外處、思召寄有之、御手輕御願書迄被差出外様御差圖之上、表向別紙之通御用番御同人様江被差出、御願之通被仰渡外、依之御記錄所江可記置之旨被 仰出外間、後年紛敷無之様可記置外、

〔朱〕「明和八年」 五月 左京

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

一筆令啓達<sup>レ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、奉恐悦<sup>レ</sup>、然者拙者儀當年御暇被下<sup>レ</sup>者、歸國之節其表<sup>レ</sup>立寄、致見分度旨相願候趣有之候處、願之通被仰渡、難有奉存候、此段爲可申達如斯御座<sup>レ</sup>、恐惶、

〔宋〕  
「明和八年」正月十八日

〔長崎奉行、信改〕  
△夏目和泉守様

人々御中

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

先達<sup>レ</sup>願之通私儀長崎<sup>レ</sup>罷越<sup>レ</sup>節、奉行屋鋪<sup>レ</sup>相越、可<sup>レ</sup>奉伺御機嫌<sup>レ</sup>、且又阿蘭陀屋敷・唐人屋鋪見置申候儀、長崎奉行申談<sup>レ</sup>様仕度<sup>レ</sup>、此段相伺<sup>レ</sup>、以上、

〔宋〕  
「明和八年」二月十五日

〔島津重豪〕  
御名

重豪公御譜中

正文在文庫

歲暮之 御内書可相渡<sup>レ</sup>間、明日五半時

御城<sup>レ</sup>家來可被差出<sup>レ</sup>、以上、

〔宋〕  
「明和八年」二月廿日 松平右近將監

松平薩摩守殿

全上

扣正文在右筆所

一筆令啓達<sup>レ</sup>、

公方様 大納言様益御勇健被成御座、奉恐悦<sup>レ</sup>、然者先達<sup>レ</sup>申達候通、拙者儀當年御暇被下<sup>レ</sup>者、歸國之節其表<sup>レ</sup>立寄致見分<sup>レ</sup>儀、依願被成御免<sup>レ</sup>付、於其元奉伺御機嫌、且又阿蘭陀屋鋪・唐人屋敷見置申度段相伺<sup>レ</sup>處、御手前方申談<sup>レ</sup>様可致旨被仰渡<sup>レ</sup>、此段爲可申達、如此御座<sup>レ</sup>、恐惶、

〔宋〕  
「明和八年」二月廿一日

〔夏目和泉守様〕  
人々御中

〔宋〕  
「近秘野卿」

明和八年辛卯二月二十五日、島津采女爲若御年寄、新納

次郎四郎久儔爲大御目附賜稱內藏、四月十六日 大家使  
松平周防守齋物件來賜 公於邸令還之國、西丸亦使阿

部豐後守賜物如例、十九日造朝拜恩 大家懇諭賜馬如例  
公服、二十一日閩老承旨使人牽馬來授之於邸、公迎玄關

拜而敬對、二十六日定服章制、凡諸公子惟限世子用十字  
章、至如翁主宜亦用之、其他公子宜皆用桐若牡丹、二十

七日國老樺山左京爲 公首途于邸 命也、初 公嘗聞  
家治公善畫欲得眞筆而爲寶久矣、

家治公聞之、乃寫二幅以傳一橋、於是二十九日民部卿使  
田沼能登守齋來賜 公於邸、 公乃迎拜諸御座間、又趨

一橋謝恩 一觀此時使考女松島舟得一橋以致賜 公、而其一本  
公親、其一傳政圖云、但爲六月十五日事疑月日誤也、五月三日遍  
訪閣老謝賜畫且訪三家告別也、二十八日發芝邸、六月十

五日至伏見邸、二十一日抵大坂邸、是月八日信解君卒于  
西田館、至是二十二日訃告達邸、乃遣中村早太先往進香、

二十七日發自大坂、七月朔日至坂越、乃駕御船海行如登、  
八日至于大里、此行途如長崎、十六日抵長崎邸、十七日

擢今村政十郎爲無役中通、十八日訪奉行所候 大家起居  
也 公服披斗緒御帷子麻  
也御上下隨以本御道具、十九日臨林市兵衛宅觀御陣所也、此日

召見市人、二十日過福濟寺及聖王寺 竝四本御道具、  
但御羽織繪也、二十一日  
臨鉦鹿太左衛門宅觀前栽、又臨福田十郎右衛門宅、二十

二日臨唐人館、二十四日謁于聖堂、臨向井齋宮宅 聖堂、又  
預也、又

過興福寺及宗福寺、二十五日觀出島館、駕小鷹丸自行由  
丸舟 御舟 乘紅毛舩、少間觀焉、二十七日臨平野善次右衛門茶

亭 亦四本、  
御道具、二十八日臨今村源右衛門茶亭 同、紅毛人趨召焉、  
八月九日駕舩於大波戶出帆長崎 居之凡、  
廿八日、十四日着于大島 阿

根、十五日抵阿久根復狩大島、十八日至府、乃使末川織  
衛久中如江戶謝恩、二十一日山岡齋宮久容爲御家老、九

月二十一日免家柱織部久、職、(老脱力) 因有疾也、尚賜命曰、齡  
未老憊疾癒復焉、十月十日謁 (吉、  
也) 淨國公主於松峯山 服長、  
上下、二

十五年諱辰也、十三日臨于尾畔、十五日還、十一月先是  
御近習役並敍御使番下、至是進格置御近習役次席、給職  
祿九十石命、

740 重蒙公御譜中

寫正文在文庫

寫

百姓共大勢子共有之外得者、出生之子產所ニ直ニ殺外  
國柄有之段相聞得、不仁之至外、以來右牀之儀無之樣

二從

公儀被 仰渡置外、子共出生者御國中繁榮之儀、鄉村之



餘勢ニ相成事<sub>レ</sub>、御領國中右躰之儀<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之間鋪<sub>レ</sub>得共、萬一心得違<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>者甚以不仁之至<sub>レ</sub>條、右仰渡之趣<sub>レ</sub>屹可相守<sub>レ</sub>、右之通 思召を以難有被仰渡<sub>レ</sub>ニ付<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>者、至末<sub>ニ</sub>取違之儀<sub>ニ</sub>會<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>無之筈<sub>レ</sub>得共、自然出生之子<sub>ニ</sub>を蜜<sub>ニ</sub>流産又<sub>レ</sub>者血荒等之筋<sub>ニ</sub>取計<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>者有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>ハ、糺方之上屹其咎可被仰付<sub>レ</sub>條、此旨表方<sub>ニ</sub>致通達、御側方・御勝手方<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>者寫を以可相達候、

〔案〕  
「明和八年」二月

〔卷〕「雜抄」二月廿九日トアリ

〔主人久徳〕  
主馬  
〔小松清彦〕  
帶刀

重豪公御譜中

上包ニ卯八月廿二日帶刀殿より兒玉主左衛門へ御渡被成、白木御文書五番箱ニ納置有之、五十四ノ上トアリ

正文在文庫

靈社神文前書之事

一去歲今歸仁王子跡役私<sub>ニ</sub>被仰付、誠以外聞實儀難有仕合奉存候事、

一不新儀御座候得共、奉對

重豪様毛頭不挾逆意、專勵忠義可申事、

一對國王疎略之志有御座間敷候、并國中附嶋<sub>ニ</sub>至迄、政道正様可申附候、以邪愆國法猥成仕置會以仕間敷事、

一自然惡逆之者有之、國中一味仕候共、至私<sub>ニ</sub>同意不仕、

則可致披露事、

一於私身上被 聞召上儀御座候者、速被逐御穿鑿明鏡被仰付可被下儀偏奉願存候、少表相掠申儀殘念奉存候故申上置候事、

右條<sub>ニ</sub>僞於申上者、

罰文略之

明和八年辛卯四月六日

讀谷山王子

朝恒判

重豪公御譜中

明和八年辛卯夏四月十日、修道佛公五百年忌法事於淨

光明寺一日、即使<sub>下</sub>組頭島津直衛久中<sub>ニ</sub>進納香燭銀五枚

代拜<sub>上</sub>焉、

○同年四月十六日 上使松平周防守康福來<sub>ニ</sub>芝邸<sub>ニ</sub>賜<sub>レ</sub>歸

國之暇、恩賚如<sub>ニ</sub>先規<sub>ニ</sub>、同日 大納言家基公亦以<sub>ニ</sub>阿部豐後守正允<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>恩旨<sub>ニ</sub>、從<sub>ニ</sub>先蹤<sub>ニ</sub>饗待焉、畢如<sub>レ</sub>老中各第<sub>ニ</sub>禮<sub>ニ</sub>謝<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>、同十九日登<sub>レ</sub>營於<sub>ニ</sub>黒書院<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>家治公<sub>ニ</sub>、拜<sub>下</sub>賜<sub>ニ</sub>休暇<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>辱<sub>上</sub>、時蒙<sub>ニ</sub>懇厚<sub>ニ</sub>之 命<sub>ニ</sub>賜<sub>レ</sub>駿

馬一匹<sub>ニ</sub>拜<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>而退、登<sub>ニ</sub>西營<sub>ニ</sub>亦拜<sub>ニ</sub>其賜<sub>ニ</sub>、既而往<sub>ニ</sub>老中之各第<sub>ニ</sub>禮<sub>ニ</sub>謝<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>、是日在府家老島津仲久健獻<sub>ニ</sub>御太

刀・馬代・卷物<sub>ニ</sub>二拜<sub>ニ</sub>調

台顔一、乃登二 西營二亦捧三品物一奉謝拜謁之恩矣、而后  
重豪以レ有レ故、告下緩三歸期一 大家上、

743

重豪公御譜中

正文在文庫

明日五半時登

城、御暇之御禮可被申上外、以上、

〔采〕

「明和八年」

四月十八日

板倉佐渡守

松平周防守

松平右京大夫

松平右近將監

松平薩摩守殿

744

全上

家來一人 御目見被 仰付外間、召連可被罷出外、

〔采〕

「明和八年」

745

全上

御馬鹿毛  
八歳

一疋

〔采〕

「明和八年」

746

重豪公御譜中

正文在文庫

寫

御記録奉行に

〔采目付〕

二階堂 郁

右先達の家格寄合被 仰付、庶流二階堂源太夫儀者

御先代譯有之、連名頭ニ外處、庶流之格式宜例表有之外

得共、同様ニ上座ニ被仰付置候儀者、嫡庶之分不相立、

專實儀を取失、如何被 思召上候付、右通ニ者難被 仰

付置外、依之部家連名仁禮仲右衛門次右源太夫上ニ被

仰付候、早竟背道理外意味合難被捨置外條、此旨心得違

無之様可奉承知候、

右可申渡外、

〔采〕

「明和八年」

四月

〔書入久徳〕

主馬

右包紙ニ五十三番

白木御文書五番箱ニアリ、明和八年卯四月十五日主馬殿より

写被相渡云々アリ

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

私儀今度御暇被下置、國元ハ罷越リ、未男子無御座ハ付、  
在國中若不慮之儀、御座ハ老、國元ハ差置ハ私大叔父、  
實叔父之續御座ハ嶋津李久老、當年四拾歳罷成ハ此者ハ相續  
被 仰付、跡職無相違被下置ハ様奉願候、以上、

(朱)  
「明和八年」

四月廿五日

御名御書判

松平右近將監殿

松平右京大夫殿

松平周防守殿

板倉佐渡守殿

重豪公御譜中

同年四月二十八日

家治公賜ニ 御自畫ニ幅大於德川治濟卿一橋第、老女

傳説

於德川治濟卿一橋第、老女

松島傳ニ治濟卿ニ曰、宣ニ傳ニ達ニ之于重豪ニ也、明日治濟卿

使ニ田沼能登守意誠ニ傳ニ旨、見ニ贈ニ之芝第、由ハ是同五月

二十一日招ニ親戚知已ニ開ニ慶筵ニ以ニ饗ニ焉、

家治公御筆

一 御畫二幅對左者太公望  
右者傳説

但 御表具無之、

右明和八年卯四月廿八日、一橋御屋敷迄御老女松嶋様  
御持下り

太守様ハ御拜領ニ付

民部卿様より御取傳ハ様との御事ニ有、同廿九日一橋  
より田沼能登守殿を以

太守様ハ被進、御頂戴被遊リ、依之則日爲御禮民部卿  
様御方ハ御見廻被遊リ、松平右近將監様・田沼主殿頭  
様ハ老兼ル御心安キ譯を以、御内ニ御留守居御使者を  
以御吹聽被 仰進候、

一同五月三日松平右近將監様・田沼主殿頭様御登 城前  
太守様御見廻被成御逢、御筆之御畫御拜領之御禮御勤

相濟ハ、

但 御見廻之儀老前日被仰込置ハ間、御見廻被遊候、

一 右御拜領ニ付、御内證御勤之儀被相伺ハ處、御勤不及  
旨、御差圖有之ハ、

一 松平陸奥守様御方去々年御内ニより 御筆之御畫御拜  
領有之、表立御披御祝爲有之由候付、

寫正文在文庫

此御方様ニ表五月廿一日御祝有之筈被仰渡候、

一御筆之御畫御拜領御披御祝ニ付、御次第書左之通、

一被仰入り御客様方ニ以御使者被仰遣り儀共先例之通

一御門前立番并物頭張番其外之儀、御家督初る御鷹之

鳥御拜領御披御祝之節之通、

一御正客様并四品以上之御方様御出之刻限、前以見星

所ニ付置、御出之節御家老其外御留守居以上之御

役ニ御玄喚繰石迄罷出、

一御正客様并四品以上之御方様御出之節

太守様表御書院角之間邊ニ御出迎、

一右同斷御取持之御方御玄喚迄御出迎、

一御正客様并四品以上之御方様御腰物、請取御小姓壹

人ツ、御玄喚薄へりに罷居御跡附參、御腰物御渡被

成り節、御刀懸ニ掛、外之御客様方御腰物表御書院

三之間ニ御小姓詰居、御腰物請取、札相付御刀掛ニ

懸、

一太守様御支度麻御上下、

一御家老其外諸御役人・小番人・大番人支度麻上下、

十徳着用之面々者十徳、

一御拜領 御筆之御畫、御祝當日御座之間御床ニ可被

懸置り、

但 御同朋頭請込、

一兼る御座之間ニ御着座之御方様ニ御勝手之間、御勝

手之間ニ御着座之御方様ニ表御書院ニ御着座可有之

り、右之譯ニ御向々ニ御坊主與頭より申上り様御留

守居より可相達候、

一御客様方御着座、

一大御書院ニ御着座之御方様ニ、

太守様より御挨拶有之、御一同ニ御座之間ニ御案内、

御畫御拜見可有之り、

一右相濟、御勝手之間ニ御着座之御方様右同斷、

一右相濟、表御書院ニ御着座之御方様ニ表御側御用人

御案内ニ御拜見可有之候、

一當日入來之御城坊主ニ御側御用人案内ニ御拜見可有

之り、

一御畫都る御拜見相濟可相納り、

但 御同朋頭請込、

一大御書院御勝手之間、表御書院御飾、御家督初る御

鷹之鳥御拜領御披御祝之節之通ニ、御床御掛物ニ

前以不懸置、御着座之御客様方 御畫爲御拜見、御

座之間に御通御跡に可懸置り、

但 御書院役人請込、

一 御熨斗上、

一 御茶上、

一 御たはこ盆上、

一 御本膳上、

一 二御居付御膳迄續り上、二汁七菜

一 御引物 太守様、

但 御兩頬にありハ、御客居之方 太守様、御主居

之方 淡路守殿、

一 御鉢御替盆出、

一 御引盃八寸請御向上、

一 御銚子上、

一 御引肴 淡路守殿、

但 御兩頬にありハ、御客居之方淡路守殿、御主居

之方 太守様、

一 御銚子上、

一 御引盃八寸下、

一 御居付御膳下、

但 此時舞御囃子人數寄置、

一 御吸物二之御膳引替上、

一 白木三方御土器、御正客様を初、四品以上之御方様

に御銘々上、

一 白木三方御肴右同斷上、

一 右之外御人數様に御土器御銘々上、白木三方御肴二

通上、

一 御銚子上、

一 太守様御出、御正客様御土器御取揚之節、舞御囃子

初、

一 太守様より御肴被遣、御土器

太守様に被遣、御肴被遣御返盃、御臺直御取持之御

方、

但 四品以上之御客様方には老御取替同斷、

一 御銘々様に數之御土器にあり御銚子差上、

御挟肴 淡路守殿、

但 御兩頬にありハ、御客居之方淡路守殿、主居之

方式部殿、

一 御納之節、御挟肴迄改、御正客様に差上被召上り節、

太守様より御肴被遣、

太守様に御土器被遣、御肴被遣納、

但 四品以上之御方様は右同斷、

一 御湯上、

一 御本膳下、

一 御茶菓子上、

一 御濃茶御茶菓子引替上、

一 御後菓子御茶碗引替上、

一 御薄茶上、

一 酒井雅樂頭様は於御勝手之間、別立大御書院御同前

之御料理上、

一 御引物 太守様、

一 二篇目御引肴 淡路守殿、

一 御銚子上、

一 御居付御膳下、

一 御吸物二之御膳引替上、

一 白木三方御土器、白木三方御肴上、

但 太守様御取替御正客様御同前、

一 御納之節御挟肴迄改上、

太守様より御肴被遣、

太守様は御土器被遣、御肴迄被遣納、

一 御湯上、

一 御本膳下、

一 御茶菓子上、

一 御濃茶御茶菓子引替上、

一 御後菓子御茶碗引替上、

一 御薄茶上、

一 右之外之御方様は表御書院に大御書院御同前之御

料理上、

一 御引物 御家老、

但 御兩頬に外ハ、御家老兩人、

一 二篇目御引肴 御小姓、

但 右同斷に外ハ、御小姓兩人、

一 三篇目數之御土器、御挟肴、御銚子上、

但 御挟肴御家老、

一 御正客様御立前

太守様御座は 御出御挨拶有之、四品以上之御方様

御立之節、御式臺迄御送、

一 御取持之御方最前之通御玄喚迄御出、

一 御家老其外之御役、最前之通罷出、

一 御客様方御立以後、表御書院二之間に御城坊主は

料理三篇目數之土器肴出、挟肴御留守居、茶菓子・

濃茶・後菓子・薄茶出、

一 御客様方御立以後御用係之御家老に塗三方の御座  
之間中敷居より上に壹枚目の御盃頂戴、御着迄  
被下、

一 右引次御用係之御用人・御近習役・御留守居・御納  
戸奉行・御使番に切足八寸の御座之間末襖付よ  
り横疊込三枚目の御通被下、押御側御用人、  
一 御側表諸御役人謁御家老、御祝首尾能相濟り御祝儀  
可申上候、

右之通諸事御手當如例可申渡り、

五月

仲

一 五月廿一日右御祝有之、御一門様方其外兼り御心安御  
方様御出有之候、御客様左之通、

書院

御次第不同

御断  
松平越前守様

御断  
松平左兵衛督様

御断  
松平壹岐守様

阿部備中守様

黒田甲斐守様

御断  
松平大膳太夫様

御断  
立花左近將監様

御断  
酒井修理太夫様

御断  
松平左兵衛佐様

御断  
本多伊勢守様

御断  
鳥井播磨守様

御断  
酒井播磨様

御断  
田沼能登守様

御断  
京極兵部様

武田長春院様

橘 隆庵様

御断  
小川玄達様

桂川甫三様

桂川甫安様

勝手之間

酒井雅樂頭様

有馬一學様

表書院

鳴津淡路守殿

伊勢平藏殿

鳴津八郎右衛門殿

水谷民次郎様

深見久太夫殿

一 右御祝に付御着一折

(縫殿女、御座)  
眞合院様に表方御使者を以可被進り哉之旨、御使番吟

御断  
本多若狹守様

御断  
柳生能登守様

御断  
青山但馬守様

御断  
末吉善左衛門様

御断  
吉田桃源院様

浅井休伯様

桂川甫筑様

村田長庵様

松前主馬様

鳴津式部殿

山本大膳殿

水谷彌之助様

鳴津八郎兵衛殿

堀本一甫老

味之趣有之、致吟味申出、

一右御祝ニ付、當日表御客様御同前之御料理於 御守殿  
(蘇豐總室、竹姫)  
 淨岸院様に被進、於 御奥

御前様に被進、

但 御料理被進、御守殿に老御側御用人を以被仰

進、御奥に老御年寄を以被仰進、

一右御拜領之儀、御記録方ニ及記置、様ニ事ニ、  
 御家老衆より被相渡、御書付左之通、

寫

御記録奉行に

家治公御筆

御書 左太公望  
右傳説 二幅對

但御表具無之、

右老先月廿八日

民部卿様御方迄御老女松嶋様御持下り、

太守様に御拜領之段

民部卿様より御取傳被成、様ニ事ニ、翌廿九日田沼能登守様を以被進、被遊御頂戴、則日爲御禮民部卿様御方に御見廻、松平右近將監様・田沼主殿

頭様に老兼、御入魂之譯を以、御内々御留守居御使者

ニ御吹聴被仰進、御口上之内御内々之儀候故、御

禮之儀、追、御相對之節可申上旨、民部卿殿被申聞、

趣被相込、左、右、前、後、被仰込置、上、去、三、日、右、御、兩

所様に御對客、御禮被仰上、御勤相濟、右外之御

老中様に老御禮ニ不及候、

一御書御拜領ニ付、御内證より御献上物之儀 民部卿様

御方に御内談之趣有之、御老女松嶋様より御献上

物可被成旨、彼御方迄御差圖有之、去、廿、一、日、御、一、門

様方并御心安御方様被仰入、御書御拜領之御祝有之

、右、當、日、御、本、丸、に、女、御、使、被、差、上、御、檜、重、一、組、

鯛一折

公方様に御献上被遊、

大納言様 御臺様

萬壽姫君様に及御禮被仰上、

右之通、御記録ニ記置、御儀、其、通、可、致、首、尾、旨、可

申渡候、

〔(宋)明和八年〕五月

〔(島津)久徳 仲



751 重豪公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲板倉佐渡守可述外也、

〔采〕 一明和八年〕 五月二日



薩摩 中將殿

752 全上

爲端午之御祝儀、以使者御帷子單物被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕 一明和八年〕 五月二日

松平薩摩守殿

阿部豊後守 正允判

753 白木御文書五番箱五十四中

吉貴公以來 御代々様御家譜編集濟寄外付、御系圖御系り方之儀申出外、書付并龜御系圖兩通備 御覽外處、御家例之通天倫之筋ニ被記置、御家督之圈被掛置候儀、都る申出之通可被仰付旨被 仰出外條、此段奉承知、御國

元同役申込可申越外、

五月

仲

右包紙ニ五十四ノ下、吉貴公イ來云々、本田新左衛門より申出趣有之、御家例之通云々アリ

754 重豪公御譜中

是年明和八年辛卯夏四月二十八日

桃園院第一皇子即位、奉稱ニ

今上皇帝御諱英仁、宝曆八年戊寅七月二日降誕、母后一條故関白兼香公女辨恭禮門院、因レ茲遣ニ使義岡左

平太久賢・副使志岐兵藤次親與於京師、同年五月四

日獻ニ上御太刀一腰・御馬代金三十枚于

禁裏御所、御太刀一腰・同二十枚于

仙洞御所、同十枚于

女院御所、同品于

新女院御所ニ奉レ賀レ慶、是豫

大家傳ニ 命諸侯伯ニ使ニ來賀ニ也、使節事畢、同六月二

日發ニ京師、七月九日歸ニ本府ニ而復レ命、

○今茲

今上皇帝即位行賀儀 禁内、因レ是五月七日群侯朝ニ

大家ニ賀レ之、重豪既 命レ之國、故遣ニ使留守月直老中

松平右近將監武元・西丸老中阿部豐後守正允、老中格側用人田沼主殿頭意次郎一賀焉、而后同十五日獻二種

一荷於

大家、一種一荷於

儲后一奉賀慶矣、

全上

扣正文在右筆所

私儀國元之御暇被下置候、疾發足可仕之處、故障之儀有之候付、暫致延引當月末發足可仕、此段御届申上、以上、

〔采〕  
「明和八年」

五月十二日

御名

756

重豪公御譜中

正文在文庫

今度就

御即位爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合、恐、謹言、

〔采〕  
「明和八年」

五月十五日

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

757 今度就

御即位爲御祝儀、以使者目錄之通被獻之外、遂披露外處一段之御仕合、恐、謹言、

〔采〕  
「明和八年」

五月十五日

阿部豐後守

正允判

松平薩摩守殿

758

重豪公御譜中

扣正文在右筆所

先達の相願外通、今度歸國之節長崎立寄見分相濟、彼地罷在外段、以飛札可申上外哉、此段奉伺候、以上、

〔采〕  
「明和八年」

五月廿一日

御名

759

全御譜中

重豪今年既賜歸國之暇、於是五月二十八日、發東都芝郎還國也、家老樺山左京久智、大目附格赤松造酒則正・二階堂蒲行且、側用人關山軍兵衛金郷・島津登久連、近習役村上桂馬範村等從焉、路歷東海之驛、六月十

五日著伏見假館、二十一日早且出伏見、御船從流其夜著大坂假館、二十七日發大坂、歷播州路、七月朔日著坂越、直駕船即日出船坂越、八日著豐前州大里、直上陸翌九日發大里、先召六十人之大備于國、在于大里待重豪之至、乃自此日以鎗二十本・弓二十張・鐵炮二十挺爲隊護道、既而至筑前州山家、自是轉道過肥前州長崎、夫長崎之爲地也中國諸蠻之商船所出入而爲九筑之一都會也、以故九筑之侯伯常相戒、以備其有變也、故重豪發東都之前、既以事請幕府見于前、因今及于此云、既而七月十六日著于長崎之假館、初假館陋隘以不可止宿也、故預命有司新造營之、因就留宿焉、十八日詣奉行所慶

大樹公之尊體步履萬福、乃出而留滯于此者數日矣、其間至中華人・阿蘭人之館內且此地所聞之神祠佛寺勝地等悉寓目焉、而應接之際爲所贈與且慰勞所贈各有差、載在于所司之行人簿中、事煩今略于此、於是八月九日自長崎駕船、隨風著我邦內阿久根、十八日著府城、則日遣番頭末川織衛久救爲謝恩使發魔府、越東都也、久救路歷九州至于豐前小倉、自是駕船至于上之關無風上陸、又自藝州緒方航船著大

坂、直就東海之驛程、九月二十一日著東都芝邸、十月朔日詣二月番執政松平周防守康福之第、告奉使之事且致書讀、又詣西丸執政阿部豐後守正允之第亦如之、則日詣其餘執政及若年寄各第、報使之事亦如初、十一月朔日應召久救登城、致重豪所獻之芭蕉布二十端・三種二荷奉拜調

家治公于白書院、牧野豐前守惟成爲奏者、尋亦獻御太刀一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷爲己之調、井伊兵部少輔直朗爲奏者、畢乃退又登西城獻三種二荷、執政阿部正允出謁久救、御奏者小出伊勢守英常在焉、退亦以御太刀・馬代白銀一枚就英常一致己之進幣、五日應召久救再登城、執政板倉佐渡守勝清出于檜之間、手自捧奉書且賜縮緬二卷於久救、小出英常授之、久救拜謝乃退、則日詣阿部正允之第、正允亦授奉書、既而事畢、十五日久救發東都經東海道、自大坂駕船至于豐前小倉著船、自是陸行數日、明年正月二十日歸本府復命、

760

重豪公御譜中

初大玄公女(初名於五後改稱於榮)嫁松平隱岐守定英(伊予松山城主)生一男而

絶婚、大歸在<sub>二</sub>于本府西田之亭<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>年矣、後剃髮自稱<sub>二</sub>信解院<sub>一</sub>因俗夫死其妻或剃髮、或不剃髮皆稱某院、其意猶云未亡人乃对亡夫之辭、於榮與於夫死者、然剃髮始稱信解院、今茲六月八

日病卒<sub>二</sub>于西田之亭<sub>一</sub>、諡曰<sub>二</sub>信解院殿方廣淨玄大禪尼<sub>一</sub>、越

十二日夜靈柩入<sub>二</sub>於壽國寺<sub>一</sub>、家老喜入主馬久福代焚<sub>レ</sub>香、

十四日夜行<sub>二</sub>葬送之儀<sub>一</sub>、壽國寺現任惠通和尚引導、家老

小松帶刀清香代<sub>レ</sub>余奉<sub>二</sub>持木主<sub>一</sub>、島津木工久峯亦代焚<sub>レ</sub>香

焉、安<sub>二</sub>牌位<sub>一</sub>建<sub>二</sub>石塔<sub>一</sub>初納壽佛於寺、又逆建石塔也、納<sub>二</sub>廩米三石・銀五枚於

寺<sub>一</sub>以助<sub>二</sub>冥福<sub>一</sub>也、

全上

扣正文在家老座

私亡高祖父同氏上總入<sub>レ</sub>道妹<sub>一</sub>(守費)、故松平隱岐守定英妻<sub>二</sub>而致

離縁、私國元<sub>レ</sub>罷在外處、去ル八日病死仕<sub>レ</sub>、忌服無御

座<sub>レ</sub>、此段申上<sub>レ</sub>、以上、

〔卷〕明和八年

六月

御名

例書

六代前薩摩守綱貴妻信證院國元<sub>レ</sub>罷在、寶曆六年子正月

晦日病死仕、忌服無御座<sub>レ</sub>得共御届申上候、

〔卷〕明和八年 六月

〔卷〕此六月トアルハ宝曆六年正月ノ誤カ

全上

扣正文在家老座

寫

覺

一御書付壹通

但 信解院様去月八日御逝去<sub>二</sub>付

一御例書壹通

但 信證院様御逝去之節御届向之儀

松平右近將監様

御取次公用人 佐々木丑藏

右<sub>レ</sub>今朝罷出、公用人佐々木丑藏<sub>レ</sub>取會、淨國院様<sub>一</sub>(守費)

御妹、先月八日被成御逝去<sub>レ</sub>、然共御忌服無御座事<sub>レ</sub>

得共、御届被成方可仕哉、信解院様御事、享保二年

御國元<sub>レ</sub>御越之節、其後伊勢御參宮之儀、從

太守様御願等被仰上、御名元及御上<sub>レ</sub>爲被仰出置御方

候得者、御届可被申上哉、先年 信證院様御逝去之

節御忌服無<sub>レ</sub>得共、一通被及御届<sub>レ</sub>、右御例及御座

外得者、御届向如何可仕哉奉得御差圖<sub>レ</sub>由申<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>處、

御例書持參ハ、入御内見ハ様丑藏より承リ故、御例書相渡ハ得者則可申上由ニ引入、左ハ無程出會ニ承申ハ者、御書付并御例書被成御内見ハ、被及御届方宜御座ハ付、御例書相添御用番様ハ御勝手次第可被差出由、右丑藏を以承知仕ハ、

一 御書付壹通

但書同斷

一 御例書壹通

但書同斷

御用番  
板倉佐渡守様

御取次公用人  
酒井數馬

右ハ今朝右近將監様御方より直ニ罷出、公用人酒井數馬ハ取會、御届向之次第一通申伸、御書付・御例書相渡申ハ處、則可申上由ニ引入、無間表出會ニ承申ハ者、御書付并御例書兩通共ニ被成御請取由、右數馬を以承知仕ハ、

一

松平隱岐守様  
御取次御留守居  
但 久左衛門

右者佐渡守様御方より直ニ差越、久左衛門ハ取會、信解院様御事此間御不快御輕御事ハ處、六月八日御變

症被爲發ハ付、御養生方被盡手ヲ得共其詮無之、同夜五時被成御逝去ハ、御病氣之御様子最初御輕御事之由、御國元より申越ハ得共、御老躰之御事、殊ニ大暑之切ハ得去、別ハ御心遣被思召、御養生方御見廻等御中途ハ御側廻之者被遣ハ得共、御急變ニ御養生不被爲叶段御承知被成、御同前ニ御氣之毒被思召ハ、右爲御知御悔被仰遣由、御口上御相應ニ申伸ハ處、則隱岐守様御返答、右久左衛門を以承知仕ハ者、信解院様御事、此間より御不快被成御座ハ得共、御輕キ御様子被成御承知ハ處、御急變被差發、去月八日被成御逝去之由爲御知承知仕、御同前絶言語御氣之毒御殘念被思召ハ、今日彼御方より御用番様ハ可被成御届由御返答承知仕ハ、

但 御中途より被仰越ハ演說委ク認、久左衛門ハ相渡申ハ、

松平豐丸様  
蓮壽院様  
於鐵様

右御方ニ様ハ從 太守様御悔之御口上御相應、右久左衛門ハ申伸置ハ、

右今朝私相勤首尾申上候、以上、

(宋) 一明和八年」  
七月八日

(留守貞、貞傳)  
有川勇馬  
矢柄様

(留守貞、貞傳)  
有川勇馬

764 重豪公御譜中

本府土木場四郎左衛門貞矩僕善丞者、少喪父獨與母僑居於南林寺傍、賣菓子餽口、母極滋味、母老性急、或怒之、不起意常侍側、爲歌踊嬉戲慰之、其孝養頗有老萊子之遺風、於是今茲夏六月賞之、與麩米拾五箇焉、

765 全上

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、御安全御儀外間可御心易外、随而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・干椎茸一箱・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外、恐々謹言、

(宋) 一明和八年」  
六月十三日

松平周防守  
康福判

766

松平薩摩守殿

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺外、益御安全御儀外間可御心易外、随而琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(宋) 一明和八年」  
六月十三日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

767

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、御安全御儀外間可御心易外、随而目錄之通被獻之外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

(宋) 一明和八年」  
六月十五日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

768

重豪公御譜中

同年夏六月二十日

大家修<sup>二</sup>

<sup>一</sup>徳川吉忠

有徳院殿二十一回忌法事於東叡山<sup>一</sup>、於是二十一日重豪遣<sup>二</sup>番頭兼用人菱刈孫兵衛實祐<sup>一</sup>、獻<sup>二</sup>納香奠銀十枚<sup>一</sup>拜焉、

769

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>外</sup>、田安中納言殿逝去之段被承之、被絶言語

<sup>一</sup>徳川宗武

由得其意<sup>外</sup>、依之

公方様御機嫌被相伺<sup>外</sup>、被爲替御儀無<sup>外</sup>之間可御心易<sup>外</sup>、

紙面之趣各申談及 上聞<sup>外</sup>、恐<sup>々</sup>謹言、

<sup>一</sup>宋  
〔明和八年〕 六月廿五日

松平周防守

康福判

松平薩摩守殿

770

全上

御札令披見<sup>外</sup>、田安中納言殿逝去之段被承之、被絶言語由得其意<sup>外</sup>、依之

公方様御機嫌被相伺<sup>外</sup>、被爲替御儀無<sup>外</sup>之間可御心易<sup>外</sup>、

紙面之趣令承知<sup>外</sup>、恐<sup>々</sup>謹言、

<sup>一</sup>宋  
〔明和八年〕

六月廿九日

松平薩摩守殿

田沼主殿頭

意次判

771

重豪公御譜中

正文在文庫

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻<sup>外</sup>、遂披露候之處一段之御仕合<sup>外</sup>、恐<sup>々</sup>謹言、

<sup>一</sup>宋  
〔明和八年〕 七月六日

板倉佐渡守

勝清判

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平右近將監

武元判

松平薩摩守殿

772

全上

爲生見玉之御祝儀、黄金十兩被獻<sup>外</sup>、遂披露<sup>外</sup>處一段之御仕合<sup>外</sup>、恐<sup>々</sup>謹言、

<sup>一</sup>宋  
〔明和八年〕 七月六日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中  
正文在文庫

御札令披見外、

有徳院様二十一回御忌御法事付ゝ、其方妻女御香奠獻上之儀被相伺外處伺之通相濟、難有由得其意外、紙面趣各一覽之事候、恐々謹言、

(朱) 「明和八年」七月九日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

重豪公御譜中

正文在文庫

今度

有徳院様二十一回御忌御法事御執行付ゝ、以使者御香奠被獻之外、於東叡山奉納之事外、右之趣及言上外、恐々謹言、

(朱) 「明和八年」七月廿日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

776 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様二十一回御忌御法事於東叡山御執行相濟、去月

廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

(朱) 「明和八年」七月廿二日

松平薩摩守殿

板倉佐渡守  
勝清判

774 全上

御札令披見外、

有徳院様二十一回御忌御法事付ゝ、其方妻女御香奠獻上之儀被相伺外處伺之通相濟、難有由得其意外、紙面趣令

承知外、恐々謹言、

(朱) 「明和八年」七月十一日

松平薩摩守殿

田沼主殿頭  
意次判



重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

有徳院様二十一回御忌御法事於東叡山御執行相濟、去月

廿日

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣令承

知外、恐々謹言、

〔朱〕明和八年〕七月廿五日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕明和八年〕八月四日

板倉佐渡守

勝清判

松平周防守

康福判

松平右京大夫

輝高判

松平薩摩守殿

松平右近將監  
武元判

全上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕明和八年〕

八月四日

松平薩摩守殿

阿部豊後守

正允判

重豪公御譜中

同年八月廿日

大樹家治公正妃閑院氏薨

閑院首直仁親王女、廟、  
從二位、號心觀院殿 九月十日末、刻

遷遺骸于東叡山葬之、同二十三日修中陰之梵儀、於

是遣番頭菱刈孫兵衛實祐於上野獻香奠銀五枚、而十

月廿日以心觀院殿遺命竊賜古今和歌集鳥丸光廣一匣、  
脚類筆

老女賜之淨律院、  
主故受而致之矣 余在國拜受之、而后遣女使於城拜

其恩、同日亦賜屏風一雙於淨岸院主、故上書牘

而拜謝之也、

此御遺物云々、明和九年正月主馬殿御進アリ、参照アルヘシ

781 全上

正文在文庫

御干菓子一箱被獻之、遂披露、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
九月二日  
松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

782 全上

御干菓子一箱被獻之、遂披露、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
九月二日  
阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

783 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様御安全被成御座、恐悦旨尤、然者其方儀七月十六日長崎到着、奉行對話、彼表見分、難有由得其意外、去月九日同所出立之旨令承知候、紙面之趣各

一覽之事、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
九月六日  
松平右近將監  
武元判

784 全上

松平薩摩守殿

御札令披見、

公方様 大納言様御安全被成御座、恐悦旨尤、然者其方儀七月十六日長崎到着、奉行對話、彼表見分、難有由得其意外、去月九日同所出立、由紙面之趣令承知、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
九月六日  
阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

785 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様 大納言様御安全被成御座、恐悦旨尤、然者其方儀七月十六日長崎到着、奉行對話、彼表見分、難有由得其意外、去月九日同所出立之旨紙面之趣令承知、恐

々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
九月九日  
田沼主殿頭  
意次判

重豪之令愛名<sub>二</sub>於敬<sub>一</sub>、明和七年庚寅八月二十一日誕生

(朱)  
「明和八年」

右使者を以御獻備被成<sub>レ</sub>様ニ、日限之儀表向御問合  
日ニ御差上可被成<sub>レ</sub>、

心觀院様<sub>江</sub>  
御香奠

白銀 壹枚

寫正文在江戸家老座

九月十一日表御使生駒様より御達之御書付寫

全上

松平薩摩守殿

重豪公御譜中

扣正文在江戸家老座

此度就御法事、薩摩守妻より御香奠獻上之儀如何可仕哉、  
(朱)張紙 来ル廿三日朝六時、上野本坊江以使者御香奠白銀壹枚可有獻上候  
奉伺<sub>レ</sub>、以上、

(朱)  
「明和八年」 九月十五日 松平薩摩守内  
有川勇馬

扣正文在家老座

寫

於國許妾腹出生之女子、來年中爲致出府申<sub>レ</sub>、御聞置可  
被下候、以上、

(朱)  
「明和八年」 九月廿五日 御名

書附 壹通

但於敬様來年中 御出府之御届

松平右近將監様  
公用人  
河鱒七郎左衛門

右江今朝持參仕、奉入御内見<sub>レ</sub>由申仲<sub>レ</sub>處、御先例御  
名内ニ被差出<sub>レ</sub>哉之旨、右七郎左衛門尋申<sub>レ</sub>付、御  
相當之御例ハ無之<sub>レ</sub>得共、御類例ハ有之<sub>レ</sub>、手扣認持  
參仕<sub>レ</sub>、若御尋表御座<sub>レ</sub>ハ、例書被入御覽被<sub>レ</sub>下度奉存  
<sub>レ</sub>、且 於敬様御事至<sub>レ</sub>御幼年被成御座<sub>レ</sub>付、來年御  
出府御時節之儀究<sub>レ</sub>難申上<sub>レ</sub>、其上遠國之儀御座<sub>レ</sub>得  
者、御届申上<sub>レ</sub>上出府之手當等仕<sub>レ</sub>故、此節前以來年

重豪公御譜中

正文在文庫

中と御届申上置り、此儀表御尋御座りハ、被仰上被下  
度由申上置り、委細承知仕上り由ニ、書附并御例書、  
右近將監様御覽之上、御届之文言等思召寄無御座、御  
名内之御類例表有之り得共、近年者何方も御名前ニ  
右式御届向被差出事り間、御名前ニ之御届書御用番  
様ハ被差出御都合可宜由、右七郎左衛門を以承知仕上り、

一御書附 壹通

但書同斷

松平周防守様當月御用番ニ由り得共

御病氣故今日御用番

松平右京大夫様

御取次  
秋池半藏

右ハ持參仕差上り處被成御承知り、御届書御請取被置  
由、右御取次を以承知仕上り、

右今朝私相勤首尾申上り、以上、

十月廿三日

有川勇馬(貞厚)

(島津久健)  
仲様」

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平右京大夫  
可述上り也、

〔宋〕  
「明和八年」  
九月廿七日

家治公  
墨印  
薩摩  
中將殿

全上

御札令披見上り、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之上、益御安全御儀上り間

可御心易上り、隨ち干鱈殘魚一箱被獻上り、各申談遂披露

候之處一段之御仕合上り、恐々謹言、

〔宋〕  
「明和八年」  
九月廿七日  
松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

全上

御札令披見上り、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之上、益御安全御儀上り間

可御心易上り、隨ち御看一種被獻上り、紙面之趣令承知上り、

恐々謹言、

〔采〕  
「明和八年」  
九月廿九日

田沼主殿頭  
意次判

松平薩摩守殿

794  
重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨而干鱈殘魚一箱被獻之外、遂披露外之處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和八年」  
十月朔日

阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

全上

正文在文庫

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外

之處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和八年」  
十月五日

阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

796  
重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

御臺様御不例御養生不被爲叶、被遊 薨去外段被承、被

絶言語由得其意外、依之

公方様御機嫌以使者被相伺之外、被爲替御儀無之外間可

御心易外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和八年」  
十月十日  
松平周防守  
康福判

松平薩摩守殿

797  
全上

御札令披見外、

御臺様御不例御養生不被爲叶、被遊 薨去外段被承之、

被絶言語由得其意外、依之

大納言様御機嫌以使者被相伺之外、被爲替御儀無之外間

可御心易外、紙面趣可及言上外、恐々謹言、

〔采〕  
「明和八年」  
十月十日  
阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

正文在文庫

御札令披見外、

御臺様御不例御養生不被爲叶、被遊 薨去外段被承、被

絶言語由得其意外、依之

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同之外、被爲替御儀

無之外間可御心易外、紙面趣令承知外、恐々謹言、

〔采〕 一明和八年〕 十月十三日

松平薩摩守殿

田沼主殿頭  
意次判

正文在文庫

今度

〔家治室〕 心觀院様御中陰御法事御執行付外、以使者御香燭被獻外、

於東叡山奉納之事外、右之趣及言上候、恐々謹言、

〔采〕 一明和八年〕 十月廿日

松平薩摩守殿

松平周防守  
康福判

正文在新納次郎四郎

加冠

宜爲

明和八郎

十月廿八日



新納万太郎  
次郎四郎

801 全御譜中

加治木家臣國徳公入承 大統後無嗣故、今云加治木家跡市來太次兵衛僕曰三清八、事二

太次兵衛二克竭二其力一、今茲冬十月賞之與二青銅三百匹一

焉、

802 全上

正文在文庫

國許到着御禮之使者末川織衛、明朝日五時 御城江可差出外、且又自分之御禮表可申上外間可存其趣外、以上、

〔采〕 一明和八年〕 十月廿九日

松平周防守  
松平薩摩守殿  
留守居

〔案〕雜抄中

御預<sup>アツク</sup>犬外、大夫・中犬不飼置<sup>ケ</sup>様ことの儀者、前々爲被仰渡置事<sup>ケ</sup>處ニ、比日雜犬多相見得<sup>ケ</sup>付、捕方之儀申渡<sup>ケ</sup>、自然中犬已上之犬在付置<sup>ケ</sup>者も有之<sup>ケ</sup>ハ、早速遠方外城<sup>ニ</sup>可差遣<sup>ケ</sup>、若難捕犬も有之<sup>ケ</sup>ハ、其段御目附方へ可申出<sup>ケ</sup>、

右之通支配中へ不洩<sup>ケ</sup>様可被申渡<sup>ケ</sup>迄可致通達<sup>ケ</sup>、

明和八年卯十月

〔大目付、久備〕  
新納内藏  
取次木場次郎兵衛

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>ケ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>ケ</sup>、將又今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下之、從大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意<sup>ケ</sup>、國許到着付<sup>ケ</sup>爲御禮、以末川織衛如目錄被獻<sup>ケ</sup>之<sup>ケ</sup>、遂披露<sup>ケ</sup>之處御喜色之御事<sup>ケ</sup>、恐々謹言、

〔案〕  
「明和八年」十一月四日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

全上

國許到着御禮之使者末川織衛、明日四時御城<sup>ニ</sup>可差出<sup>ケ</sup>、以上、

〔案〕  
「明和八年」十一月四日

板 佐渡

松平薩摩守殿  
留守居

全上

正文在文庫

末川織衛

右明日九時我等宅<sup>ニ</sup>可差出<sup>ケ</sup>、以上、

〔案〕  
「明和八年」十一月四日 阿 豊後

松平薩摩守殿  
留守居

全上

御札令披見<sup>ケ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>ケ</sup>、將亦今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下、從大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意<sup>ケ</sup>、國許到着

付る爲御禮、以末川織衛琉球芭蕉布二十端并御樽肴被獻

之外、遂披露外處

御前江被召出、入念候段御喜色之御事外、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」十一月五日

板倉佐渡守  
勝清判

松平周防守  
康福判

松平右京大夫  
輝高判

松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

808 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將

亦今度御暇、白銀・巻物頂戴之、其上御馬被下、從

大納言様及拜領物有之、重疊難有由得其意候、國許到着

付る爲御禮、以末川織衛目錄之通被獻之外、紙面之趣令

承知外、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」十一月五日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

809 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨ゝ小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露

外處一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」十一月十三日

板倉佐渡守  
勝清判

松平薩摩守殿

810 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相同之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨ゝ小熬海鼠一箱被獻之外、遂披露外之處

一段之御仕合外、恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」十一月十三日  
阿部豊後守  
正允判

松平薩摩守殿

811

重豪公御譜中

正文在文庫



御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀の間  
可御心易外、随而御肴一種被獻之候、紙面之趣令承知外、  
恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
十一月十五日

松平薩摩守殿

田沼主殿頭  
意次判

812  
全上

正文在薩谷四郎左衛門

加冠

宜爲

明和八卯

十一月十五日



澁谷文次郎  
三四郎

813  
重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能成御座、恐悦旨尤外、將  
亦參勤時分之儀以使者被相伺之外、紙面之趣令承知外、

恐々謹言、

〔朱〕  
「明和八年」  
十一月十八日

松平薩摩守殿

田沼主殿頭  
意次判

814  
全上

扣正文在右筆所

一筆申上まいらせ外、去月廿日

心觀院様御遺物

淨岸院様へ進られれたん承知仕り、私にをひてあり難く  
そんし奉り外、右の御禮申上度外、

萬壽姫君様へも申上外、御序の折から

御前しかるへきやうに御とりなしたのミ入そんしまいら  
せ外、かしく、

〔朱〕  
「明和八年」

まつ嶋さま

高をかさま

たき川さま

清はしさま

うら田さま

るまいらせ外

全上

一筆申上まいらせり、去月廿日

心觀院様御遺物

淨岸院様へ進られりたん承知仕り、私にをひてあり難く

そんし奉りり、右の御禮申上度り、御序の折から

御前しかるへきやうに御とりなしたのミ入そんしまいら

せり、かしく、

〔朱〕  
「明和八年」

岩はしさま

はつ崎さま

るまいらせり

重豪公御諸中

同年十一月十九日徵三家老以下諸役吏於敷舞臺、即令曰、

士黎各可守高下之禮節也、其旨見于左、

寫正文在文庫

御當國之風俗以前より致來と覺外哉、御役人輕重之差別  
薄様有之、餘國之風義相替 御氣毒外、御家老職などハ

隨分相敬、重役よりハ權威にはこり外儀者不可然り得共、

重キ職分之立候程之會釋者可有之儀り、其以下右ニ可應

候、縦者諸奉行之内、一二段上之御役に轉役被仰付りハ

、先同役共早速より其涯を立、諸事慇懃いたし、無

役之諸士者勿論之儀、且御役替被仰付り人ハ則相當可

致事り處、差る其廉無之様相見得り、公義御役人方御

役柄輕重格別之被成向、早竟 上様に對左様ニ社可有之

事り、公義御仕向之通ニ者參間敷候得共、御役格高下

をわから、御役之順を以互庶禮無之様、屹可相嗜り、右

ニ準諸士以下末々迄表身之程を存、士農工商之品明白ニ

有之、於途中末々之者士は行逢り節表、笠頭巾を披、鏝

を表爲持候程之人躰は者猶以相愼罷通候様、支配下諸家

中・寺社家・町人末々迄表頭人主人より屹可申付り、凡

下老事之辨薄筈り間、右之意趣頭立り者得と相心得、叮

嚙ニ可爲致得心候、兼々禮儀惡鋪處方身之つふれとも成

事到來、不便被思召候、年來染込り風俗故、一通り申渡

り分ニる者詮表無之筈り、尤急ニ者不相直儀及可有之候

得共、何分此節被 仰出候趣、以來最通連々改候様遂吟

味可申渡り、御國之風俗他所之見聞等迄及如何ニ候條、

被 仰出之候、

〔朱〕  
「明和八年」 十一月

寫正文在文庫

御領國風俗之儀、段々被仰出候趣御尤至極之御儀、謹お可奉承知候、禮義を相守候者人々肝要之事候處、早竟以前も其分大形相心得候處も自然と麁禮有之、高下之わかち薄方相見得候付、今度 御旨趣具被 仰出御事、誠に難有儀之間、隨分其涯相立候様可相守之候、其外諸士以下末々迄承知可仕之處、被 仰出御事、通年來染込之風俗故、急々不相直管候條、一通り申渡候分も者註及有之間敷候間、諸士者與頭於宅 仰出之趣拜聞仕せ、夫も小與頭申合、小與中も人柄見合を以尚又申合、就中年若成者共は者爲致得心候様可仕御、若不合點成者於有之者、幾度及致教訓、何分此節仰出最通風俗宜成立候儀、諸人可相勵り、末事難辨年少之者も者おのつから親兄弟又者親類共より可申聞事外、支配下諸家中、寺社家人町人末々至、別も端々之者者尚又事之辨薄候付、頭人主人或頭取候者引受、各與中申渡之格に準シ、末々迄及致流通候筋向々も遂吟味、都も致得心候様可取計り、誠に厚キ 思召を以、爲被 仰出御事、聊無忘却、難有被仰出候詮相立、連々風俗好改候様可相嗜之候、

〔宋〕「明和八年」十一月

〔島津久忠〕左中

〔宋〕此右カキ雜抄中ニアリ

右之通被 仰出候條、支配中諸外城私領は可申渡旨、

支配頭は可申渡り、

十一月 主馬

重豪公御譜中

正文在琉球國司

爲年始之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之表贈給之、入念り段令祝着り、猶期後喜之時り、恐惶不宣、

〔宋〕「明和八年」十一月十九日 中將重豪御判

謹上 中山王

全上

芳翰令披見り、去子年大清國は被差渡り進貢使仲里親雲上、北京之勤相仕廻、去歲十二月歸帆之由、紙面之趣相達り、依之此節以仲里、別錄之通被相贈之、入念り段過

〔榊山久徳〕

左京

〔喜入久徳〕

主馬

〔小松清香〕

帶刀

〔山田國徳〕

伊織

〔山岡久徳〕

齋宮

量之至<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

〔(朱)明和八年〕 十一月十九日 中將重豪御判

謹上 中山王

821 全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、我等再緣相整<sub>レ</sub>爲祝儀、波平親方被差渡、殊太刀一腰・馬代白銀百兩并目錄之表被相贈之、入念<sub>レ</sub>儀令祝着<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

〔(朱)明和八年〕 十一月十九日 中將重豪御判

謹上 中山王

822 全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、弥平安之由珍重之事<sub>レ</sub>、我等無吳事<sub>レ</sub>間可心易<sub>レ</sub>、將又縮布五端贈給之、懇篤之至存<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

〔(朱)明和八年〕 十一月十九日 薩摩守 重豪御判

中山王 回章

823 全上

芳札令披見<sub>レ</sub>、從大清賜物之金入龍紋緞子一卷・色緞子一卷被相贈之、入念<sub>レ</sub>段欣然之至存<sub>レ</sub>、恐惶不宣、

〔(朱)明和八年〕 十一月十九日 薩摩守 重豪御判

中山王 回章

824

重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sub>レ</sub>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sub>レ</sub>、將亦參勤時分之儀以使者被相伺之<sub>レ</sub>、及 上聞<sub>レ</sub>處、來年四月中可致參府由被 仰出<sub>レ</sub>條、可被存其趣<sub>レ</sub>、恐々謹言、

〔(朱)明和八年〕 十一月廿一日

板倉佐渡守 勝清判  
松平周防守 康福判  
松平右京大夫 輝高判  
松平右近將監 武元判

松平薩摩守殿

825 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分之儀以使者被相伺外、紙面之趣令承知外、恐々謹言、

〔朱〕「明和八年」

十一月廿二日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

826 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

心觀院様御法事於東叡山御執行相濟外段被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

〔朱〕「明和八年」

十一月廿七日

板倉佐渡守

勝清判

松平薩摩守殿

827 全上

御札令披見外、

大納言様益御機嫌能被成御座、今度於東叡山心觀院様御法事御執行相濟外段被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

〔朱〕「明和八年」

十一月廿七日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿

828 重豪公御譜中

正文在島津圖書

加冠

宜爲

明和八卯十一月廿八日 御判

重豪公

鳴津勝袈裟

又五郎

829 全上

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

心觀院様御法事於東叡山御執行相濟外段被承之、恐悦旨

尤<sup>レ</sup>、紙面之趣令承知<sup>リ</sup>、恐<sup>ク</sup>、謹言、

〔<sup>采</sup>〕「明和八年」十一月廿八日 田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

830 重豪公御譜中

正文在文庫

寫

〔<sup>采</sup>〕宮之城家、久寛  
嶋津又五郎

右今日家格之通進上物差上、

御直元服被仰付、御土器御盃頂戴ニ<sup>テ</sup>御刀拜領被仰付<sup>レ</sup>、  
寛保二戌年亡嶋津圖書殿元服之節、御土器御盃頂戴ニ<sup>テ</sup>  
御肴被下<sup>リ</sup>得共、此節<sup>方</sup>又五郎<sup>口</sup>御肴不被下、向後御一  
門外御肴被下間敷旨被 仰出候條、帳面可記置<sup>レ</sup>、

〔<sup>采</sup>〕「明和八年」十一月廿八日 左京

右ノ包紙<sup>二</sup>五十七  
嶋津又五郎此節元服ニ<sup>テ</sup>付、御肴不被下旨、左京殿<sup>方</sup>村橋左膳  
御取次を以被仰渡<sup>レ</sup>、横切寫御書付之通、兒玉主左衛門致承知  
之、卯十一月廿九日納置之<sup>レ</sup>事

831 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、隨  
而蜜柑二箱・灸鮎一箱被獻之<sup>レ</sup>、各申談遂披露<sup>レ</sup>處一段  
之御仕合<sup>レ</sup>、恐<sup>ク</sup>、謹言、

〔<sup>采</sup>〕「明和八年」十二月十五日 松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

832 全上

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺  
御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、紙面之趣各申  
談及 上聞<sup>レ</sup>、恐<sup>ク</sup>、謹言、

〔<sup>采</sup>〕「明和八年」十二月十五日 松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

833 重豪公御譜中

正文在文庫

御札令披見<sup>レ</sup>、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤<sup>レ</sup>、隨  
而蜜柑二箱・灸鮎一箱被獻之<sup>レ</sup>、遂披露<sup>レ</sup>之處一段之御

仕合ハ、恐ク謹言、

〔宋〕「明和八年」十二月十五日  
阿部豊後守 正允判

松平薩摩守殿

834 重豪公御譜中、

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、隨

ゝ蜜柑二箱・御肴一種被獻之ハ、紙面之趣令承知ハ、恐  
く謹言、

〔宋〕「明和八年」十二月十八日  
田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

835 御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣令承  
知ハ、恐ク謹言、

〔宋〕「明和八年」十二月十八日  
田沼主殿頭 意次判

松平薩摩守殿

836 全上

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺ハ、益御安全御儀  
ハ間可御心易ハ、隨ハ琉球袖十端并纏節一箱被獻之ハ、

遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

〔宋〕「明和八年」十二月十八日  
阿部豊後守 正允判

松平薩摩守殿

837 全上

御札令披見ハ、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺ハ、益御安全御  
儀ハ間可御心易ハ、隨ハ琉球袖十端并纏節一箱被獻之ハ、

各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐ク謹言、

〔宋〕「明和八年」十二月十八日  
松平右京大夫 輝高判

松平薩摩守殿

838 重豪公御譜中

大隅郡佐多郷伊座敷村農民清右衛門者、蚤失ハ父獨事ハ母  
孝、母嘗患ハ足疾、清右衛門與ハ弟三右衛門ハ或負、或肩

與而意所之、如此凡二十年、今茲冬十二月、命官與  
清右衛門麩米拾五苞賞之焉、

839 全上

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相同外、益御安全御儀  
外間可御心易外、隨而琉球袖十端并御看一種被獻之外、  
紙面之趣令承知候、恐々謹言、

(朱) 〔明和八年〕 十二月廿二日

田沼主殿頭

意次判

松平薩摩守殿

840 重豪公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座候之間可御心易外、  
將亦御鷹之鶴拜領外條、以宿次差越之候、恐々謹言、

(朱) 〔明和八年〕 十二月廿七日

板倉佐渡守

勝清判

松平周防守

康福判

松平右京大夫  
輝高判  
松平右近將監  
武元判

松平薩摩守殿

841 全上

寫正文在右筆所

此狀箱并鶴壹、從江戸到薩摩國鹿兒島、松平薩摩守所江  
相届、返札可來外間、於江戸月番之老中江急度可持參者  
也、

(朱) 〔明和八年〕 卯十二月廿七日

右京印

(朱) 裏之端  
右宿中

842 全上

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平周防守可  
述外也、

(朱) 〔明和八年〕 十二月廿七日

家治公  
墨印

薩摩  
中將殿



全上

爲歲暮之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

(卷)

「明和八年」十二月廿七日

阿部豊後守

正允判

松平薩摩守殿